

一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

しも ごと し い せき 下 古 志 遺 跡

— 本 編 —



2001年3月

島根県出雲土木建築事務所
出雲市教育委員会

一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

しも ごと し い せき
下 古 志 遺 跡

— 本 編 —

2001年3月

島根県出雲土木建築事務所
出雲市教育委員会

序

一般県道多伎江南出雲線の古志町から下古志町にかけてのバイパス計画は、慢性的な渋滞を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、斐伊川放水路事業に伴う古志橋改築と併せ進めてまいりました。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、回避することの出来ない埋蔵文化財については、事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当バイパスにおいても、古志本郷遺跡、古志遺跡等多くの遺跡に囲まれた区間が道路予定地であり、平成7年度から出雲市教育委員会のご協力のもとに調査を行っています。

今回の調査箇所においても、弥生時代を中心とした多くの環濠や竪穴住居跡が見つかっており、古くから人々の生活が営まれていたことがわかりました。また、九州、瀬戸内地方で作られた土器片も出土し、人々の交流があったことをうかがわせる貴重な遺物と言えます。

本報告書は、平成7・8・9年度に実施した発掘調査の結果をとりまとめたものであります。

本書が、郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のために広く活用されることを期待するとともに、道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつ行われていることへの理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力を頂きました出雲市教育委員会並びに関係の皆様に対し、心より厚くお礼申し上げます。

平成13年（2001）3月

鳥根県出雲土木建築事務所
所 長 岩 倉 誠

序

出雲市教育委員会は鳥根県出雲土木建築事務所の依頼を受けて、一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う下古志遺跡発掘調査を実施しました。調査対象面積は9,000㎡を超える広範囲におよび、見込みを上回る多数の遺構や遺物が検出されたため、現地発掘調査には平成7年度から平成9年度の3カ年を要した、出雲市内の発掘調査としては大規模なものとなりました。

調査対象の下古志遺跡が存在する事業予定地付近は、当初、上組遺跡、正蓮寺北遺跡、弘法寺参道付近遺跡などが点在する地域として知られていました。しかし、本発掘調査の結果、遺構が途切れることがなく連続と確認されたことで、これらの遺跡は個別のものではなく、広範囲にわたるひとつの遺跡であることが明らかになりました。このため調査中は「正蓮寺周辺遺跡」と仮称を付けていましたが、平成11年(1999)1月にはこの遺跡が下古志町を中心とするものであることから、「下古志遺跡」に改名しております。

調査の結果、弥生時代から中・近世にかけての遺構や遺物が多数検出されました。中でも弥生時代の遺構は良好な遺物を伴うものが多く、当時の生活の一端をうかがい知る手がかりになることと期待しております。

下古志遺跡は古志遺跡群を形成する遺跡のひとつであり、近年この古志遺跡群では他の開発事業に伴う発掘調査が集中的に実施されております。これらの調査結果とあわせ、今回の調査成果が、さらなるこの地域の歴史解明の一助となり、埋蔵文化財に関する理解や歴史学習などに役立てば幸いです。

今後も、地元の皆様の熱意により、後世にこの遺跡が伝えられることを期待するとともに、発掘調査及び本書の刊行にあたりましては、鳥根県出雲土木建築事務所をはじめ、ご指導、ご協力を賜りました関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

平成13年(2001)3月

出雲市教育委員会
教育長 多 久 博

例 言

1. 本書は鳥根原出雲土木建築事務所の依頼を受けて出雲市教育委員会が平成7年度(1995)から平成9年度(1997)にかけて実施した、一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2. 発掘調査を行った遺跡と地番は次のとおりである。

下古志遺跡(鳥根原出雲市:旧 正蓮寺周辺遺跡)

A区:下古志町741外 B区:下古志町751外 C区:下古志町720外 D区:下古志町700-1外

E区:下古志町687-1外 F区:下古志町650-3外 G区:古志町1047-1外

3. 現地の発掘調査は、平成7年(1995)4月に着手し、平成10年(1998)2月に終了した。

4. 調査工程及び調査組織は次のとおりである。

調査工程

平成7年度～平成9年度 現地発掘調査及び室内整理作業

平成10年度～平成12年度 室内整理作業及び報告書作成

調査組織

調査主体 出雲市教育委員会

事務局 野津建一(文化・スポーツ課長:平成7年度)

後藤政司(文化振興課長:平成8年度～平成10年度)

大田 茂(文化振興課長:平成11年度～平成12年度)

川上 稔(文化振興課課長補佐:平成7年度～平成12年度)

調査指導 池田満雄(出雲市文化財審議会委員:平成7年度)

田中義昭(元鳥根大学法文学部教授:平成7年度～平成9年度)

広江耕史(鳥根原埋蔵文化財調査センター第六係長:平成7年度)

岩橋孝典(鳥根原埋蔵文化財調査センター主事:平成8年度～平成9年度)

調査員 米田美江子(文化振興課主任嘱託員:平成7～平成12年度、A区～D区担当)

三原一将(文化振興課副主任主事:平成8～平成12年度、E区～G区担当)

調査補助員 園山 薫(文化振興課嘱託員)、糸賀伸文、今岡司郎、今岡ひとみ、小村睦子、

佐々木紀明、佐藤三鈴、瀧尻幸平、竹田章乃、永田貴子、羽木伸幸、

松山美奈子(以上、文化振興課臨時職員)

5. 本書の執筆・編集は米田、三原が行ったが、第4章の考察においては、中村唯史(鳥根県立三瓶自然館)、渡辺正巳(文化財調査コンサルタント株式会社)の両氏から玉稿を賜った。

6. 遺構の略称記号は基本的に次のとおりであるが、遺構によっては性格が異なる場合もある。

SI:竪穴住居 SB:掘立柱建物 SE:井戸 SK:土坑 SA:楯列 P:柱穴 SD:溝状遺構

SX:その他の遺構

*但し、E区～G区の柱穴の数字上二桁は所在グリッドの下二桁を示す。

7. 遺物の出土量を示すために用いたコンテナはL540mm×W340mm×H150mm、ビニール袋はL380mm×W260mmのものである。

8. 本書で使用した方位はA区～D区は磁北、E区～G区とその他は座標北を示す。

9. 発掘調査及び報告書作成にあたっては、次の方々から有益なご助言をいただいた。記して謝意を表しておきたい。(敬称略)

赤澤徳明(福井県埋蔵文化財調査センター)、穴澤義功(製鉄遺跡研究会)、石川日出志(明治大学)、伊藤 実(広島県歴史民俗資料館)、岩井重道(広島県立埋蔵文化財調査センター)、内田律雄、角田徳幸、中川 寧、西尾克己、平石 充、松本岩雄、松山智弘、守岡正司、守岡利栄(島根県埋蔵文化財調査センター)、古賀信幸(山口市教育委員会)、坂井秀弥(文化庁)、榊原博英(浜田市教育委員会)、下條信行、田崎博之、吉田 広(愛媛大学)、高倉洋彰(西南学院大学)、竹広文明、山内靖喜、渡邊貞幸(島根大学)、武田恭彰、平井典子(総社市教育委員会)、次山 淳、村上 隆(奈良国立文化財研究所)、辻 信広(名和町教育委員会)、常松幹雄(福岡市教育委員会)、中野雅美(古代古備文化財センター)、野坂俊之(湖陵町教育委員会)、橋本裕行(奈良県立橿原考古学研究所)、長谷川博史(広島大学)、細田美樹(益田市教育委員会)、松本堅吾(斐川町教育委員会)、山崎順子(額原町教育委員会)

10. 発掘調査、遺物整理については、次の方々の協力を得た。

発掘調査 吾郷 栄、吾郷要子、安食 勉、池内宏史、石飛富美江、板倉セツ子、伊藤悟郎、井上 茂、江谷佳也、岡 省吉、岡 久男、奥田広信、落合平八郎、加藤敏栄、鎌田 悟、神田妙子、神田鶴子、来間達夫、公田悦郎、小玉 勇、小玉順子、小早川愛、駒孝次郎、曾田早苗、庄司 実、須藤敬了、須山 潤、高根常代、高橋ナツエ、滝 彩子、竹下加寿浩、竹田登美子、長島節子、中原嘉郎、鍋野良雄、西村誠治、野津一徳、秦野 茂、秦 幸正、原 郁子、福田 淳、布野暁也、前島正喜、三谷和香子、森脇繁義、山根和雄、山根康太、山根誠一、山根幸枝、吉田 栄、吉田貴俊、米山清司、四方田宏之、渡部政義、

遺物整理 荒木恵理子、飯國陽子、石川桂子、岩崎晶美、鶴口令子、河井栄子、蒲生倫子、川谷真弓、園山美千代、永田節子、吹野初子、矢田愛子

11. 遺物の実測については、調査員、調査補助員、室内整理作業員があつたほか、次の方々の協力を得た。

遺物実測 井上喜代女、村田理恵、山本教子、山本春香、佐々木知子、浅野智子、木谷麻衣子(以上、いなか舎)

12. 出土石製品石材鑑定は山内靖喜、中村唯史、羽木伸幸の各氏に依頼した。また、出土木製品の保存処理と樹種同定は株式会社吉田生物研究所に委託した。

13. 出土鉄器及び古銭のX線写真撮影については、島根県埋蔵文化財調査センターの間野大丞、澤田正明の両氏に依頼した。なお、その他の出土遺物の写真撮影は米田、三原が行った。

14. 本遺跡の出土遺物、実測図、写真、土層断面転写などは出雲市教育委員会で保管している。

目 次

序	
序	
例 言	
目 次	
挿図目次	
表 目 次	

第1章 位置と環境 (三原)	1
第2章 調査終了までの経緯 (三原)	3
第3章 調査の結果	
A区の調査結果 (米田)	5
B区の調査結果 (米田)	65
C区の調査結果 (米田)	129
D区の調査結果 (米田)	183
E区の調査結果 (三原)	277
F区の調査結果 (三原)	337
G区の調査結果 (三原)	371
第4章 考 察	
下古志遺跡の立地と環境 (中村)	468
下古志遺跡発掘調査に伴う花粉分析等調査 (渡辺)	472
報告書抄録	486
写真図版編 (別冊)	
観察表編 (別冊)	

挿 図 目 次

第1章 位置と環境		A32図 SD14・16実測図	30
第1図 下古志遺跡跡辺の主要遺跡(S=1/75,000)	2	A33図 SD14出土遺物拡大部	30
第2章 調査の経緯と概要		A34図 SD14出土遺物実測図	30
第2図 下古志遺跡調査区配置図(S=1/8,000)	4	A35図 SD17出土遺物実測図	31
第3章 調査の結果		A36図 SD28実測図	32
A区の結果		A37図 SD28遺物出土状況図	33・34
A01図 A区遺構配置図及び土層断面図	7・8	A38図 SD28出土遺物実測図1	35
A02図 近世遺構及び畝状遺構平面図	9・10	A39図 SD28出土遺物実測図2	36
A03図 SK23・34実測図	11	A40図 SD28出土遺物実測図3	37
A04図 近世遺構出土遺物実測図	11	A41図 SD28出土遺物実測図4	38
A05図 畝状遺構出土遺物実測図	12	A42図 SD28出土遺物実測図5	39
A06図 SI01実測図	13	A43図 大溝実測図	40
A07図 SI01礎及び炭化物出土状況図	13	A44図 大溝遺物出土状況図	41・42
A08図 SI01出土遺物実測図	13	A45図 大溝出土遺物実測図1	44
A09図 SI02実測図	14	A46図 大溝出土遺物実測図2	45
A10図 SI02出土遺物実測図	15	A47図 大溝出土遺物実測図3	46
A11図 SI03・04実測図	16	A48図 大溝出土遺物実測図4	47
A12図 SI03・04出土遺物実測図	17	A49図 大溝出土遺物実測図5	48
A13図 SK26実測図	17	A50図 大溝出土遺物実測図6	49
A14図 SK26出土遺物実測図	17	A51図 大溝出土遺物実測図7	50
A15図 SK28実測図	18	A52図 大溝出土遺物実測図8	50
A16図 SK28出土遺物実測図	19	A53図 大溝西壁掘り直し土層断面図	51
A17図 SK29実測図	20	A54図 大溝内検出井口遺物出土状況図	53
A18図 SK29出土遺物実測図	20	A55図 SB01実測図	55
A19図 SK30実測図	21	A56図 SB03実測図	56
A20図 SK30出土遺物実測図	21	A57図 SB04実測図	56
A21図 SK31実測図	22	A58図 SB02・SA02・03実測図	57
A22図 SK31出土遺物実測図	23	A59図 SB05実測図	58
A23図 SK36実測図	23	A60図 SB06実測図	58
A24図 SD01～04実測図	24	A61図 SA01実測図	58
A25図 SD01遺物出土状況図	25	A62図 SB01～SB05・SA01・C14Gr-P1出土遺物実測図	59
A26図 SD01出土遺物実測図	26	A63図 C7Gr-P3木材出土状況図	60
A27図 SD04出土遺物実測図	27	A64図 C14Gr-P1遺物出土状況図	60
A28図 SD10・17実測図	27	A65図 SI01・SK29・SD01・大溝出土石器実測図	61
A29図 SD10出土遺物実測図	27	A66図 柱穴出土遺物実測図	61
A30図 SD11～13実測図	28	A67図 遺構外出土遺物実測図	62
A31図 SD11出土遺物実測図	28	A68図 A区柱穴時期別平面図	63

B区の調査結果

B01図	B区遺構配置図及び上層断面図	67・68	B39図	SD47出土遺物実測図	107
B02図	Bf<近世遺構配置図	69・70	B40図	SB01実測図	109
B03図	SI01実測図	72	B41図	SB02実測図	109
B04図	SI01・03出土遺物実測図	73	B42図	SB01・02出土遺物実測図	109
B05図	SI03実測図	74	B43図	SB03実測図	110
B06図	SI03遺物出土状況図	75	B44図	SB03出土遺物実測図	110
B07図	SI04実測図	76	B45図	SB04実測図	110
B08図	SI04遺物出土状況図	77・78	B46図	SB04出土遺物実測図	110
B09図	SI04出土遺物実測図1	80	B47図	SB05実測図	111
B10図	SI04出土遺物実測図2	81	B48図	SB05出土遺物実測図	111
B11図	SK05実測図	83	B49図	SB06実測図	112
B12図	SK05遺物出土状況図	83	B50図	SB07実測図	112
B13図	SK05出土遺物実測図	84	B51図	SB08実測図	112
B14図	SK10実測図	86	B52図	SB07・08出土遺物実測図	112
B15図	SK10遺物出土状況図	87	B53図	SE01実測図1	114
B16図	SK10出土遺物実測図1	88	B54図	SE01実測図2	115
B17図	SK10出土遺物実測図2	89	B55図	SE01出土遺物実測図	116
B18図	SK10出土遺物実測図3	90	B56図	SE02・03実測図	117
B19図	SK11実測図	91	B57図	SE02出土遺物実測図	118
B20図	SK11出土遺物実測図	91	B58図	SE04実測図	119
B21図	SK25実測図	92	B59図	SE05実測図	120
B22図	SK25遺物出土状況図	93	B60図	SE05出土遺物実測図	120
B23図	SK25出土遺物実測図1	94	B61図	SE06実測図	121
B24図	SK25出土遺物実測図2	95	B62図	SE06出土遺物実測図	121
B25図	SK28実測図	96	B63図	土器群1遺物出土状況図	122
B26図	SK28出土遺物実測図	97	B64図	土器群1及びC22Gr-P2出土遺物実測図	123
B27図	SK45実測図	98	B65図	B16Gr-P6実測図	124
B28図	SK45遺物出土状況図	98	B66図	B16Gr-P6出土遺物実測図	124
B29図	SK45出土遺物実測図	99	B67図	SK16・27・39・SD29出土遺物実測図	124
B30図	SD01・02・09・10・18・37～39・44・45・48～50・52・53 土層断面図	100	B68図	SI03・04・SK10・SE01・02・04・05出土石器実測図	125
B31図	SD02～04・59出土遺物実測図	100	B69図	柱穴出土遺物実測図	125
B32図	SD03・04・59実測図	101	B70図	遺構外出土遺物実測図1	126
B33図	SD18出土遺物実測図	102	B71図	遺構外出土遺物実測図2	127
B34図	SD19・21・22・24・26～28実測図及びSD26遺物出土 状況図	103	B72図	B区柱穴時期別平面図	128
B35図	SD19・21・24・26出土遺物実測図	104			
B36図	SD45・48～50・52出土遺物実測図	105			
B37図	SD58実測図	105			
B38図	SD47実測図	107			

C区の調査結果

C01図	C区遺構配置図及び土層断面図	131・132
C02図	SI01実測図	133
C03図	SI01遺物出土状況図	134
C04図	SI01出土遺物実測図	135
C05図	SI02実測図	136

F13図 SK02・SK03実測図(S=1/40)	347	G03図 G区Dラインセクション図1(S=1/100)	375
F14図 SK03出土弥生土器実測図(S=1/3)	347	G04図 G区Dラインセクション図2(S=1/100)	376
F15図 SK07実測図(S=1/40)	348	G05図 SI01実測図(S=1/40)	377
F16図 SK07出土弥生土器・土製品実測図(S=1/3)	348	G06図 SI01出土弥生土器実測図(S=1/3)	377
F17図 SK12実測図(S=1/20)	348	G07図 SI01出土石製品実測図(S=1/2)	378
F18図 SK12出土中世土師器実測図(S=1/3)	349	G08図 SI02実測図(S=1/40)	379
F19図 その他の主要土坑実測図(S=1/40)	350	G09図 SI02出土弥生土器実測図(S=1/3)	380
F20図 その他の主要土坑出土土器等実測図(S=1/3)	351	G10図 SB01実測図(S=1/40)	381
F21図 主要ピット実測図(S=1/40)	352	G11図 SB02実測図(S=1/40)	382
F22図 主要ピット出土土器等実測図(S=1/3)	353	G12図 SB03実測図(S=1/40)	383
F23図 SD01実測図(S=1/60)	354	G13図 SB04実測図(S=1/40)	384
F24図 SD01土層図(S=1/40)	355	G14図 SB05実測図(S=1/40)	386
F25図 SD01出土弥生土器実測図1(S=1/3)	356	G15図 SB06実測図(S=1/40)	387
F26図 SD01出土弥生土器実測図2(S=1/3)	357	G16図 SB07実測図(S=1/40)	388
F27図 SD01出土弥生土器実測図3(S=1/3)	358	G17図 SB08実測図(S=1/60)	389
F28図 SD01出土弥生土器実測図4(S=1/3)	359	G18図 SB08主柱穴エレベーション図(S=1/60)	390
F29図 SD01出土弥生土器実測図5(S=1/3)	360	G19図 竪立柱建物跡出土土器実測図(S=1/3)	390
F30図 SD01出土弥生土器実測図6(S=1/3)	361	G20図 SB08出土金属製品実測図(S=1/2)	391
F31図 SD01出土弥生土器実測図7(S=1/3)	362	G21図 SE01実測図(S=1/40)	391
F32図 SD02実測図(S=1/60)	363	G22図 SE01出土土器実測図(S=1/3)	392
F33図 SD02土層図(S=1/60)	363	G23図 SE01出土鉄製品実測図(S=1/2)	392
F34図 SD02出土土師質土器実測図(S=1/3)	363	G24図 SE02実測図(S=1/40)	393
F35図 SD04実測図(S=1/60)	364	G25図 SE02出土土器実測図(S=1/3)	394
F36図 SD04出土土師器・陶磁器実測図(S=1/3)	364	G26図 SE02出土鉄製品実測図(S=1/2)	394
F37図 SX01実測図(S=1/40)	365	G27図 SE03実測図(S=1/40)	394
F38図 SX01出土陶器実測図(S=1/3)	365	G28図 SE03出土土師器壺実測図(S=1/3)	395
F39図 SD03実測図(S=1/60)	366	G29図 SE03出土土器実測図(S=1/3)	396
F40図 SD07実測図(S=1/50)	366	G30図 SE04実測図(S=1/40)	397
F41図 SD08実測図(S=1/50)	367	G31図 SE04出土中世土師器実測図(S=1/3)	397
F42図 SX02実測図(S=1/40)	368	G32図 SE05実測図(S=1/40)	398
F43図 SX02出土中世土師器実測図(S=1/3)	368	G33図 SE05出土土器等実測図(S=1/3)	399
F44図 SX03実測図(S=1/40)	368	G34図 SE06実測図(S=1/40)	399
F45図 SX03出土中世土師器実測図(S=1/3)	368	G35図 SE08実測図(S=1/40)	400
F46図 F区遺構外出土弥生土器実測図(S=1/3)	369	G36図 SE08出土土器実測図(S=1/3)	400
F47図 F区遺構外出土須恵器・土師器・陶磁器等実測図(S=1/3)	370	G37図 SE09実測図(S=1/40)	401
F48図 F区遺構外出七石鉢実測図(S=1/2)	370	G38図 SE09土層図(S=1/40)	402
		G39図 SE09出土土器・陶磁器等実測図(S=1/3)	402
		G40図 SE10実測図(S=1/40)	403
		G41図 SE10出土井戸側・水溜実測図(S=1/8)	404
		G42図 SE10出土中世土師器実測図(S=1/3)	405
		G43図 SK22実測図(S=1/40)	405
G区の調査結果			
G01図 G区遺構配置図1(S=1/200)	373		
G02図 G区遺構配置図2(S=1/200)	374		

G44図	SK22出土中世土師器等実測図(S=1/3)	406	G85図	SD04出土弥生土器実測図1(S=1/3)	435
G45図	SK25実測図(S=1/40)	407	G86図	SD04出土弥生土器実測図2(S=1/3)	436
G46図	SK25出土中世土師器実測図(S=1/3)	407	G87図	SD04出土弥生土器実測図3(S=1/3)	437
G47図	SK02・SK04実測図(S=1/40)	408	G88図	SD04出土石製品実測図(S=1/2)	438
G48図	SK02・SK04出土弥生土器実測図(S=1/3)	408	G89図	SD26実測図(S=1/40)	439
G49図	SK04出土石製品実測図(S=1/2)	408	G90図	SD26出土土器・陶磁器実測図(S=1/3)	440
G50図	SK03実測図(S=1/40)	409	G91図	SD26出土磁石実測図(S=1/2)	440
G51図	SK03出土弥生土器実測図1(S=1/3)	409	G92図	SD26出土鉄製品実測図(S=1/2)	440
G52図	SK03出土弥生土器実測図2(S=1/3)	410	G93図	SD32実測図(S=1/80・1/40)	441
G53図	SK03出土弥生土器実測図3(S=1/3)	411	G94図	SD32出土土師器・陶磁器実測図(S=1/3)	442
G54図	SK15実測図(S=1/40)	412	G95図	SD32出土磁石実測図(S=1/2)	442
G55図	SK15出土中世土師器実測図(S=1/3)	412	G96図	SD33・SD34実測図(S=1/80)	443
G56図	SK21実測図(S=1/40)	412	G97図	SD33・SD34土器(S=1/40)	443
G57図	SK21出土中世土師器実測図(S=1/3)	412	G98図	SD34出土土器・陶磁器実測図(S=1/3)	443
G58図	P2649実測図(S=1/20)	413	G99図	SD34出土金属製品実測図(S=1/2)	443
G59図	P2649出土弥生土器実測図(S=1/3)	413	G100図	SD35実測図(S=1/40)	444
G60図	P2649出土磁石実測図(S=1/2)	414	G101図	SD35土層図(S=1/20)	445
G61図	P3715実測図(S=1/10)	414	G102図	SD35出土土器・土製品実測図(S=1/3)	445
G62図	P3715出土手捏土器実測図(S=1/3)	414	G103図	SD03実測図(S=1/60)	446
G63図	SA01～SA03実測図(S=1/60)	416	G104図	SD07実測図(S=1/60)	446
G64図	SA04～SA07実測図(S=1/60)	417	G105図	SD08・SD09実測図(S=1/60)	447
G65図	SA08～SA10実測図(S=1/60)	418	G106図	SD10実測図(S=1/60・1/40)	448
G66図	SA01出土陶磁器実測図(S=1/3)	419	G107図	SD11～SD13実測図(S=1/80)	449
G67図	SA01出土磁石実測図(S=1/2)	419	G108図	SD16実測図(S=1/60)	450
G68図	SA01出土金属製品実測図(S=1/2)	419	G109図	SD17実測図(S=1/60)	450
G69図	その他の主要ビット実測図1(S=1/40)	421	G110図	SD28実測図(S=1/60)	451
G70図	その他の主要ビット実測図2(S=1/40)	422	G111図	SD29実測図(S=1/60)	451
G71図	その他の主要ビット出土土器等実測図(S=1/3)	423	G112図	SD30実測図(S=1/60)	452
G72図	P4032出土刀実測図(S=1/2)	424	G113図	SD31実測図(S=1/60)	452
G73図	SD01実測図(S=1/60)	425	G114図	SD37実測図(S=1/60)	453
G74図	SD01出土弥生土器実測図1(S=1/3)	426	G115図	その他の主要溝状遺構出土土器等実測図(S=1/3)	454
G75図	SD01出土弥生土器実測図2(S=1/3)	427	G116図	杭列1・杭列2配置図(S=1/200)	455
G76図	SD01出土弥生土器実測図3(S=1/3)	428	G117図	杭列1実測図(S=1/40)	456
G77図	SD01出土弥生土器実測図4(S=1/3)	429	G118図	杭列2実測図(S=1/40)	457
G78図	SD01出土弥生土器実測図5(S=1/3)	430	G119図	SK11・SK12実測図(S=1/40)	458
G79図	SD01出土磁石実測図(S=1/2)	431	G120図	SK14実測図(S=1/40)	458
G80図	SD02実測図(S=1/60)	432	G121図	SK16実測図(S=1/40)	459
G81図	SD02出土弥生土器実測図1(S=1/3)	432	G122図	SK04実測図(S=1/40)	459
G82図	SD02出土弥生土器実測図2(S=1/3)	433	G123図	その他の主要遺構出土土器実測図(S=1/3)	459
G83図	SD02出土土師器実測図(S=1/3)	433	G124図	SK14出土鉄製品実測図(S=1/2)	460
G84図	SD04実測図(S=1/60)	434	G125図	G区遺構外出土弥生土器実測図1(S=1/3)	461

G126図 G区遺構外出土弥生土器実測図2(S=1/3) ……462	第14図 C区SE01の花粉ダイアグラム ……480
G127図 G区遺構外出土土師器実測図(S=1/3) ……463	第15図 D区SD05の花粉ダイアグラム ……480
G128図 G区遺構外出土土器実測図(S=1/3) ……464	第16図 D区大溝西の花粉ダイアグラム ……480
G129図 G区遺構外出土陶磁器実測図(S=1/3) ……465	第17図 E区SD07の花粉ダイアグラム ……481
G130図 G区遺構外出土土器製品実測図(S=1/2) ……465	第18図 E区SD13の花粉ダイアグラム ……481

第4章 考察

下古志遺跡の立地と環境

第3図 周辺地形と地質分布 ……468
第4図 出雲平野西部の地形 ……468
第5図 出雲平野周辺の占地理図 ……469
第6図 下古志遺跡付近の地下地質断面図 ……469
第7図 出雲平野西部の地形断面と遺跡立地 ……470
第8図 旧河道と遺跡分布 ……471

下古志遺跡発掘調査に伴う花粉分析等調査

第 9図 試料採取地点の配置 ……479	第29図 E区SD07の珪藻ダイアグラム ……484
第10図 A区SD28の花粉ダイアグラム ……479	第30図 E区SD07の珪藻総合ダイアグラム ……484
第11図 A区SD01の花粉ダイアグラム ……479	第31図 E区SD13の珪藻ダイアグラム ……485
第12図 B区D27Grの花粉ダイアグラム ……479	第32図 E区SD13の珪藻総合ダイアグラム ……485
第13図 B区SD49の花粉ダイアグラム ……480	第33図 E区SD17の珪藻ダイアグラム ……485
	第34図 E区SD17の珪藻総合ダイアグラム ……485

表 目 次

第1表 大溝4期別出土遺物状況表 ……5	第4表 G区主要基準坑座標一覧表 ……372
第2表 E区主要基準坑座標一覧表 ……278	第5表 各調査区と花粉帯 ……478
第3表 F区主要基準坑座標一覧表 ……388	

第1章 位置と環境

下古志遺跡は出雲平野の南丘陵寄り、神戸川左岸に位置しており、古志本郷遺跡、田畑遺跡などとともに古志遺跡群を形成する遺跡のひとつである。南北を中国山地と島根半島に、東西を宍道湖と日本海によって圍繞された出雲平野は、中国山地に源流を辿りかつてともに日本海に注いでいた斐伊川・神戸川の沖積作用により形成された沖積平野である。沖積作用が開始されたのは約3600年前頃と推定されており、それ以前は日本海から現在の松江市辺りまでは古宍道湖湾が占めていたと考えられることから、遺跡が出現する箇所は出雲平野形成と密接に関わっているようである。以下に古代の出雲平野における集落の消長について概観しておきたい。

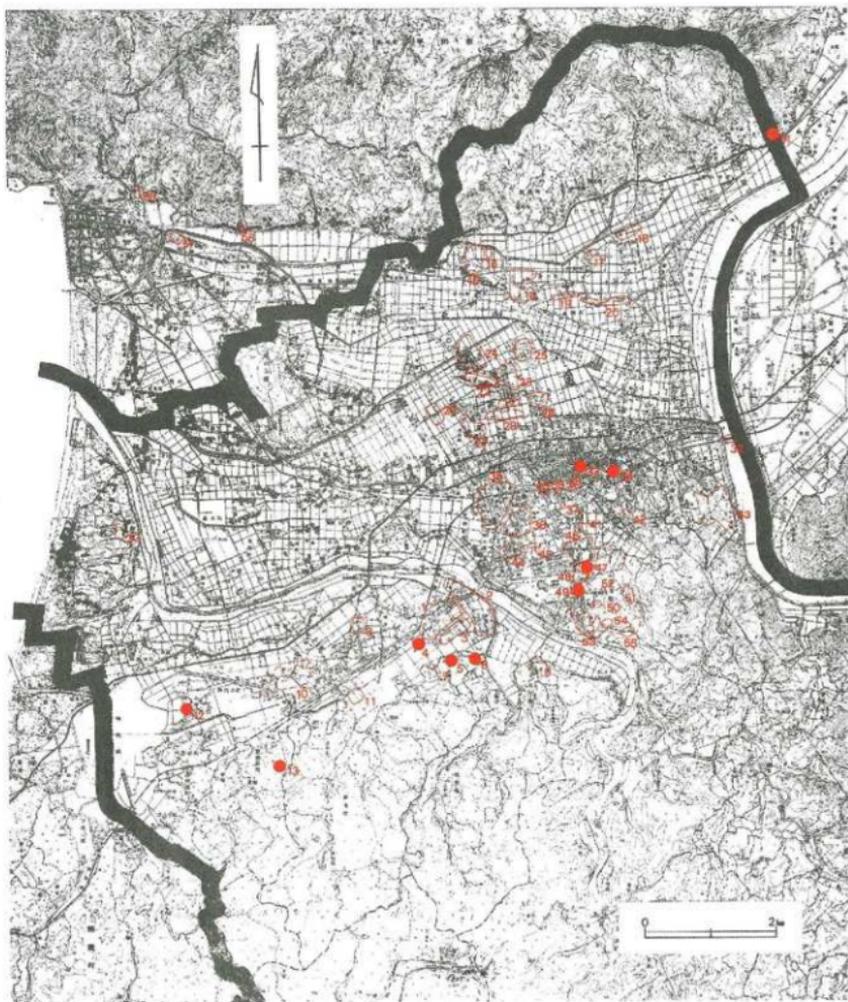
縄文時代には出雲平野は古宍道湖湾が占めていたと考えられ³⁰⁾、遺跡の出現は山麓付近などに限られていたようである。早期末の遺跡としては、上長浜貝塚、菱根遺跡があげられる。後・晩期の遺跡としては、以前から矢野遺跡、大社境内遺跡が知られていたが、近年の調査で蔵小路西遺跡³¹⁾、三田谷Ⅰ遺跡³²⁾などでこの時期の遺物が確認されている。

弥生時代前期の遺跡としては、矢野遺跡、原山遺跡などがあげられる。弥生時代中期からは神門水海の江線付近に、天神、四絡、古志遺跡群などの大規模な集落が出現する。近年の調査では、天神遺跡³³⁾、古志本郷遺跡³⁴⁾などで環濠と考えられる大溝の検出が相次いでおり、出雲平野においても環濠を配した集落形態が広く採用されたと考えられる。これらの遺跡を背景に、弥生時代後期にはこの地の首長を葬ったとされる西谷3号墓など6基の四隅突出型墳丘墓を含む、西谷墳墓群が平野の南丘陵上に築造されるに至る。

古墳時代前期・中期には集落跡はほとんど確認されていない。この時期の古墳として、大寺古墳、山地古墳などが知られているものの、その数は少ない。集落が衰退傾向にあったと推定される。しかし、後期後半以降には、島根県内では最大級の石室を有する今市大念寺古墳、上塩冶築山古墳を筆頭に多数の古墳が築造され、上塩冶横穴墓群に代表される横穴墓群が飛躍的に増える。

奈良時代以降のこの地の様子は、733年に編纂された『出雲国風土記』で迎れるほか、近年の調査でも新発見が相次いでいる。光明寺3号墓³⁵⁾では石櫃が検出され、既知の小坂古墳や朝山古墓とともに、この地の初期火葬墓の解明に進展をみせつつある。また、古志本郷遺跡では官衙跡と推定される大型の掘立柱建物跡が確認され³⁶⁾、神門郡家との関連が注目されている。また、蔵小路西遺跡からは、周囲を濠で圍繞した約1ヘクタールの規模を有する館跡が発見され、「中世朝山家惣領家」の居館である可能性が指摘されている³⁷⁾。

今回の調査地は古志本郷遺跡の西で、田畑遺跡の北に位置しており、調査前までは正蓮寺北遺跡、弘法寺参道付近遺跡、上組遺跡が点在すると捉えられていた箇所である。これらの遺跡は1988年から翌年にかけて出雲市教育委員会が実施した、神門地区遺跡詳細分布調査³⁸⁾の一環として行われた踏査によって発見された遺跡である。その際、正蓮寺北遺跡では弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶器が、弘法寺参道付近遺跡からは弥生土器、土師器、須恵器、陶器が、上組遺跡からは土師器、須恵器、陶器、水晶の未製品、瑪瑙の原石などが出土している。



第1図 下古志遺跡周辺の主要遺跡 (S=1/5,000)

1. 下古志遺跡
2. 古志本郷遺跡
3. 田畑遺跡
4. 宝塚古墳
5. 妙蓮寺山古墳
6. 放れ山古墳
7. 地藏堂横穴墓群
8. 知井宮多聞院遺跡
9. 井上横穴墓群
11. 浅瀬遺跡
12. 山地古墳
13. 北光寺古墳
14. 高浜Ⅰ遺跡
15. 高浜Ⅱ遺跡
16. 里方八石原遺跡
17. 里方別所遺跡
18. 山持川川岸遺跡
19. 高岡遺跡
20. 稲岡遺跡
21. 小山遺跡第1地点
22. 小山遺跡第2地点
23. 小山遺跡第3地点
24. 矢野遺跡
25. 大塚遺跡
26. 白枝鬼神遺跡
27. 渡橋沖遺跡
28. 姫原西遺跡
29. 蔵小路西遺跡
30. 上長浜貝塚
31. 大寺古墳
32. 斐伊川鉄橋遺跡
33. 塚山古墳
34. 今市大念寺古墳
35. 天神遺跡
36. 高西遺跡
37. 藤ヶ森南遺跡
38. 藤ヶ森遺跡Ⅰ地点
39. 藤ヶ森遺跡Ⅱ地点
40. 善行寺遺跡
41. 角田遺跡
42. 大廻城跡(向山城)
43. 西谷墳墓群
44. 弓原遺跡
45. 神門寺境内廃寺
46. 宮松遺跡
47. 上塩冶築山古墳
48. 築山遺跡
49. 上塩冶地藏山古墳
50. 半分城跡
51. 大井谷城跡
52. 上塩冶横穴墓群
53. 三田谷Ⅰ遺跡
54. 三田谷Ⅱ、Ⅲ遺跡
55. 光明寺3号墓
56. 出雲大社境内遺跡
57. 原山遺跡
58. 斐根遺跡

第2章 調査終了までの経緯

平成5年(1993)3月19日、鳥根県出雲土木建築事務所から出雲市教育委員会に一般県道多伎江南出雲線改良工事予定地の埋蔵文化財の有無について照会があった。工事予定地付近には周知の遺跡である正蓮寺北遺跡、上組遺跡などが点在していたため、出雲市教育委員会が現地踏査を行ったところ、周知の遺跡の範囲外にも新たな遺物散布地を発見した。これを受け平成5年6月8日に、鳥根県出雲土木建築事務所、鳥根県教育委員会、出雲市教育委員会の三者によって協議が行われた。その結果、試掘調査によって遺跡の範囲を確認し、遺跡の範囲については本調査を実施することで三者が合意に至った。

試掘調査は平成5年10月25日から同年11月5日にわたり出雲市教育委員会が実施した。工事予定地は760m×12mの範囲であったため、便宜上A区～G区の7区間に区分し、3m×5mのトレンチを各区に数箇所ずつ設置し試掘調査に臨んだ。その結果、すべてのトレンチから遺構と遺物が検出された。このため、出雲市教育委員会はA区～G区の全区間を遺跡の範囲と判断し、A区とB区を周知の遺跡である正蓮寺北遺跡、上組遺跡の一部と捉え、新たに発見されたC区～F区の遺跡名を上組北遺跡、G区を古志本郷西遺跡と名付け、文化財保護法に基づく遺跡発見の通知を平成5年12月6日付けで行った。一方、鳥根県出雲土木建築事務所に対しては試掘調査結果を報告し、本調査実施に向けての協議を申し入れた。この協議の結果、平成7年度から平成8年度の2カ年で発掘調査を実施することで合意した。

以上の経緯を経て、出雲市教育委員会は平成7年(1995)4月から現地発掘調査に着手し、年度内にA区～C区までの調査を終了した。翌平成8年度にはD区～G区の調査を完了する予定であったが、当初の予定を上回る遺構や遺物が検出されたのに伴い、鳥根県出雲土木建築事務所との協議の結果、F区的全範囲とG区の大部分の調査を平成9年度に持ち越すことになった。したがって、現地発掘調査をすべて終了したのは平成10年(1998)2月となっている。なお、調査期間のうち平成7年12月2日、平成8年12月21日、平成10年3月14日には現地説明会を開催した。いずれも多数の参加者があり参加人数は延べ400人を数える。また、遺跡名については調査期間中、調査対象遺跡である正蓮寺北遺跡、上組遺跡、上組北遺跡、古志本郷西遺跡をまとめて「正蓮寺周辺遺跡」と呼称していたが、平成11年(1999)に鳥根県教育委員会と協議して、弘法寺参道付近遺跡を含めて「下古志遺跡」に改名している。

また、平成10年度から平成12年度の3カ年は室内整理作業及び報告書作成を行い、平成13年(2001)3月に本書を発行するに至った。

注

注1) 中村唯史「上長浜貝塚と周辺の古環境」『上長浜貝塚』出雲市教育委員会 1996

注2) 建設省松江国道工事事務所・鳥根県教育委員会『蔵小路西遺跡 - 松江国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』1999

注3) 建設省出雲工事事務所・鳥根県教育委員会『三田谷Ⅰ遺跡(VOL.1) 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ』1999

注4) 鳥根県出雲土木建築事務所・出雲市教育委員会『大神遺跡第7次発掘調査報告書 出雲市駅付近連続立体交差事業地内』1997

注5) 建設省出雲工事事務所・鳥根県教育委員会『古志本郷遺跡Ⅰ 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ』1999

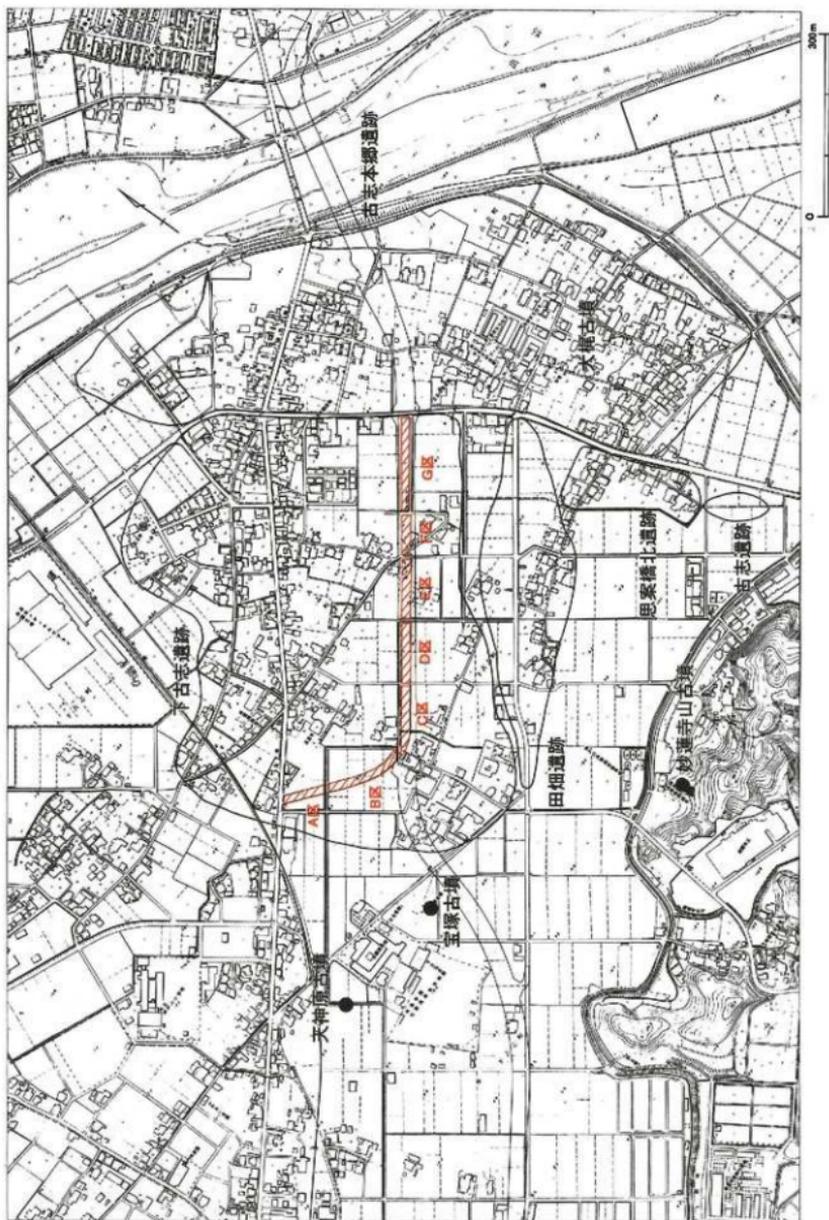
出雲市教育委員会『市道本郷新宮線道路改良工事に伴う古志本郷遺跡第6次調査報告書』1998

注6) 建設省出雲工事事務所・出雲市教育委員会『光明寺3号墓・4号墳 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』2000

注7) 鳥根県教育委員会『斐伊川放水路発掘遺跡 PART6』2000

注8) 注2)に同じ

注9) 出雲市教育委員会『神門地区遺跡分布調査報告書』1989



第2図 下古志遺跡調査区配置図 (S=1/6000)

第3章 調査の結果

A区の調査結果

1. A区の概要

A区は、調査区の西北に位置し、旧国道から南へ70m、幅10m強の区間である。5mピッチの杭を打ち、北から南へ1～14、西から東へA～Cとグリッドを設定した。北西角はA1Grと称する。

現地表面から30～40cmの厚さで、現耕作上下より近世の水田耕作跡・土坑2基を、その下層から中世の畝状の畑跡、さらにその下層から、層位を別にはできなかったが奈良・平安時代と弥生時代中期末～古墳時代初頭の遺構を中心に生活面を検出した。また調査区北端からは2条の大溝を検出している。

A01図の全体平面図は奈良・平安時代以前の遺構である。

2. 遺構と遺物

A区からは上記したように、近世から弥生時代までの遺構が重複している。以下、各遺構の詳細と出土遺物について述べる。

近世遺構 (A01～A04図)

近世落ち込み・近世SD01～04は、A～C-6～14Gr内、標高8.1mで検出し、ほぼ東西南北に軸を設定している。覆土は、2層（褐灰色土）で、砂粒子を多く含む粘性である。2層下には金床層と考えられる3層（赤褐色土）・5層（暗橙褐色土）・7層（橙褐色土）が堆積しているので、2層は水田耕作跡と考えられる。

SK23・34は土坑である。B・C-3Gr内、標高7.95mで検出した。約2m離れており、それぞれ楕円形を呈する。SK23は95×88cm、深さ33cmの堀方で、長軸がN-16°-Wに位置する。直立した立ち上がり呈し、内には底板の周りに板を囲い2段のタガで止めてある木桶（75×60cm、深さ40cm）を埋置している。木桶内には大津瓦が立てかけた状態で検出された。

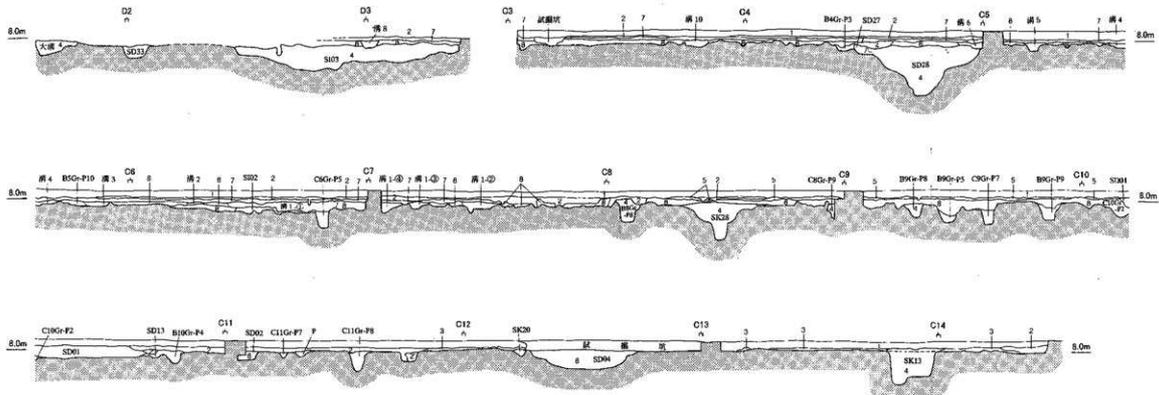
SK34は95×75cm、深さ20cmの堀方で、長軸がE-10°-Nに位置する。壁面にタガの痕跡が観察され、底面にも木片が残存しているので、SK23同様木桶が埋置されていたと考えられる。また中央には大津瓦が直立状態で出土した。

出土遺物は、陶磁器類、染め付け、播鉢、瓦質土器、瓦などがあるが、A04図にはそのうち図下できょうのもののみを掲載した。近世SD01からA04-1、近世SD04からA04-2、SK23からA04-3、SK34からA04-4が出土した。1は瓦質土器の平鉢である。浅く径の広いボール状を呈し、口縁部は横に肥厚して面を持つ。2は弥生土器の蓋である。下層の遺構からの混入品であろう。やや大型になると思われるつまみ部分で、中央の穿孔はかなり大きく空いている。3は近世陶器で鉄釉の小皿である。口縁部は断面「L」字状を呈する。4は操業宝永5年（1708）の大津瓦の平瓦と思われるが、コーナーが「L」字状に切られている。半分以上が欠損しているので形状は不明である。

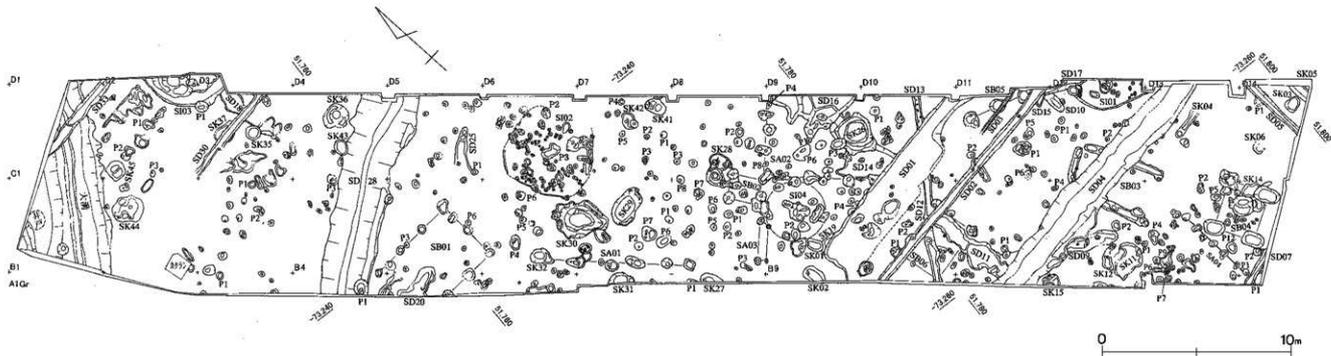
以上の近世遺構は、大津瓦が出土したSK23・34は近世でも18世紀以降であるが、他の遺構の時期・性格などの詳細は不明である。

畝状遺構 (A01・A02・A05図)

A～C-1～8Gr内、標高8m弱で検出した。現存長18m、幅20～120cm、深さ5～15cm、溝間20～40cmを測

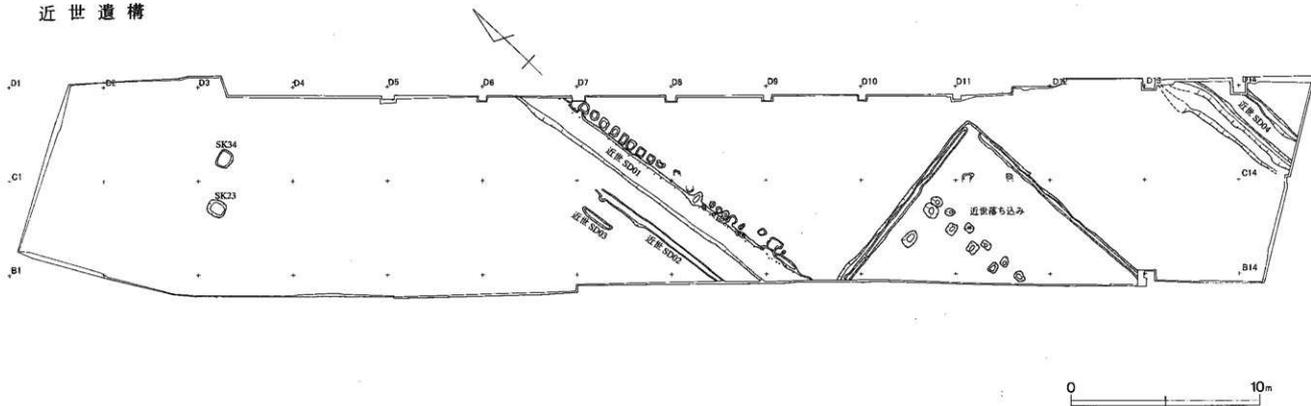


- 1層 耕作土
- 2層 褐色土(砂粒子多く含む、ブロック状に赤褐色粒子・地山の黄褐色砂質土・灰色土が混入する)→近常速凍層土
- 3層 赤褐色土(砂粒子含む)
- 3層 褐色土(ベタベタして少々粘性あり)
- 4層 赤褐色土(遺構内)
- 5層 暗褐色土(砂粒子多く、赤褐色粒子含む、粘性なし)
- 6層 褐色土(遺構内)
- 7層 暗褐色土
- 8層 赤褐色土
- 8層 地山の混合層
- 9層 暗褐色土→近常速凍層土

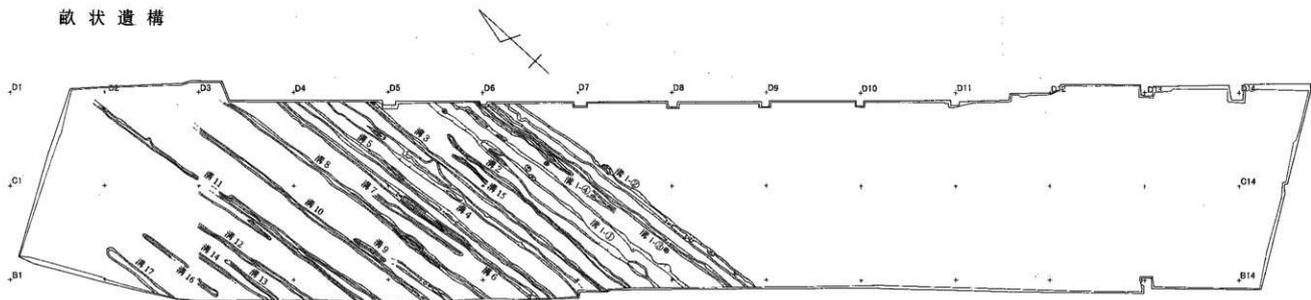


A01図 A区遺構配置図 (S=1/200) 及び土層断面図 (S=1/50)

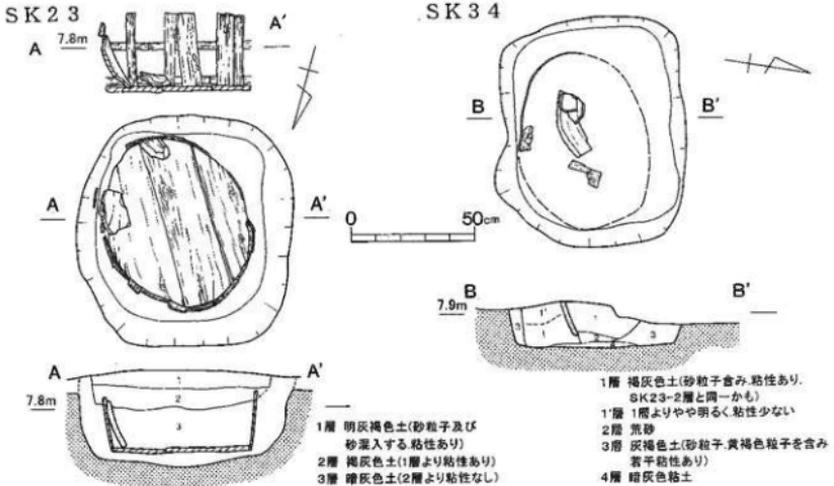
近世遺構



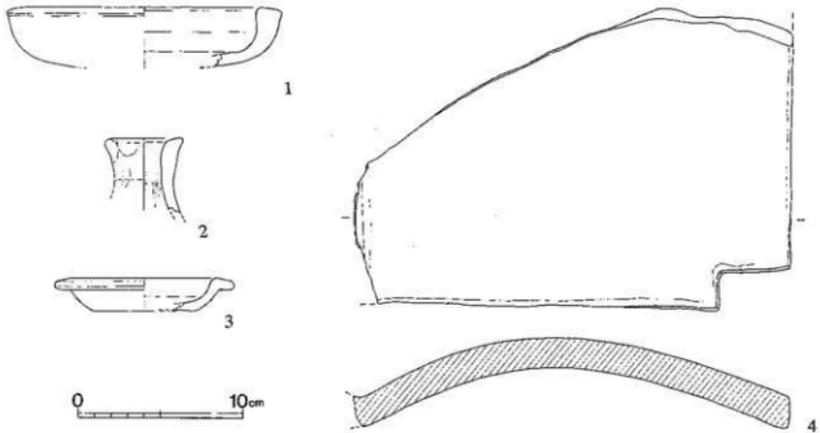
畝状遺構



A02図 近世遺構及び畝状遺構平面図 (S=1/200)



A03図 SK23・34実測図 (S=1/50)

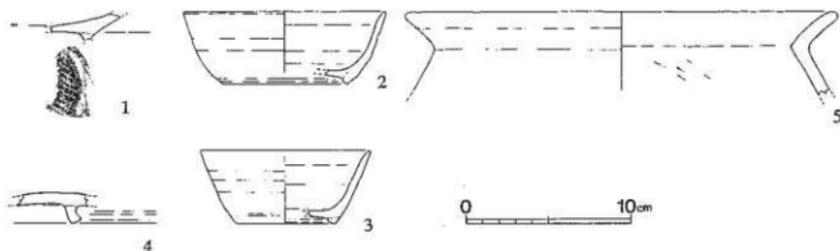


A04図 近世遺構出土遺物実測図 (S=1/5)

り、N-6'-Wのほぼ南北に位置する。近世の堆積土(2・3・5・7層)の下、12~13世紀と考えられるSK 30の上に存在する。

当初は、溝1~17の連続した遺構と捉えていたが、平面形態より、畝状の畑跡と想定した。花粉分析の結果³⁾からも周辺に畑跡を想定されている。

溝1~17としての出土遺物は、弥生土器から近世播鉢など多岐にわたり時期を確定する要素はない



A05図 畝状遺構出土遺物実測図 (S=1/5)

が、図下でできるものをA05図に掲載した。A05-1~4は須恵器である。1~3は高台の付く坏で、2・3は器壁と一体となるほど底部縁に小さな高台をもち、2は器壁が湾曲して立ち上がるが、3は直線である。4は高台がやや長く底面の立ち上がり幅が広がるようなので、整と想定した。高台端部は断面三角形を呈する。A05-5は土師器の甕で、外面に若干の凹凸があり粗製のものである。

SI01 (A06~A08・A65図)

C・D-12Gr内、標高8.1mで検出した。北側はSD17・C12Gr-P4などに壊され、東側は調査区外へと続くが、東西検出長4.4m、南北検出長1.6m、深さ20cmを測る窪式住居跡である。全体を検出していないため軸方向は定かではないが、西側が若干突出しているため、隅丸方形の平面形態をもつと考えられる。壁は直立している。主柱穴は1/5以下の検出状況であるので確定はできないが、SD17・C12Gr-P4以外のビット状のものはSI01に伴うものである。貼床と想定される土層は確認できなかったが、完掘床面はかなり凹凸があるため、床を貼っていた可能性も考えられる。

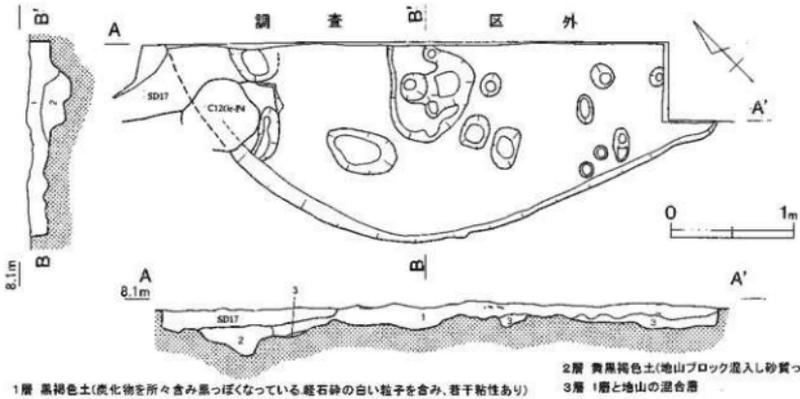
1層上位より炭化物が検出された。下位からはほとんど検出されていないため、最終的に朽ちて落ち込んだ木材などと考えられる。

出土遺物は、弥生土器の小破片が小袋に1袋分ほどで、実測可能なもの4点を掲載した。また床直から台石様の礫が1点出土している。A08-1~4は弥生土器である。1は頸部がやや長く壺の口縁部と思われるもので、口縁が上下に拡張し直立きみである。2は甕の口縁部であるが、口縁が小さく下に拡張したものである。3は平底の底部である。4は小型高坏の坏部で、複合口縁状の口縁部をもつものである。内外面とも体部以下ヘラミガキ調整の下に所々胎土面が露出する。A65-1の台石様の礫は原石を4分割したひとつである。

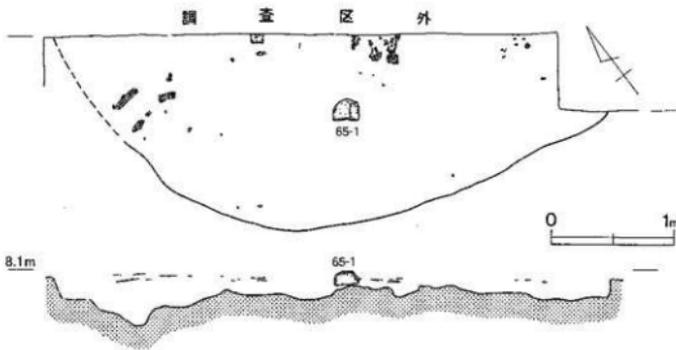
以上の出土遺物などより、当遺構は弥生後期初頭に該当しよう。

SI02 (A09・A10図)

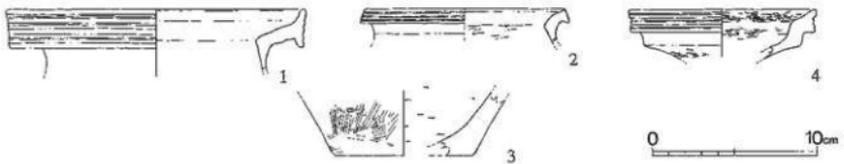
B・C-6・7Gr内、標高7.9mで検出した。上層の畝状遺構にかなり破壊されているが、わずかな壁の立ち上がりが円を描いて確認できるので、窪式住居跡とした。南北長4.6m、東西長4.2m、深さ12cmを測り、N-18°-Wに軸をとる。想定復元より、隅丸方形を呈すると考えられる。わずかに残る壁は直立または傾斜している。主柱穴は4穴確認できる。また中央に存在するビットからは須恵器・土師器が出土し、上層断面より上層から掘り込まれたような状況であるため、SI02には伴わないと判断した。



A06図 S101実測図 (S=1/40)

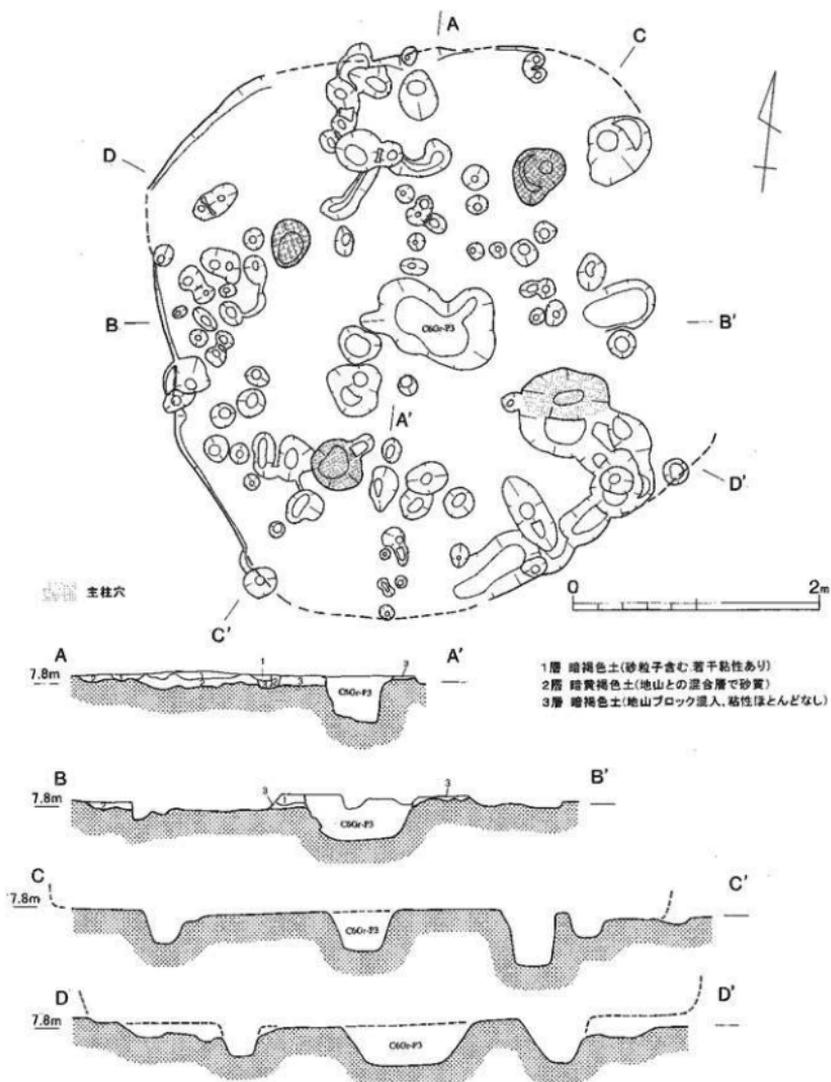


A07図 S101礫及び炭化物出土状況図 (S=1/40)



A08図 S101出土遺物実測図 (S=1/2)

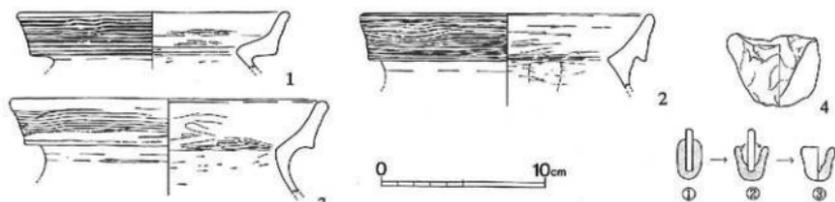
掘り方床面はかなり凹凸しているのと、2・3層が地山ブロックを混入させていることより、同層は貼り床の可能性もある。またA01図よりSD25がSI02に沿って湾曲しており、当遺構に付属する溝の可能



A09図 S102実測図 (S=1/60)

性あり。

出土遺物は、弥生土器が小袋に1袋分である。そのうち実測可能なものA10-1~4を載せた。1~3は



A10図 S102出土遺物実測図 (S=1/5)

複合口縁を有する壺の口縁部である。胴部に比して厚めの口縁部で、端部は膨らませ丸みをもたす。口縁面には5~12条の擬凹線文を施す。2のみは突出部が下に出ている。4は小型の手捏ね土器である。中央に棒状の窪み痕が観察されるので、A10図のような製作工程を想定した。①棒に粘土を貼り付ける ②指で粘土を広げ形を整える ③棒を抜き取る。口縁部も波打ち、器壁も凸凹とかなり粗雑な作りである。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生後期後半に該当しよう。

S103 (A11・A12図)

C・D-2・3Gr内、標高7.8m強で検出した。東側は調査区外へと続くが、南北検出長4.4m、東西検出長1.6m、深さ20~50cmを測る竪穴式住居跡である。全体を検出していないため軸方向は定かではないが、円形の平面形態をもつと考えられる。壁は若干傾斜をもって直立する。主柱穴は検出できなかった。2層は、1層と地山の黄褐色砂質土が混合したような土であり、貼り床と考えられる。

出土遺物は、弥生土器及び須恵器・土師器の小片である。後者は北側の攪乱部分から出土したと思われる。弥生土器はA12-1のみ実測可能であった。1は鼓形器台の複合口縁状の受部である。口縁部は外反して立ち上がり端部は肥厚して面をもちおさめる。外面には17条の擬凹線文を施す。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生後期中葉に該当しよう。

S104 (A11・A12図)

B-8・9Gr内、標高7.9mで検出した。中央ピットと主柱穴4基で、一応竪穴式住居跡の痕跡と捉えた。柱穴間直径3.2m、柱穴深さ28~62cmを測る。壁は全く検出していないので、平面形態、立ち上がり状況は不明である。

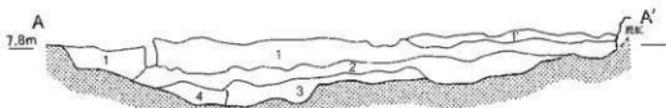
出土遺物は、各柱穴から弥生土器の小片数点である。実測可能なものA12-2・3を掲載した。両者とも甕の口縁部である。2は口縁部が上下に拡張しやや厚手でぼてつとしたもの、口縁面には3条の擬凹線文を施す。3は複合口縁を有し口縁端部は丸くおさめる。口縁面には4条の擬凹線文を施す。外面頸部には刺突したまま斜めに引く沈線を連続させ、部分的にヨコナデにより消される。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生後期前葉~中葉に該当しよう。

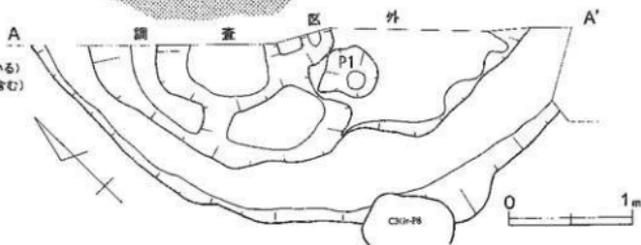
SK26 (A13・A14図)

C-9・10Gr内、標高8mで検出した。平面形態は不整形で2.2×2m、深さ1.5mを測り、N-20°-Eに位置する。急峻な立ち上がりを見せることと湧水することより、当遺構は井戸であったと考えられる。

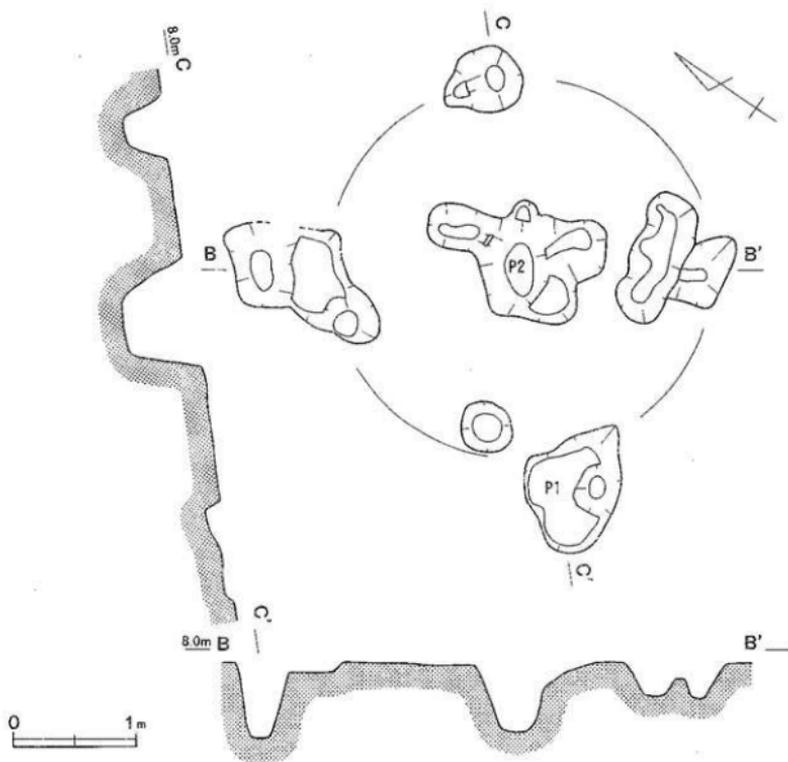
SI03



- 1層 暗灰褐色土(砂粒子含む
若干粘性があるがサラッとしている)
- 1'層 黄褐色土(橙色粒子多く含む)
- 2層 暗黄灰褐色マーブル土(1層と
地山の混合層)
- 3層 黄褐色砂質土
- 4層 灰褐色土



SI04



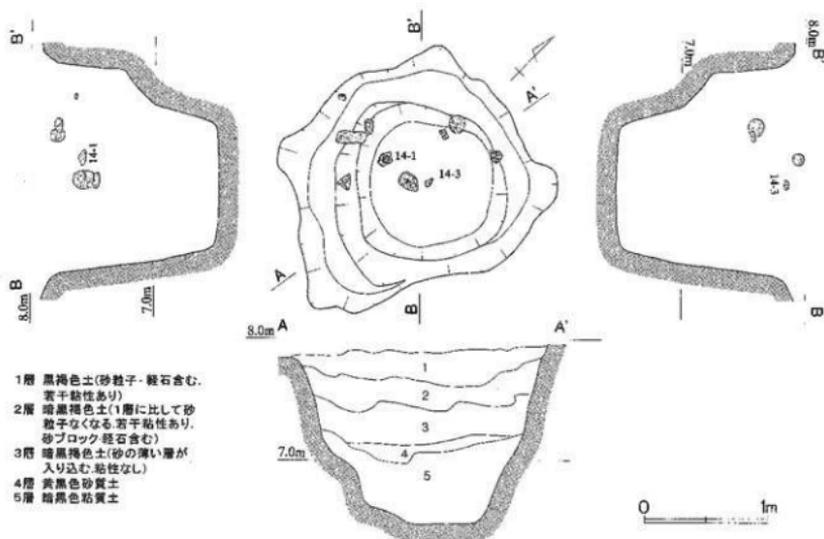
A11図 SI03・04実測図 (S=1/40)



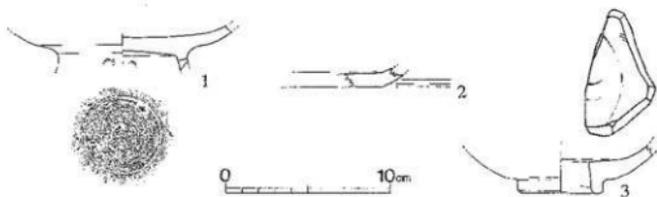
A12図 S103(1)・S104(2・3)出土遺物実測図 (S=1/2)

井戸構築物は確認していないが、SD14を切り、掘り込み面と底面の辺はほぼ90°のずれをもち、東側は中途に平坦面をもつ。これは井戸を廃棄する際に構築物を抜き取るなどの行為によってできたものではないかと考えられる。

4層の砂質土を挟んで、上は黒褐色土、下は粘質土と堆積状況が異なる。おそらく井戸を廃棄した後、耐水状況にあった粘質土の5層を砂質土で埋め固め、それ以降は自然堆積に任せたものと考えられる。あるいはゴミ捨て場として利用していたものか。そのため出土遺物は1~3層に集中している。

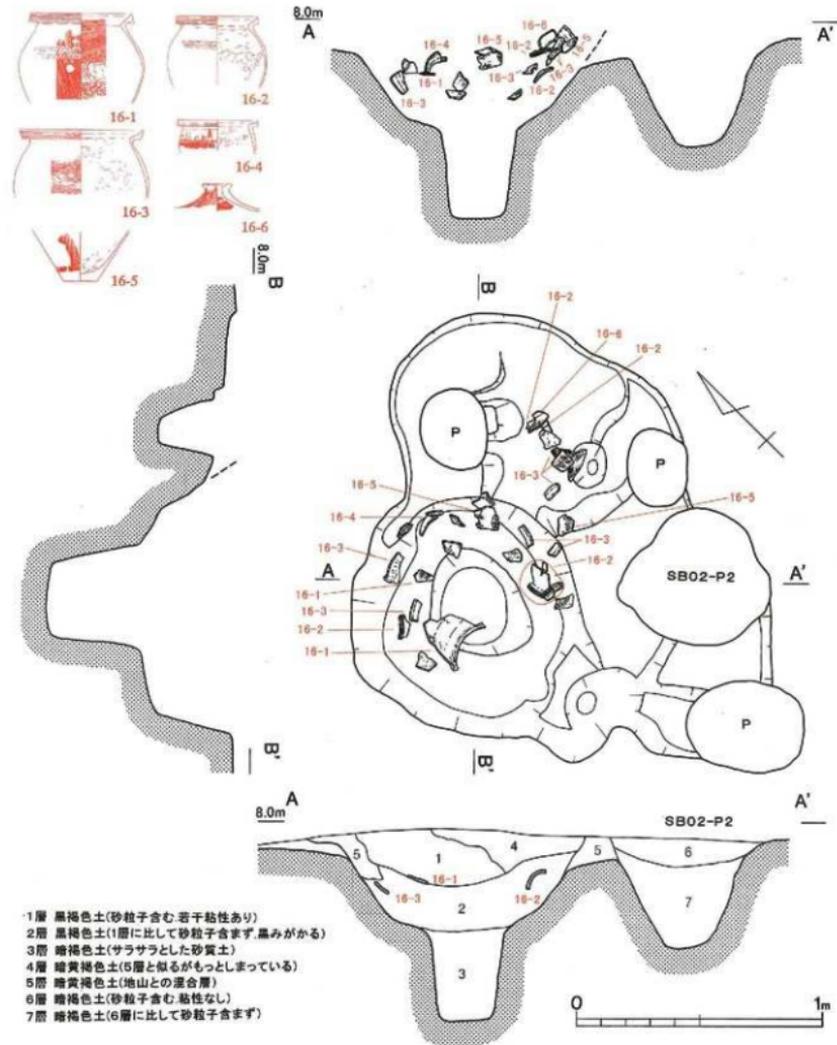


A13図 SK26実測図 (遺物出土状況図) (S=1/4)



A14図 SK26出土遺物実測図 (S=1/2)

出土遺物は、土師器・須恵器・青磁・弥生土器である。図下でできるもののみA14図に掲載した。A14-1は須恵器の高坏の坏部である。脚部が短く坏部に広がりのあるタイプと思われる。脚柱基部には2個1対のスカシ痕が観察できる。A14-2は土師器の坏底部、A14-3は龍泉窯系の青磁碗Ⅰ類である。小さめの高台が中央寄りにやや厚手に作られ、底部も厚手をもって、内湾しながら立ち上がる。畳付



A15図 SK28実測図 (遺物出土状況図) (S=1/50)

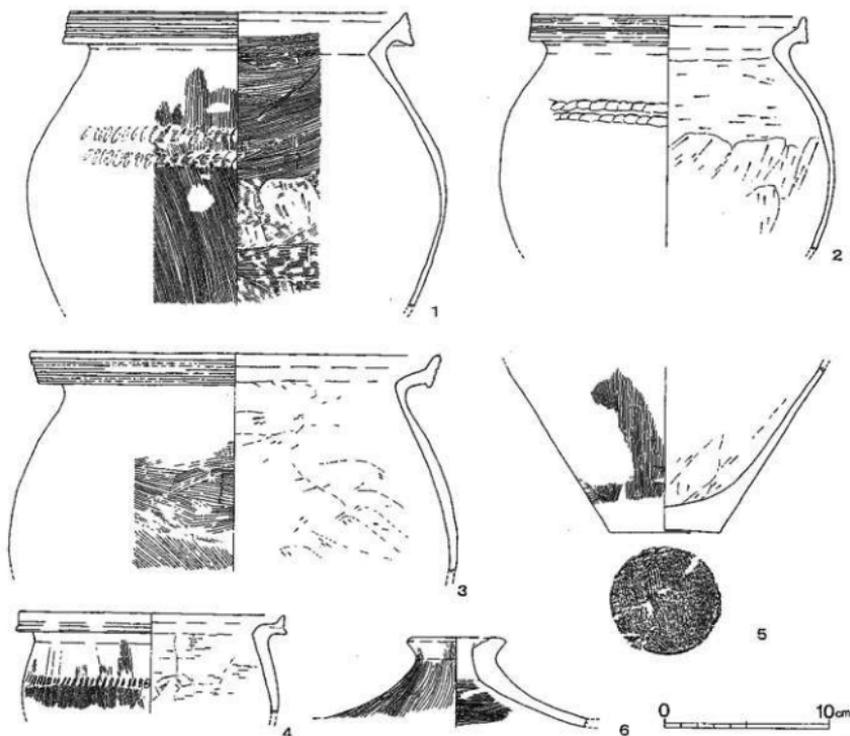
け以外に施釉、内面底部縁円周と見込み部分に湾曲した線2本、器壁に3本の平行線文様が観察される。

以上の出土遺物などより、当遺構は12世紀には廃棄されゴミ捨て場として利用されていたと考えられる。

SK28 (A15・A16図)

B・C-8Gr内、標高8mで検出した。掘り方は南北長1.74m、東西長1.7mの不整三角形を呈し、深さ20~78cmを測る。中心の落ち込みは南北長107cm、東西長95cm、深さ78cm、N-48°-Eに位置し、2段掘となっている。遺物は浅い落ち込み状の床面から中心の落ち込み2層中までに集中している。3層中の高さからは水が湧き出すが、3層はさらさらとした砂質土であるため、耐水状態ではなかったようである。周辺に多数の柱穴が存在するが伴うと考えられるものはなく、単独の柱穴または小型の井戸ではないかと考えられる。

出土遺物は、弥生土器である。A16-1~4は口縁部から胴部上半にかけての寛である。1の口縁部は下に拡張して断面三角形を呈し内面頸部は鋭く屈曲する。2~4の口縁部は上に引き伸ばす複合口縁の



A16図 SK28出土遺物実測図 (S=1/4)

初型で内面頸部は緩やかに屈曲する。1のみ内面調整にハケ目を使用している。肩部から胴部にかけての施文は1・2とも淡く不明瞭な刺突文であるが、4は明瞭で施文幅の狭い刺突文を施す。2の文様は原体をナデるように左から右へ転がしているようである。A16-5は底部である。厚みのあるどっしりとした平底であるが、立ち上がる器壁は4mmと薄くなる。A16-6は蓋である。欠損しているがおそらく中央は孔をあけた笠状タイプと思われる。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生中期末～後期前葉に該当しよう。

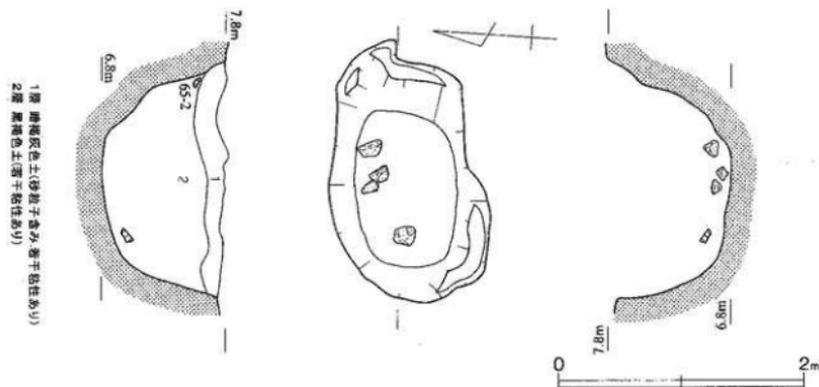
SK29 (A17・A18・A65図)

B7Gr内、標高7.8mで検出した。平面形態は長楕円形で2.14×1.28m、深さ100cmを測り、E-4°-Nに位置する。急峻な立ち上がりを見せることと湧水することより、当遺構は素掘りの井戸であったと考えられる。底面より小児頭人の礫が数個出土した。

出土遺物は、土師器・須恵器片が小袋に1袋分、礫が数個である。そのうち実測可能なものA18-1～4の土師器、A65-2を掲載した。A18-1・2はやや厚手で内外面とも朱塗りの皿である。3は坏の底部、4は甕の口縁部である。A65-2はほとんどの面を利用した砥石で、中研ぎ・仕上げ研ぎとして使用されているようである。

その他にSK29出土の土師器小片とSK30上層出土の土師器小片が接合した。朱塗りを施した甕の破片と思われる。SK29からは朱塗りを施した皿が出土しているので、この遺物はSK29に伴うものであろう。

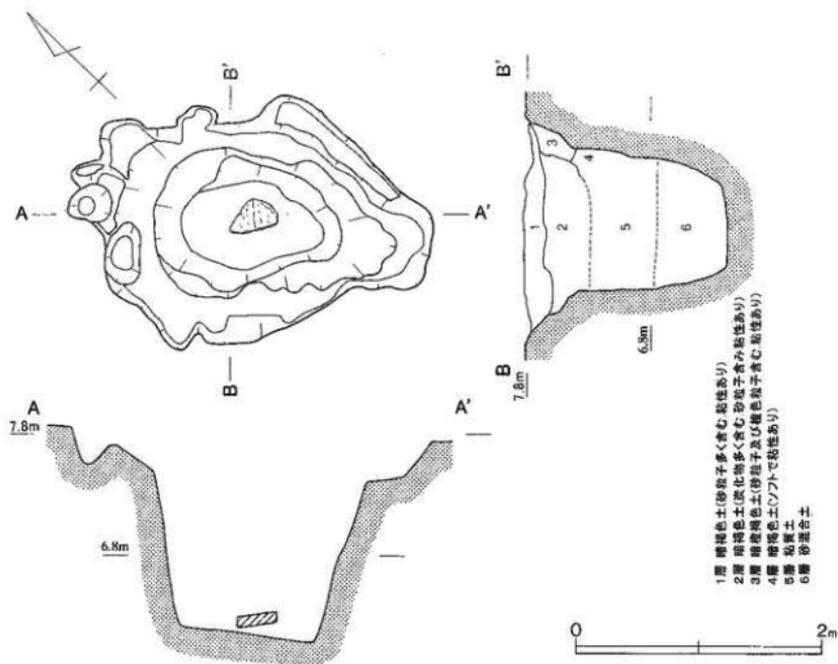
以上の出土遺物などより、当遺構は8～9世紀に該当しよう。



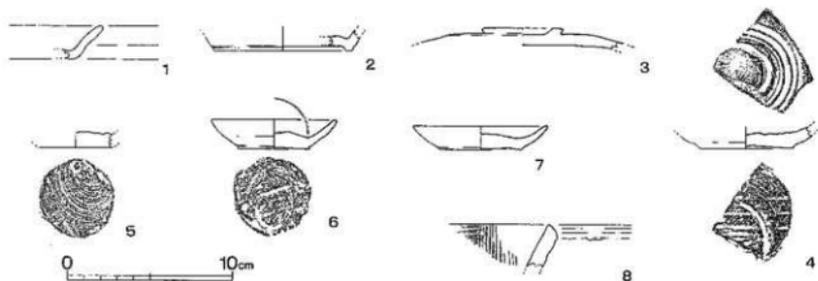
A17図 SK29実測図 (S=1/40)



A18図 SK29出土遺物実測図 (S=1/5)



A19図 SK30実測図 (S=1/40)



A20図 SK30出土遺物実測図 (S=1/5)

SK30 (A19・A20図)

B-6・7Gr内、標高7.8mで検出した。平面形態は長楕円形で2.96×2m、深さ1.64mを測り、N-38°-Wに位置する。2段階で急峻な立ち上がりをもせ、底面からは平べったく三角形の礫(40×30×15cm)、丸杭状の木材が1点ずつ出土している。土層は1~4層を確認したところで崩壊してしまい、以下は概略である。5層が粘質土であること、湧水することより当遺構は井戸であろう。また2層中央部に炭化物を多く含む底面から丸杭状の木材が出土していることより上層部には井桁が構築されていた可能性もある。

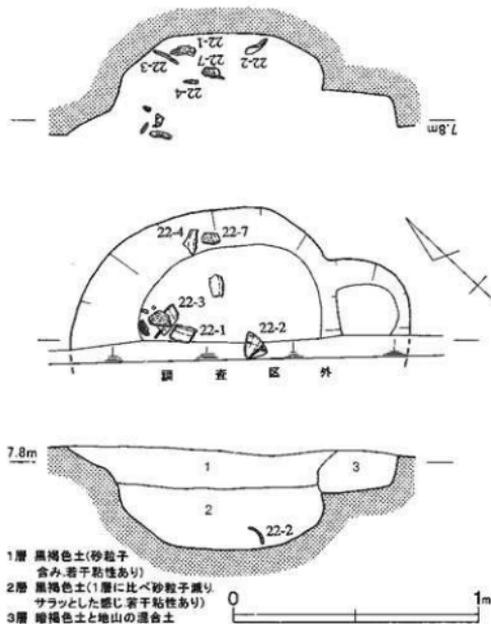
出土遺物は、土師器・須恵系陶器・須恵器・弥生土器などであるが、当遺構に伴うものは前2者と考えられる。A20-1~3は須恵器、A20-4~7は土師器、A20-8は須恵系陶器である。1は底部から器壁への変化点が丸く稜線が不明瞭な皿の小片である。2は短い高台が底部外縁に付き、立ち上がりの直線的な高台付き杯の小片である。3は輪状つまみの付く蓋の破片である。4は杯の底部で、内面には強いナデ痕が残り、外面には糸切りののちへら痕が残る。5も底径は小さいが厚みと内面調整の様子から杯の底部であろう。静止糸切り痕を良く残している。6・7は小皿である。底部は回転糸切りで、底部と体部の境にはきつい凹みをつける。8は摺鉢の小片である。口縁部は外傾して面をもつが丸みを帯び、そのまま外面は凹凸のある粗いつくりである。

以上の出土遺物などより、当遺構は12~13世紀に該当しよう。

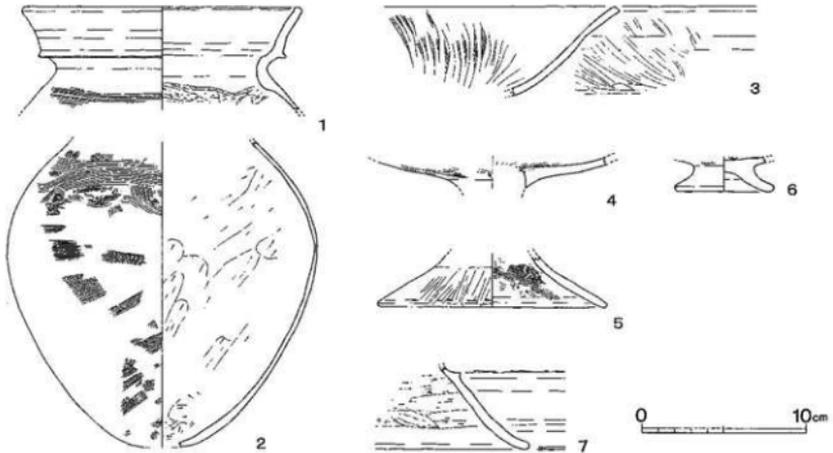
SK31 (A21・A22図)

A7Gr内、標高8mで検出した。約1/2が調査区外へ延びているため詳細は不明であるが、検出長140×52cm以上、深さ40cmを測り、平面形態は楕円形を呈すると思われる。調査区外縁はN-44°-Wである。

出土遺物は、古式土師器である。A22-1・2は甕の口縁部と胴下半部である。同一個体のものであるが、接点がなく接合しないため、別個体としておく。1の口縁端部は若干丸みを帯びるが平坦面をもち、突出部は鋭い。器壁は極薄である。2の胴部も極薄であり、底部は痕跡らしい丸い稜線がわずかに観察できる。A22-3・4は高杯の杯部である。この2点も胎土が非常によく似ているので同一個体のものであるが、接点がなく接合しないため、別個体としておく。3は体部にわずかな影らみ



A21 図 SK31実測図 (S=1/20)



A22図 SK31出土遺物実測図 (S=1/3)

をもたせ、外反する口縁部へと続く。4は平べったい体部からゆっくりと立ち上がる。脚柱部との接合には円盤の接合痕が観察される。5は脚部である。高環にしては裾広がりの広がってないこと、内面ハケ目調整の幅があること、筒部が急激に萎む様相を呈していることなどより、低脚高環などの器種を想定したい。6は低脚環の脚部で、小さな脚がしっかりと踏ん張っている。7は鼓形器台の脚台部破片である。

以上の出土遺物などより、当遺構は古墳初頭（草田6期）に該当しよう。

SK36 (A23図)

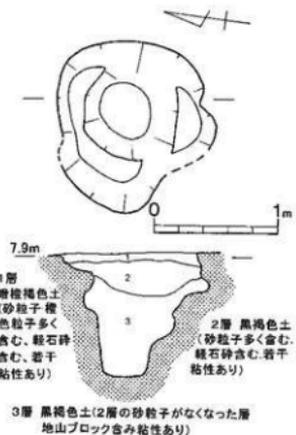
C4Gr内、標高8mで検出した。畝状遺構に切られているが、ほぼ正円形を呈し、径1.4m、深さ1.02mを測る。上位は2段堀となり凹凸があるが、下位は垂直に落ち込んでいる。下位から湧水があるため、小型の井戸であると考えられる。

出土遺物は、須恵器・底部回転糸切りを行う坏底部を含む土師器の破片が小袋1袋分ほどで実測可能なものは皆無である。

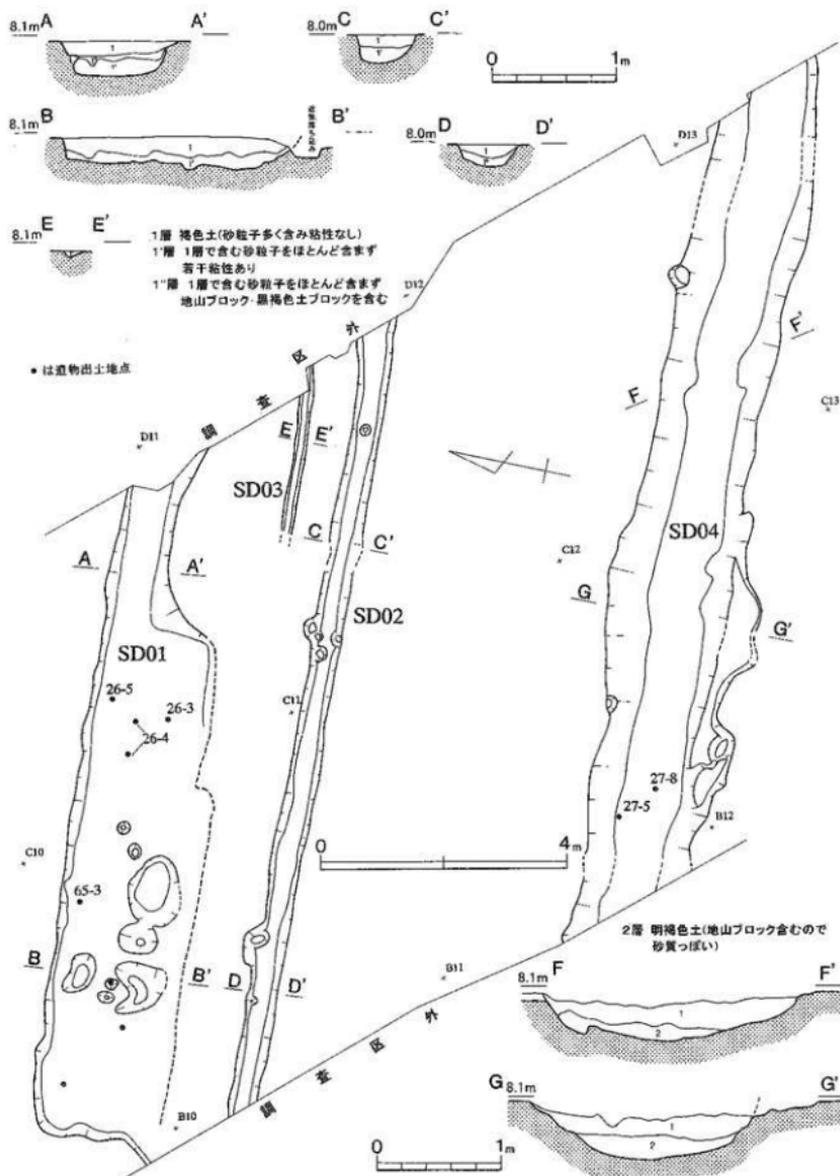
以上より、当遺構は平安～中世前半期と考えられる。

SD01 (A24～A26・A65図)

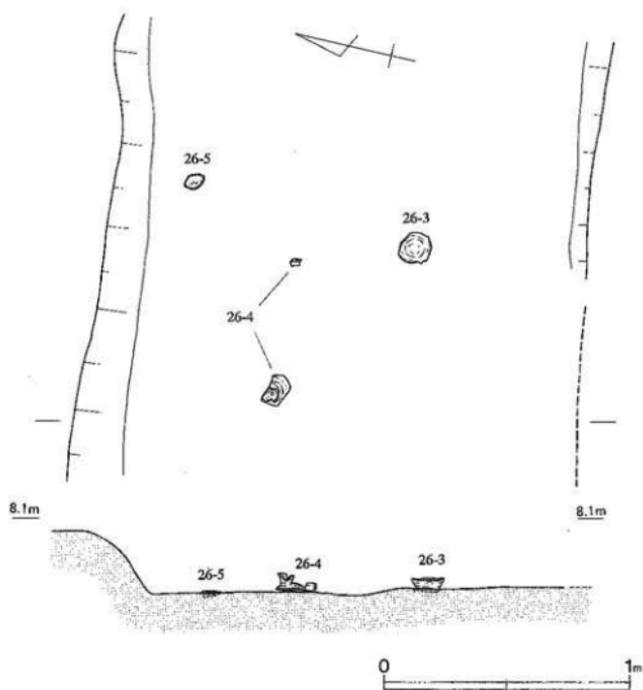
A・B-9、B・C-10、C11Gr内、標高8.1mで検出した。検出長11.8m、幅90～220cm、深さ20～30cmを測り、E-5'-Nのほぼ東



A23図 SK36実測図 (S=1/6)



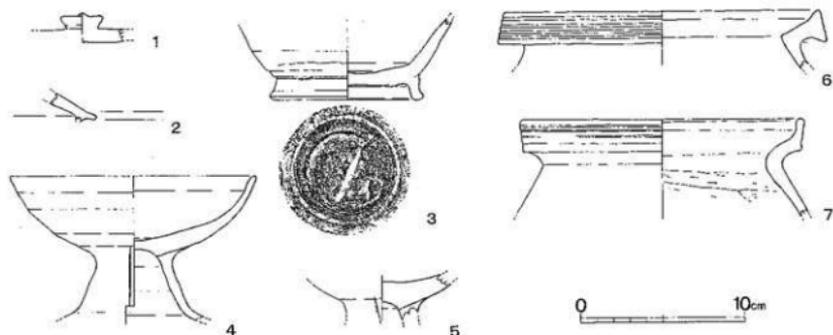
A24図 SD01~04実測図 (平面図S=1/50・土層断面図S=1/50)



A25図 S001遺物出土状況図 (S=1/50)

西方向に位置する。南側は近世遺構により破壊されている。西側に浅い立ち上がりをもせ、東へは途中から屈曲して幅狭くなるが、西から東へと深くなる。

出土遺物は、須恵器・土師器及び混入した弥生土器・石器である。A26-3～5はA25図で図示したように底面直から出土している。A26-1～5は須恵器の、1・2は蓋、3は長頸壺の底部、4・5は高坏である。1はやや平べったい宝珠状のつまみの付くもの、2は口縁部に短いかえりの付く天井の低いものである。3は端部が肥厚して安定感のある高台が付き、器壁は開かず直立ぎみに立ち上がる。底面にヘラ痕が認められる。4は段もなく単純な坏部で、脚柱部は欠損して不明ではあるが、脚柱部が長くないうちに裾部にむけて屈曲し始めるので、低脚タイプであろう。対角位置に貫通した切れ込み状のスカシあり。5の対角位置にある切れ込み状のスカシは貫通していない。A26-6・7は弥生土器である。6は口縁部が上下に拡張し、口縁面に4条の凹線文を施す。7は口縁端部を若干膨らませ丸くおさめ、口縁面に施した4条の沈線はのちの強いナデにより浅くなっている。突出部は出ず、ナデ肩のプロポーションを呈すると思われる。A65-3は流紋岩製の敲打痕ある石器である。表面が滑らかな円礫の上下端部を打ち欠いている。



A26図 SD01出土遺物実測図 (S=1/2)

SD02 (A24図)

A・B-10、B・C-11Gr内、標高8mで検出した。検出長13.1m、幅50cm、深さ20~25cmを測り、E-4°-Nのほぼ東西方向に位置する。逆台形状の断面を呈し、しっかりした立ち上がりである。

出土遺物は、須恵器・土師器の小片ばかり中袋に1袋分あるが、実測に耐え得るような遺物は皆無である。

SD03 (A24図)

C11Gr内、標高8.1mで検出した。検出長3m、幅20cm、深さ5cmを測り、E-4°-Nのほぼ東西方向に位置する。SD02に併走しているが西側では自然消滅してしまう。

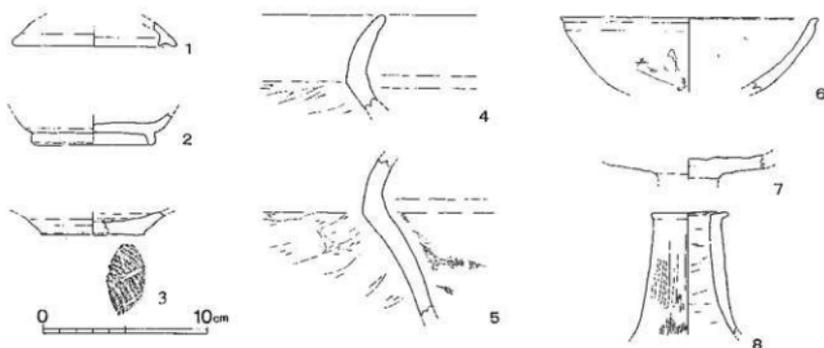
出土遺物は、土師器の小片数点のみである。

SD04 (A24・A27図)

A・B-11、B・C-12、C13Gr内、標高8.1mで検出した。検出長14m、幅1.6~2m、深さ35~45cmを測り、E-4°-Nのほぼ東西方向に位置する。東端は近世SD04に壊されている。SD01・02と比べると緩やかな立ち上りをみせる。

出土遺物は、須恵器・土師器の破片である。古式土師器も出土しているが、これは古い遺構を壊して混入したものであろう。A27図はそのうち実測に耐えられるものを掲載した。A27-1・2は須恵器である。1は短めのかえりが付く蓋、2は短い高台の付く坏である。A27-3~5・7は土師器である。3は坏で底面に糸切りしたのちにヘラ痕を施す。4・5は甕の頸部付近である。兩個体とも直立ぎみの口縁部を有しており同一個体の可能性あり。7は高坏接合部付近である。円盤充填法を用い、内外面ともやや粗い不定方向のナデ調整を行う。A27-6・8は古式土師器である。6はボール状を呈する鉢で、外面からヨコナデにより口唇部を外に出して平坦面をつくる。外面胴部には線刻のようなキズ痕あり。8は直立ぎみの脚柱部で円盤受け部が残る。

以上のSD01~04は、ほぼ東西に延びる併走した溝状遺構である。覆土も同様な褐色土が堆積しており、ほぼ同時期の7~8世紀に機能していたと考えられる。



A27図 SD04出土遺物実測図 (S=1/5)

SD10 (A28・A29図)

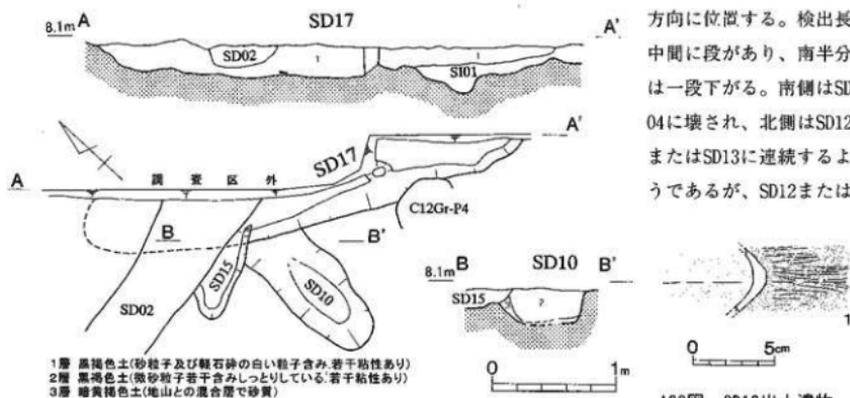
C-11・12Gr内、標高8.1mで検出した。検出長1.24m、幅54cm、深さ26cmを測る。方位は磁北を示す。南側は急激に立ち上がり、北側はSD17に壊されており、一応溝状遺構とはしてあるが詳細は不明である。

出土遺物は、弥生土器小片が3点のみであり、実測に耐えうるもの1点 (A29-1) を図下した。胴部断面が逆「コ」の字状に張った壺の一部と考えられる破片である。外面には漆が内面には朱が塗布してある。

以上より、当遺構は弥生後期前半に該当しよう。

SD11 (A30・A31図)

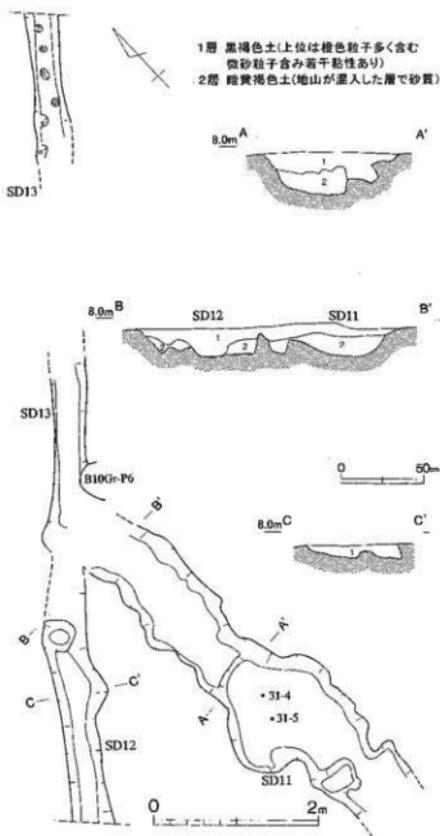
B-10・11Gr内、標高8mで検出した。検出長4.6m、幅80~150cm、深さ15~25cmを測り、N-4°-Eのほぼ南北



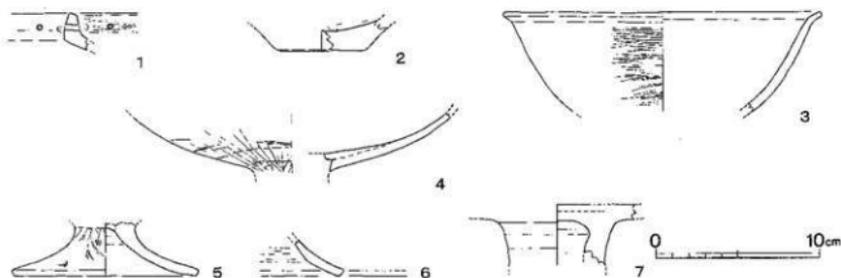
A28図 SD10・17実測図 (S=1/40)

方向に位置する。検出長中間に段があり、南半分は一段下がる。南側はSD04に壊され、北側はSD12またはSD13に連続するようであるが、SD12または

A29図 SD10出土遺物実測図 (S=1/5)



A30図 SD11~13実測図 (平面図S=1/60・土層断面図S=1/60)



A31図 SD11出土遺物実測図 (S=1/6)

SD13とは規模が違い違和感がある。しかし1層はSD12と同様な覆土であり、連続するかしないかの詳細は不明である。

出土遺物は、弥生土器及び古式土師器の破片が小袋1袋分と若干の混入と考えられる須恵器及び土師器である。A31図は図下しうるものを掲載した。A31-1~6は弥生土器及び古式土師器である。1は短頸壺で、口縁端部は平坦面をもち、肩部は張り出す。口縁部には多少の高低差をもつ2個1対と考えられる穿孔あり。2は壺及び甕の底部である。底径の小さな平底で、底面に指頸圧痕あり。3・4は高坏で、3はボール状に立ち上がり口唇部が外反する坏部である。4は接合部付近の坏部で、坏部中央に脚部を挿入するための孔を穿け、上から粘土を貼り付けているのが観察される。胴部はゆるやかに内湾して立ち上がる。5は低脚である。器は碗状のものと考えられる。器部と脚部の間に小さな円盤を挿入している。柱部がほとんどなく、接合部から急に裾広がりととなり、端部は断面矩形である。6は鼓形器台の脚裾部で、裾端部の断面は

矩形である。A31-7は須恵器の高坏である。脚部が厚くしっかりしたもので、現状ではスカシは観察されない。

SD12 (A30図)

A・B-10Gr内、標高8mで検出した。検出長2.6m、幅40～60cm、深さ7～17cmを測り、N-39°-Eに位置する。北側をSD02に壊され、SD11が合流するようにも見えるがSD11で説明したように詳細は不明である。規模からするとSD13には連続する可能性が高い。

出土遺物は、弥生土器及び古式土師器・須恵器・土師器の小片のみで、後2者は混入と考えられる。

SD13 (A30図)

B・C-10Gr内、標高8mで検出した。検出長6.6m、幅30～40cm、深さ10cmを測り、N-37°-Eに位置する。途中SD01に分断されている。南側はSD12に連続すると考えられるが、SD11とSD12との関係が不明瞭なため断定できない。

出土遺物は、弥生土器及び古式土師器、混入と考えられる土師器の小片のみである。

以上のSD11～13は、途中SD01・02に分断されたため、詳細は不明ではあるが、おそらく一連の溝状遺構となり、弥生終末～古墳初頭に機能していたと考えられる。

SD14 (A32～A34図)

C-9・10Gr内、標高8mで検出した。検出長3.8m、幅1.1～2.4m、深さ10～20cmを測り、南ではN-16°-W向きであるがSK26に壊され、北ではN-8°-Eに向きを変える。南側をSD01に、北側をSD16に壊されている。覆土には包含層の8層が混入する。また、上面より土師器の甕が岡まって出土した。

出土遺物は、前記した土師器・須恵器、混入品と考えられる弥生土器などである。A34-1・2は土師器の小ぶりの甕である。1の短い口縁部はその下端部が突出し丸みを帯びて外反する。その端部は全て打ち欠いたような刃こぼれ状態である。2は厚手で粗製のものである。内面底部周辺には指頭圧痕が明瞭に残りそのため凸凹している。内面には若干の付着物が観察される³²。A34-3は弥生土器の甕口縁部である。全体に厚手で直立ぎみの口縁部は上下に拡張して面をもち4条の凹線文を施す。口縁上下端部は丸みをもつ。

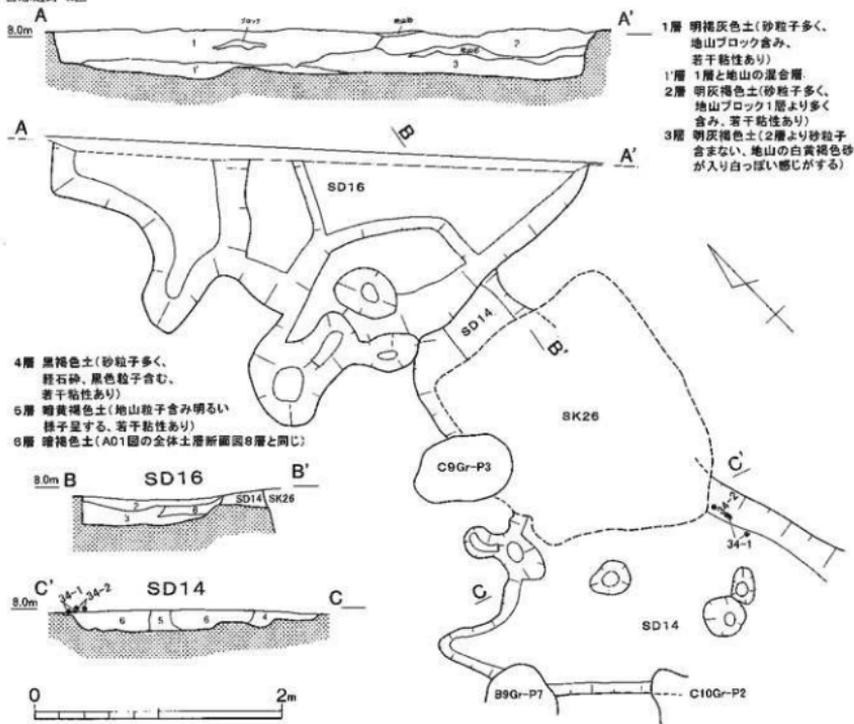
以上、当遺構はSD01に切られており下限は7世紀中であるが、出土した土師器甕A34-1・2及び周辺から古墳前期～後期における土器がほとんど出土していないことを考慮すると、古墳時代までには上らないであろうと考えられる。

SD16 (A32図)

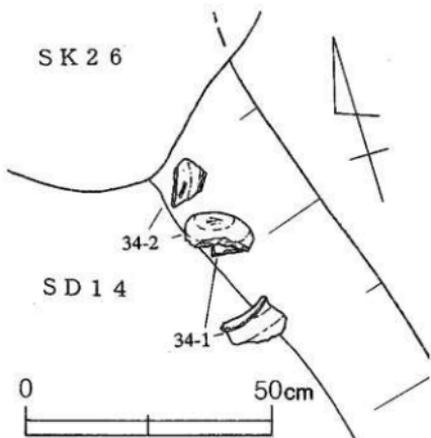
C9Gr内、標高8.1mで検出した。検出長3.4m、幅2m、深さ10～30cmを測る。軸方向は不明であるが…辺がN-3°-Wを向く。中央にはテラスをつくり東西に落ち込む。調査区外へと延びるためにコーナーの平面三角形のみの検出であり、一応溝状遺構とはしておくが竪穴状の落ち込みの可能性もある。覆土は砂が帯状にサンドイッチされており、一度に埋められたと考えられる。

出土遺物は、須恵器・土師器、混入したと考えられる弥生土器の小片が小袋1袋分のみで、実際に耐えうるような遺物はなかった。

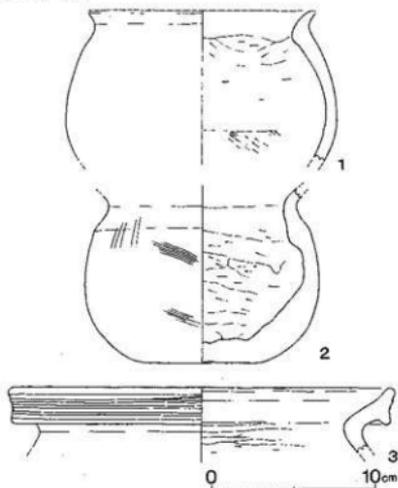
以上、出土遺物及びSD14を切っていることより、当遺構は奈良・平安期に該当しよう。



A32図 SD14・16実測図 (S=1/40)



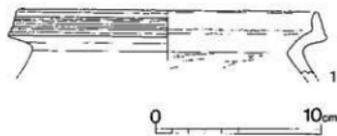
A33図 SD14遺物出土状況拡大図 (S=1/40)



A34図 SD14出土遺物実測図 (S=1/4)

SD17 (A28・A35図)

C・D-11・12Gr内、標高8.1mで検出した。SD02に切られるが、検出長3.6m、検出幅54cm、深さ10~26cmを測り、N-61°-Wに位置する。立ち上がりは急傾斜である。底面レベルが北へ行くほど上がっているので調査区外すぐに立ち上がるであろう。調査区境界付近に位置し、またSI01、SD10・15を切っており詳細は不明である。



A35図 SD17出土遺物実測図 (S=1/5)

出土遺物は、弥生土器の小片数点で、唯一実測可能なA35-1を掲載した。1は甕の口縁部である。内傾して上に拡張し面をもち、3条の凹線文を施す。上1条と2条の間には小口でナデたような跡がある。頸部はきつく「く」の字状に屈曲する。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生後期前半に該当しよう。

SD28 (A36~A42図)

A・B-4、C-4・5Gr内、標高8mで検出した。検出長10.74m、検出幅2.5m、底面幅30~50cm、深さ1.2m (底面標高6.7m) を測る。西はE-32°-Nに位置するが東側では若干湾曲してE-16°-Nを向く。断面は「V」字状を呈し、立ち上がりは急傾斜である。西端底面は東端底面より約10cm低く若干の勾配を伴う。覆土は基本的に1層と2層で、細分不可能な灰褐色の1層は砂粒子を多く含みジャリジャリした、2層は砂粒子が減りしまった堆積土である。標高7.5m以下からは湧水する。

プラン確認時から土器が中央軸に沿って出土し、全体的には西側が高く東側が低いレベルから出土している。1層上半からの出土がほとんどで、底面付近からは1ヶ所のみ甕の胴部破片が出土した。実測図は掲載していないが、淡黄褐色を呈する22×15cm程の薄手甕胴部破片である。A42-9 (鼓形器台) から東へ1mの間にはA42-9とほぼ同レベルで炭化物の小片が10数点観察された。

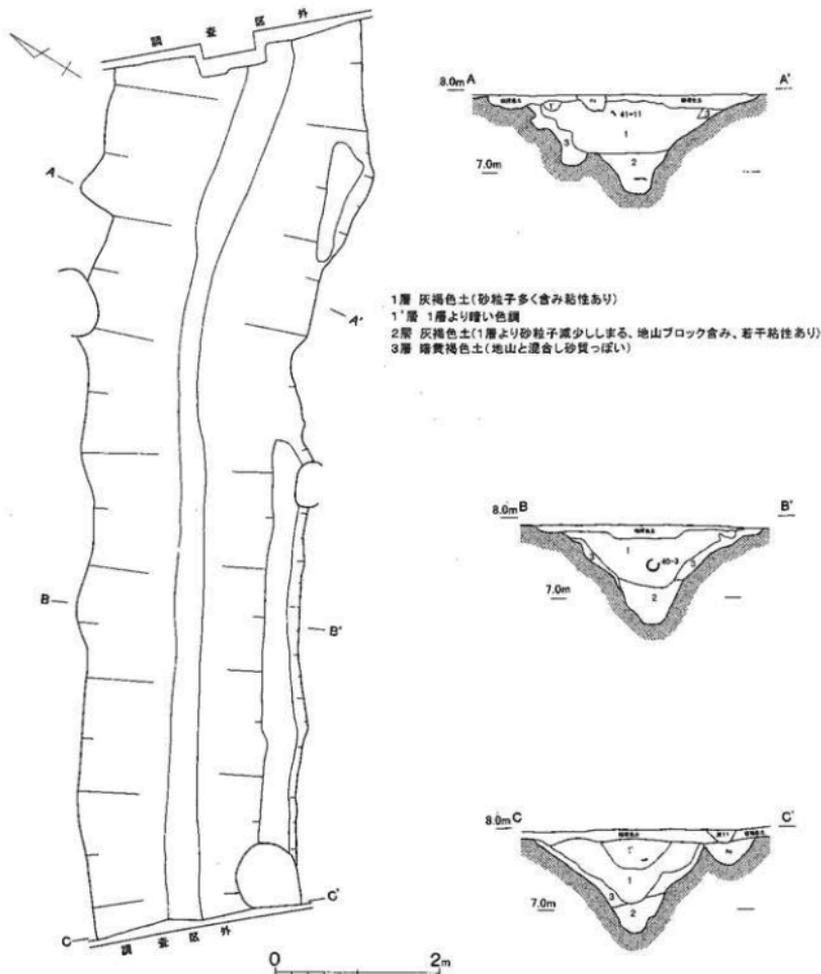
土器は弥生中期後葉から古墳初頭にかけてのものがコンテナ3箱分出土しており、中心は弥生終末~古墳初頭である。

A38-1・2は頸部が長く外反した長頸壺、3は外反した複合口縁の壺である。長頸壺の口縁端部には1は内面に引き寄せるような平坦面を、2は2条の凹線文を施した平坦面をもつ。3の口縁端部には1条の沈線状のものが施してある。肩部には「ノ」の字のヘラ描きが施されている。

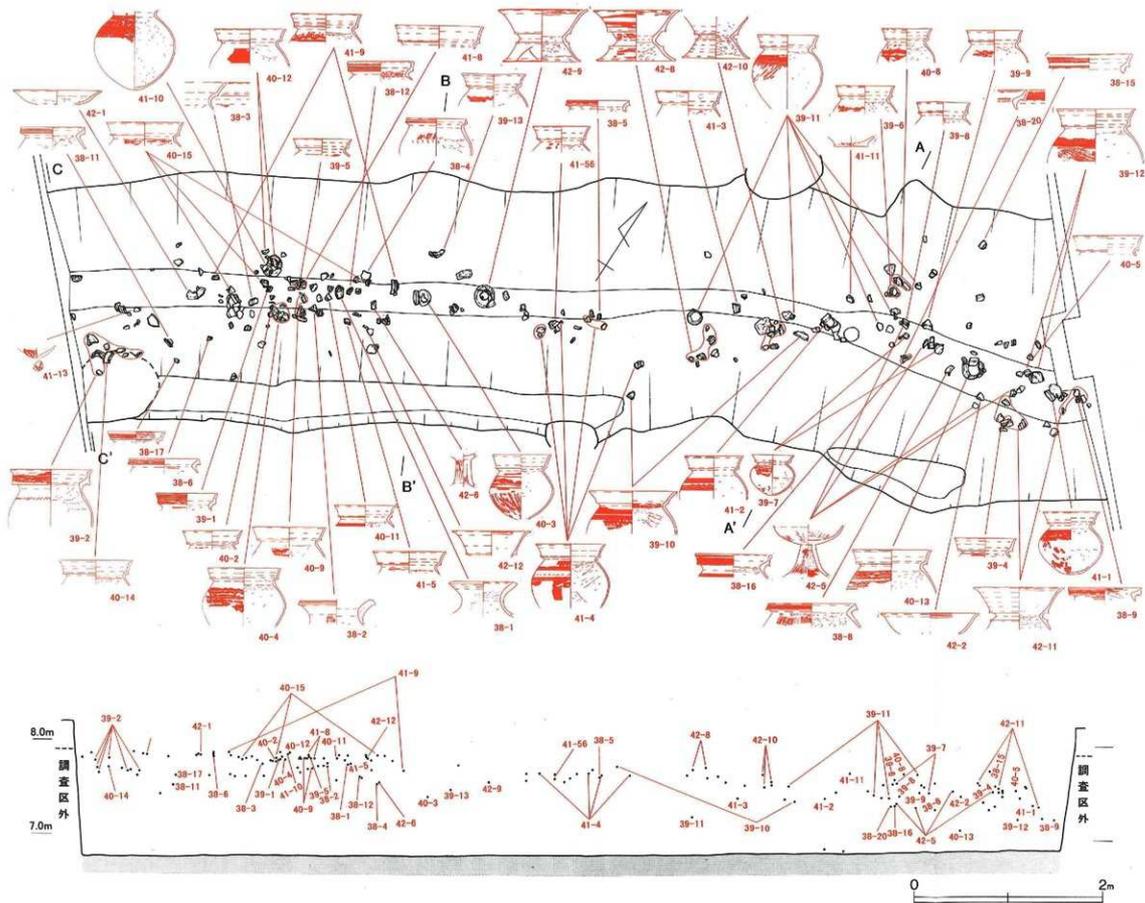
A38-4~A41-10は甕である。A38-4・11は口縁部を内傾させて上に拡張した面に各々2条と3条の凹線文を施したもの。A38-5~10は口縁部を内傾したものからやや外傾ぎみに直立させて上下に拡張させた面に3~4条の凹線文を施したものである。10の口縁部内面にはミガキ調整が行われている。

A38-12~A39-2は所謂複合口縁で口縁面に擬凹線文を施したものである。口縁部は直立したものから外反したものである。擬凹線文は6条から13条以上、18条のものもある。A39-2は擬凹線文を2~3回にかけて施し、A38-13は施文のちに部分的にナデで浅くなっている。口縁端部は膨らませて丸くおさめ、突出部はバラエティーはあるが相対的に太めに強調している。A38-12・17~19は口縁部内面調整にミガキを行っている。肩部に観察される平行沈線文及びA39-2に施文されている刺突文は、擬凹線文と同じ原体の可能性あり。

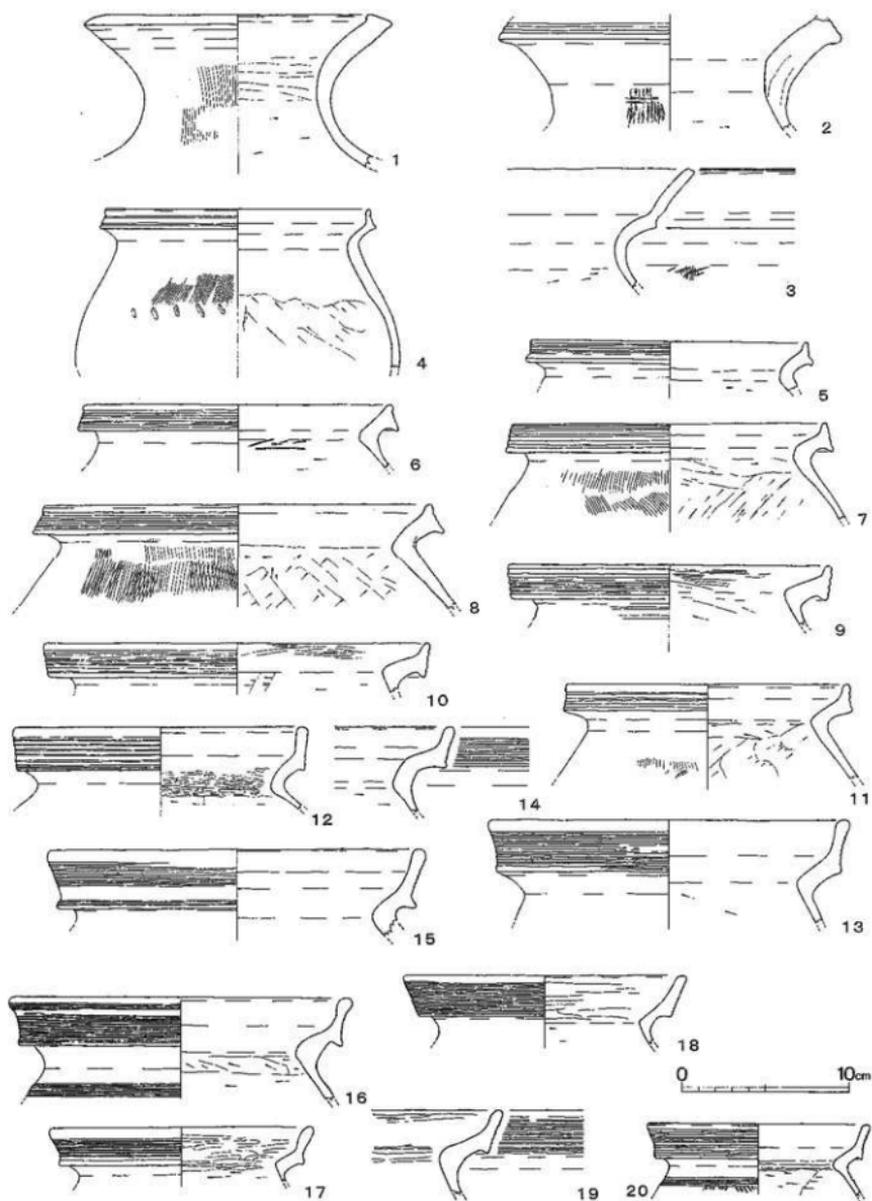
A39-3~A41-10は複合口縁の口縁部が外反し無文のものである。A39-4~9の口縁端部は引き伸ばしたものの、A39-3・10・12・13、A40-3の口縁端部は引き伸ばして丸く納めたもの、A39-11、A40-11、A41-3の口縁端部は外に伸ばして平坦面をつくろうとしているもの、A40-1・2の口縁端部は丸みのある平坦面を有するもの、A40-4~10の口縁端部は口縁部からまっすぐに伸びて平坦面をつくるもの、A40-13~15、A41-1・2・4~8の口縁端部は外に曲げて平坦面をつくるもの、A41-9の口縁端部は内に曲げて平坦面をつくるもの、A40-12の口縁端部は肥厚させて平坦面をつくる。突出部の形態は、口縁



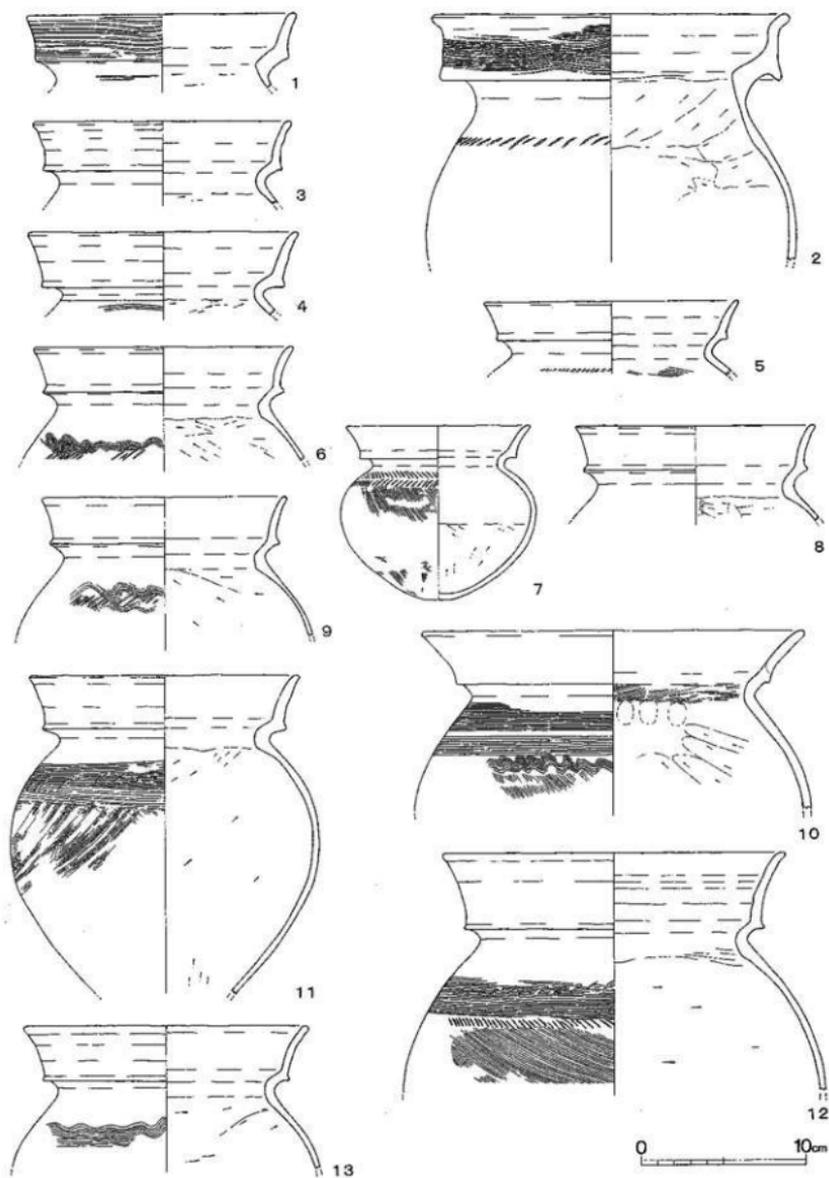
A36図 SD28実測図 (S=1/60)



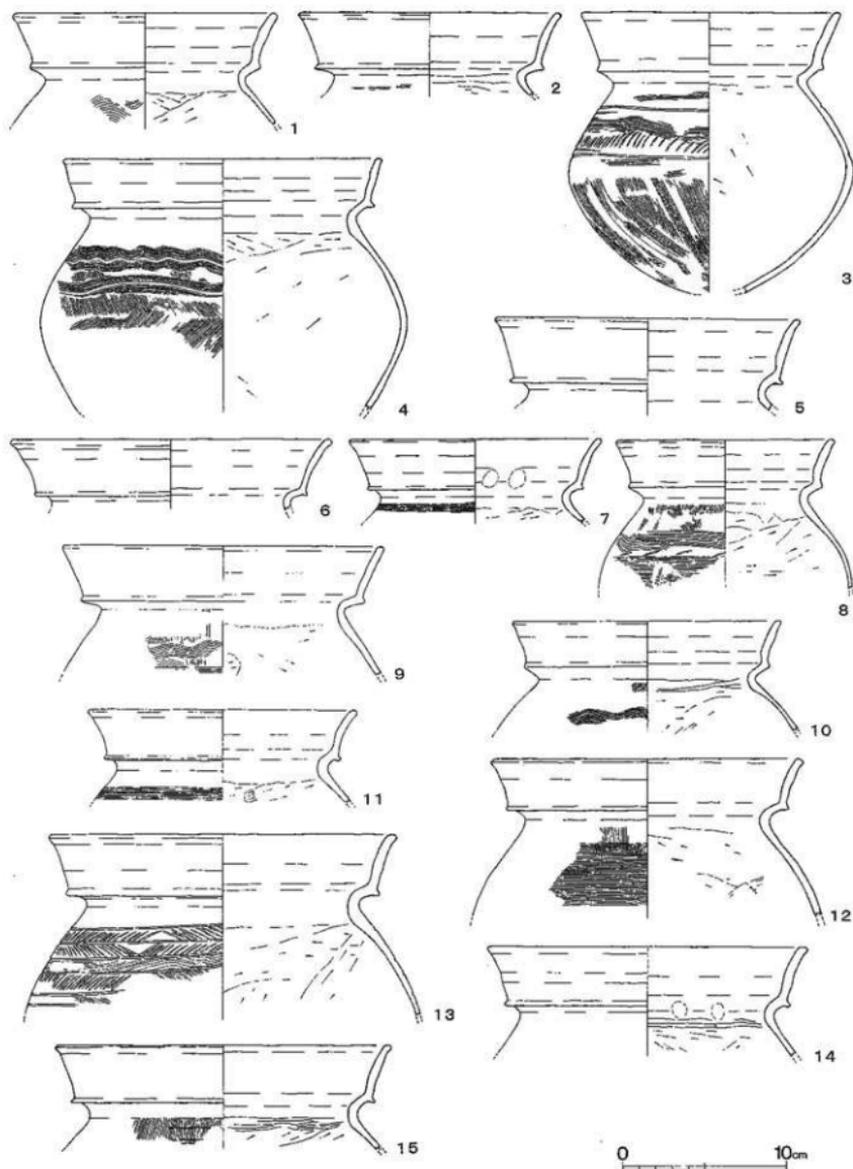
A37図 SD26遺物出土状況図 (S=1/40)



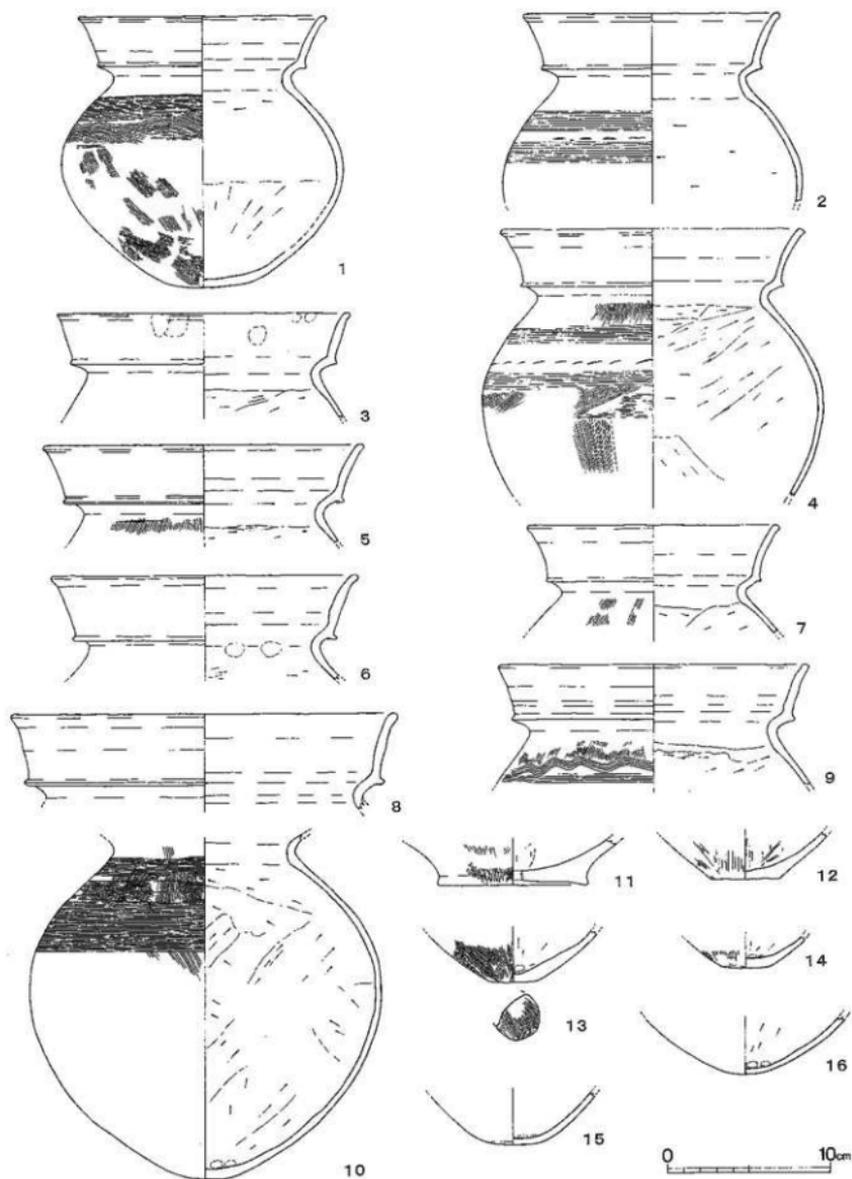
A38図 S028出土遺物実測図1 (S=1/3)



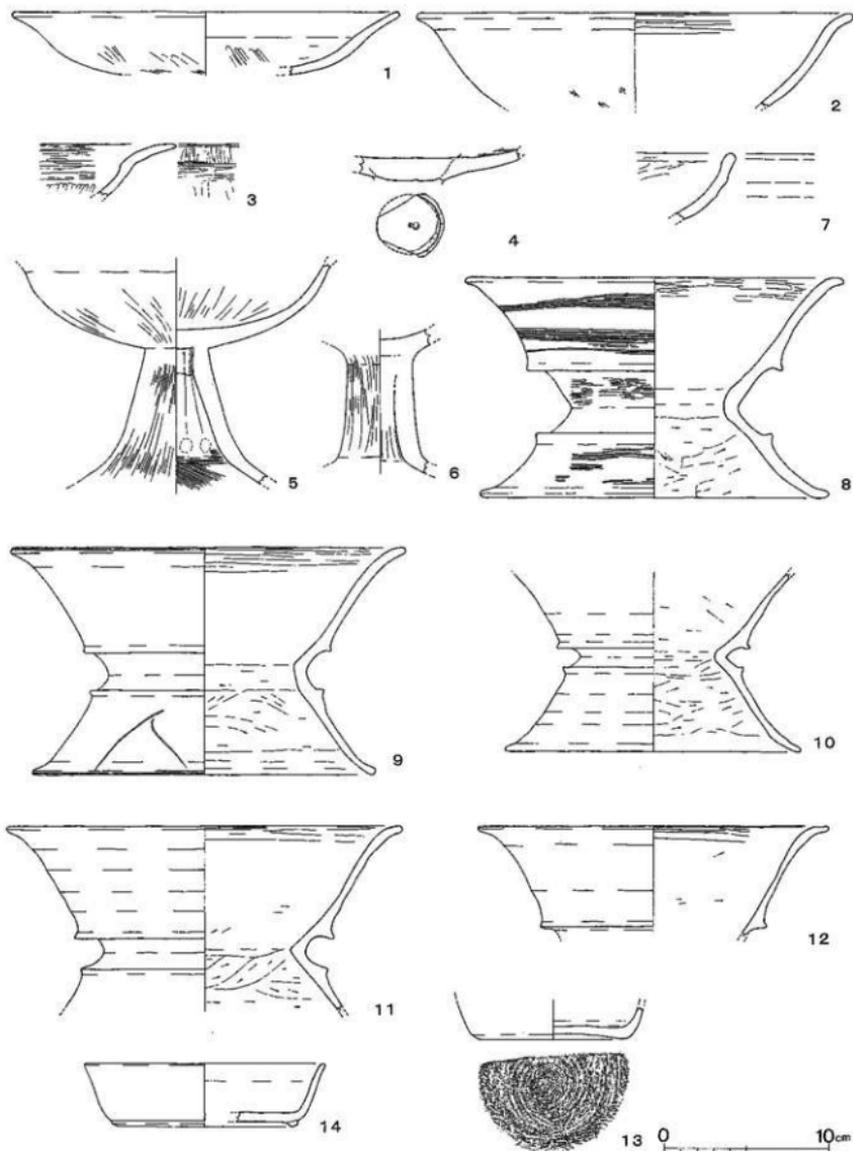
A39圖 SD28出土遺物実測図2 (S=1/2)



A40图 SD28出土遺物実測図3 (S=1/3)

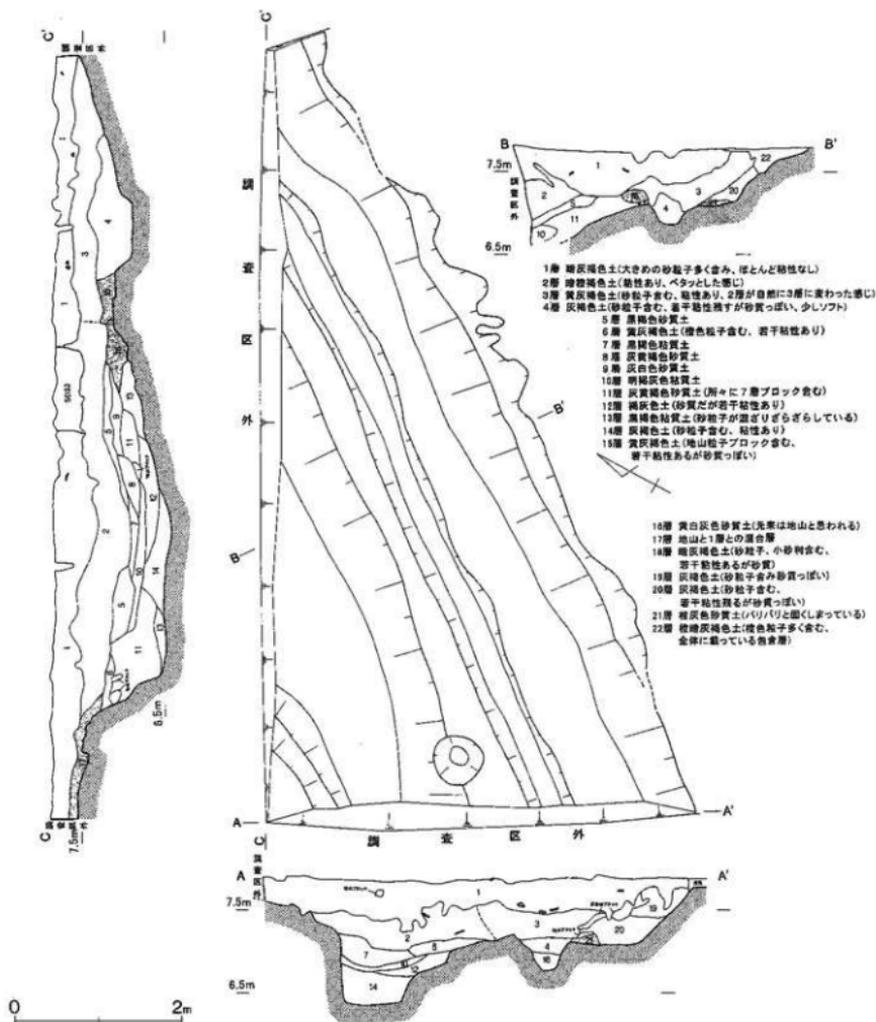


A41図 SD28出土遺物実測図4 (S=1/3)

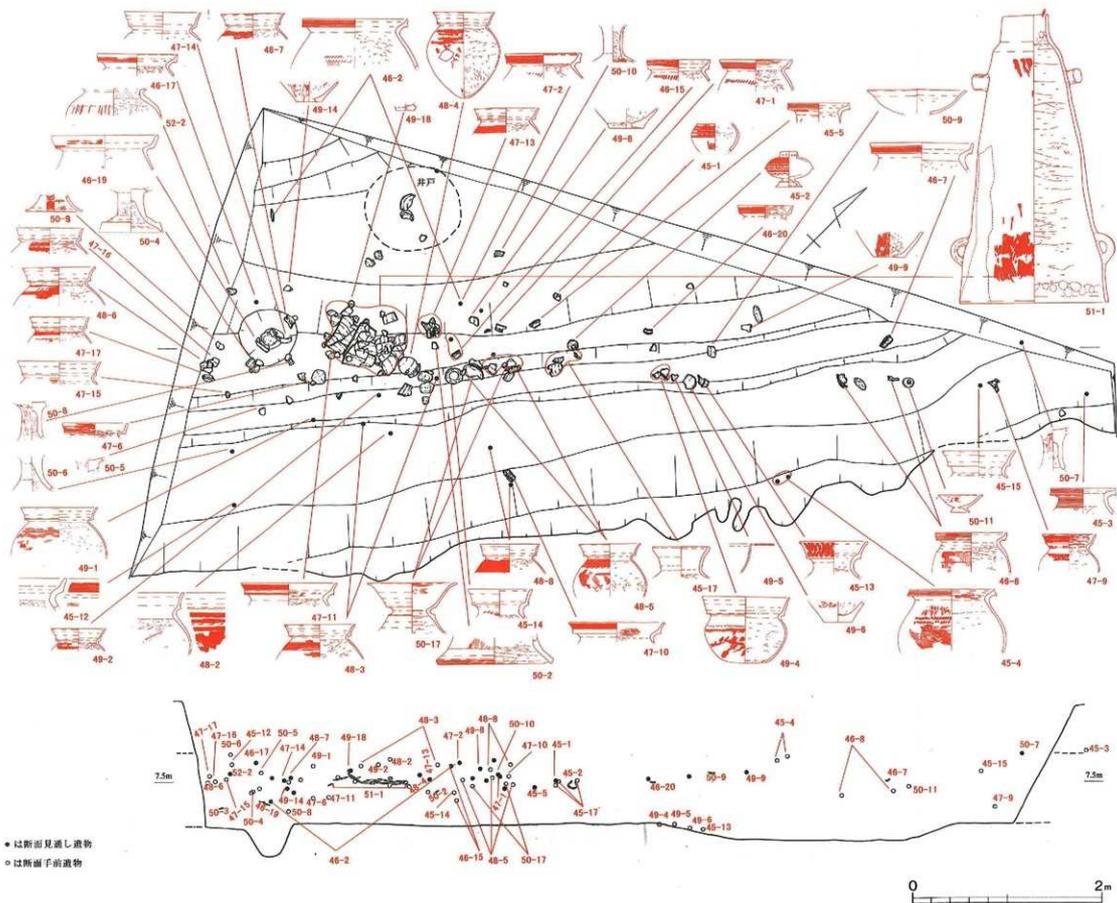


A42図 SD28出土遺物実測図5 (S=1/3)

部からのナデにより突出させるもの、口縁部と頸部の両方からのナデによりつまみ出したように突出するもの大きく2形態に分類できた。前者はA39-4~11、A40-1・3・8~10・12・13、A41-1~3・9、後者はA39-3・12・13、A40-2・4~7・11・14・15、A41-4~8である。体部形態はA39-7のような肩部の張った寸詰まりのもの、A39-11のような肩部が張り裾すばまりとなる所謂倒卵形を呈するもの、



A43図 大溝実測図 (S=1/60)



A44図 大溝遺物出土状況図 (S=1/40)

A40-3・A41-1のような胴部最大径が中央近くまで下がり小詰まりのもの（胴張りのもの）、A41-10のように胴部最大径が肩部より下がったものなどがある。施文は基本的に肩部に施しており、図示していないものは欠損のためであると考えられる。貝殻腹縁・ヘラによる刺突文、貝殻腹縁による波状文・平行沈線文などが組み合わされて文様構成をなしている。また例外的にA40-3のような基本的な文様構成を区画するために上下に凹線文を施しているもの、A40-13のように区画のための凹線文の間にヘラ描き文を施しているものがある。A40-12・A41-10はハケ目自体による多条の平行沈線文を施す。底部形態はA39-7、A41-1・10より、A41-1は径がやや広いが、3者とも稜線があまく底部の痕跡を残す程度のものである。また相対的に薄手のものが多い。

A41-11～16は煤が付着しているので壺の底部とする。11・12は径の違いはあるが稜線の明瞭な平底である。13～15は稜線があまく底部の痕跡を残す程度のもので、16はほとんど稜線の痕跡も観察できないものである。

A42-1～6は高坏である。1～4は坏部破片で、1・3は浅め、2は深い立ち上がりを呈する。1・2の口縁部は単純に外反するが、3は強いナデにより段を付けて外反させている。4は径約5cmある大きめの充填用の円盤を有する。5は椀形の立ち上がりを呈する坏であるが口縁は外反するようで段がわずかに残存している。刺突痕は観察できないが円盤充填法で接合された脚柱部は緩やかに傾斜し裾広がりとなるようである。6の接合方法は不明であるが、脚柱部は直線的で裾広がりとなる。

A42-7は鉢と考えられる口縁部で、外面には強いナデにより突帯状に段をつくる。

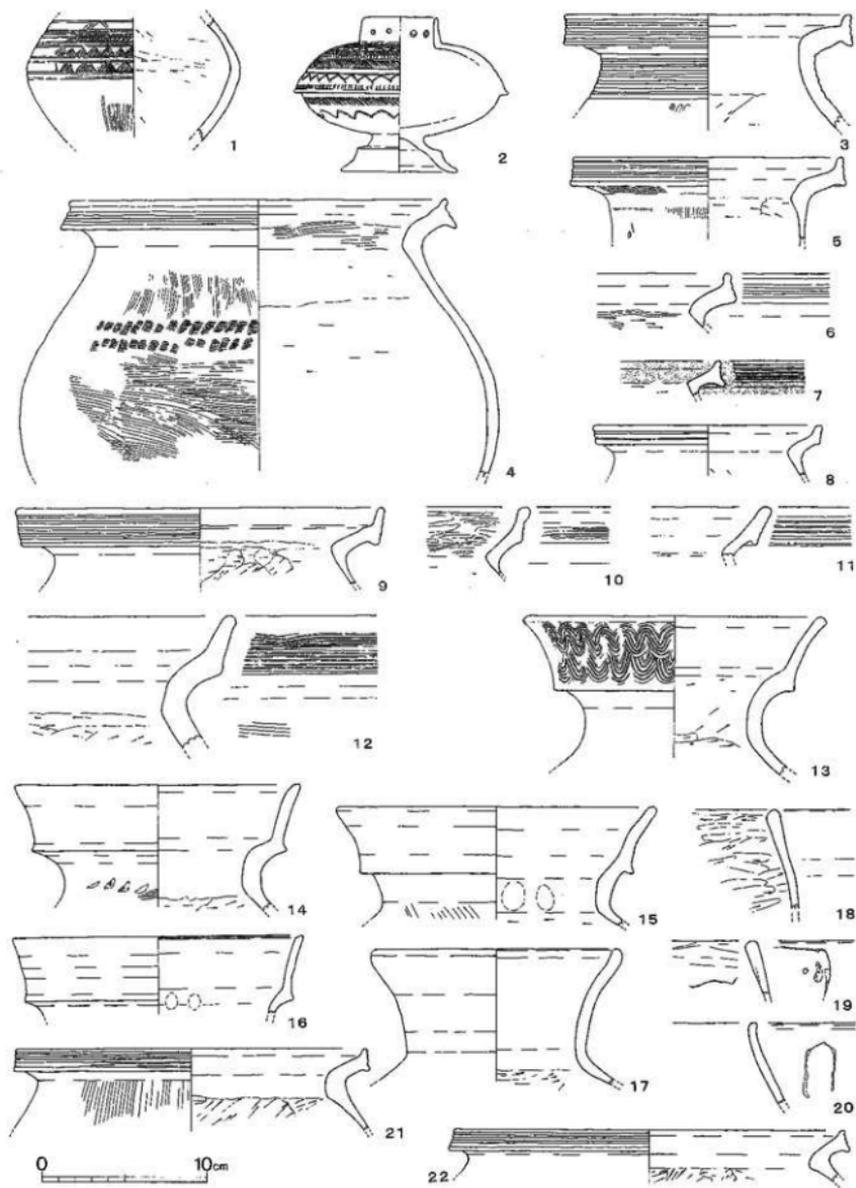
A42-8～12は鼓形器台である。10は若干小ぶりだが、他は口・底径ともに20cm強、器高13、4cmの規格である。8は他のものより厚手で筒部が長く、調整痕もやや粗い。また受部・脚部外面には、貝殻腹縁による擬凹線文を施したのちにミガキながらナデ消している。9の筒部は若干長いが10・11は短く、11の内面筒部は稜線のみである。9の脚部外面には焼成前に描かれた2本のヘラ痕がある。故意に付けたものか、偶発的なものか、「人」と読めるのである。左の1本は右上から左に湾曲しながら裾部でスッと終え、右の1本は左上からまっすぐ下げたと思うと右へ曲線を変えながら裾部でスッと終える。

A42-13・14は上面にて出土した須恵器で、後世の混入品である。13は底部から若干膨らんで直立ぎみに立ち上がる。14は底部外縁に小さな高台の付くもので内湾して立ち上がり、口縁は外反する。

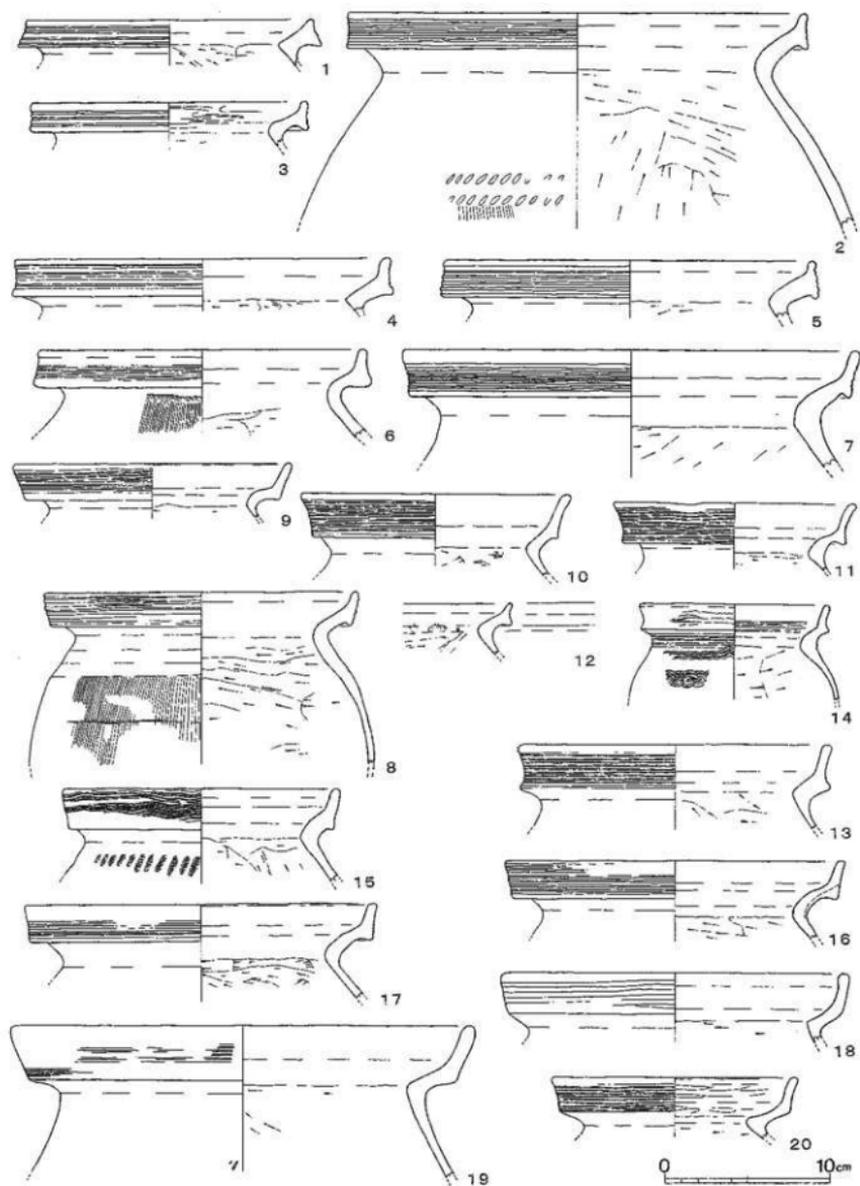
以上より、当遺構は弥生中期末に掘削され、古墳初頭（草田6期）には廃棄されたと考えられる。

大溝（A43～A54・A65図）

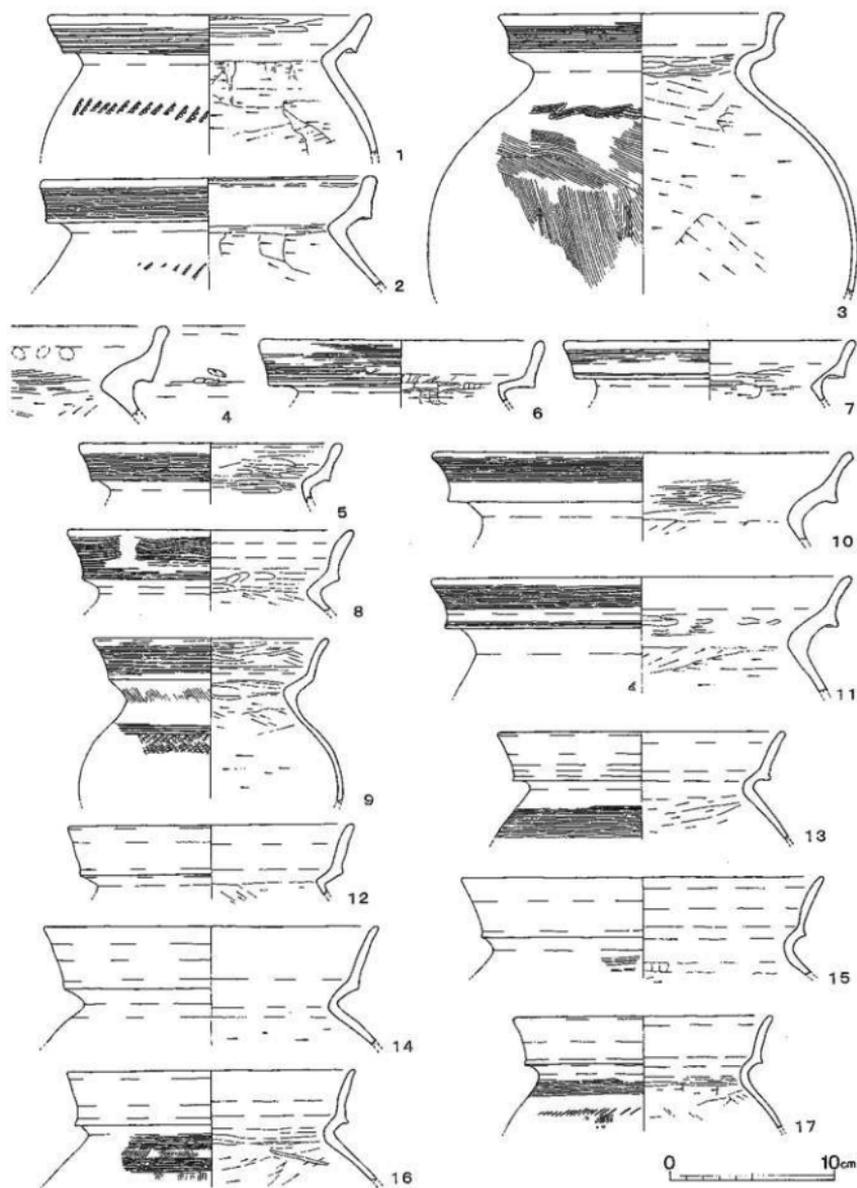
B・C-1・2Gr内、標高7.9mで検出した。調査区北隅での検出であり調査区外へと延長する。平面形態が三角形を呈しているが、大きな溝状遺構である。検出長10.4m、検出幅5.1mでN-35°-Eに位置する。掘り上げの断面は「W」字状を呈しているが、後述するように掘り直しによる断面形態と考えられる。「W」字状の各々を北側の溝をN、南側の溝をSと名付けて以下記述する。N単独の上幅は1.5～2m、底面幅は60～130cm、検出面からの深さは約1.5m（底面標高6.4m）、S単独の上幅は約50cm、底面幅は約25cm、検出面からの深さは約1.1m（底面標高6.8m）である。NSともに西端底部は東端底部より10～15cm低く若干の勾配を伴う。NS間は25～60cmで、北西隅にも若干の平坦面が確認されるが、緩やかな傾斜を呈しているため、立ち上がっていくものと思われる。



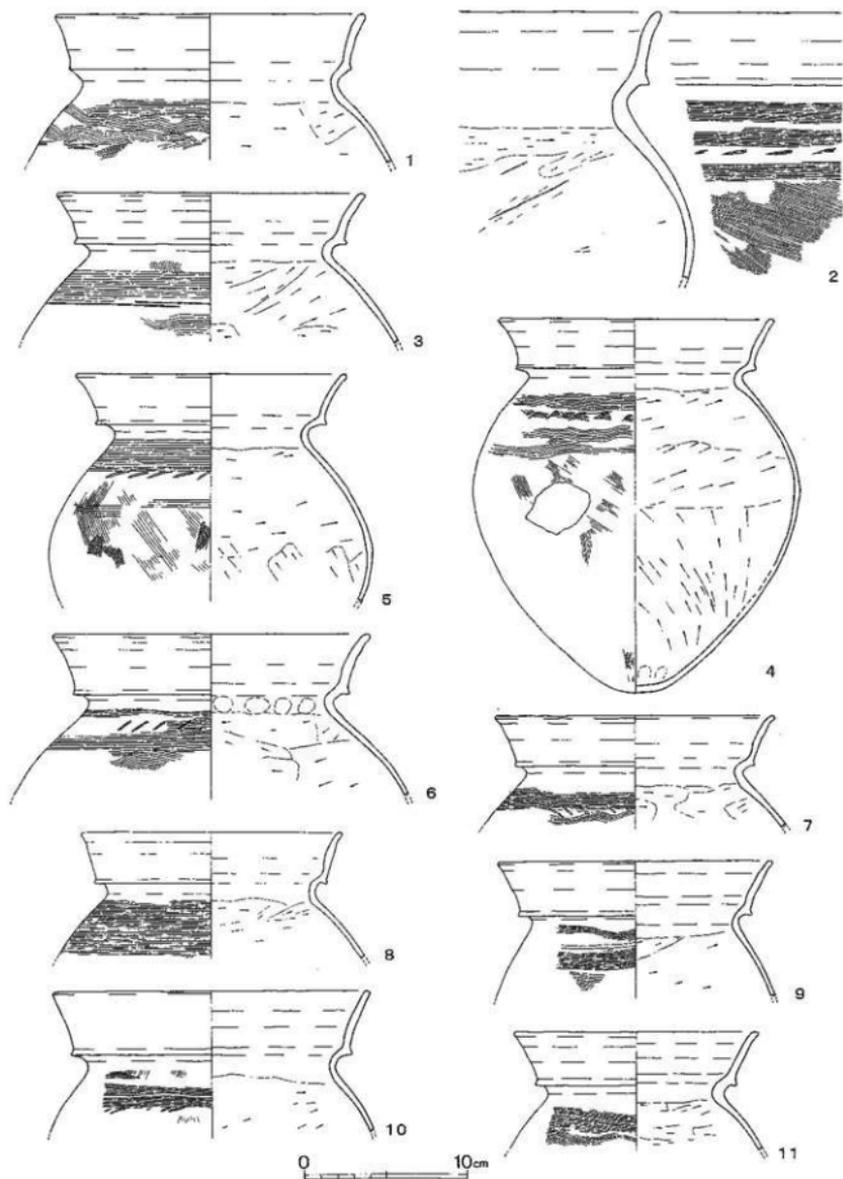
A45図 大溝出土遺物実測図1 (S=1/3)



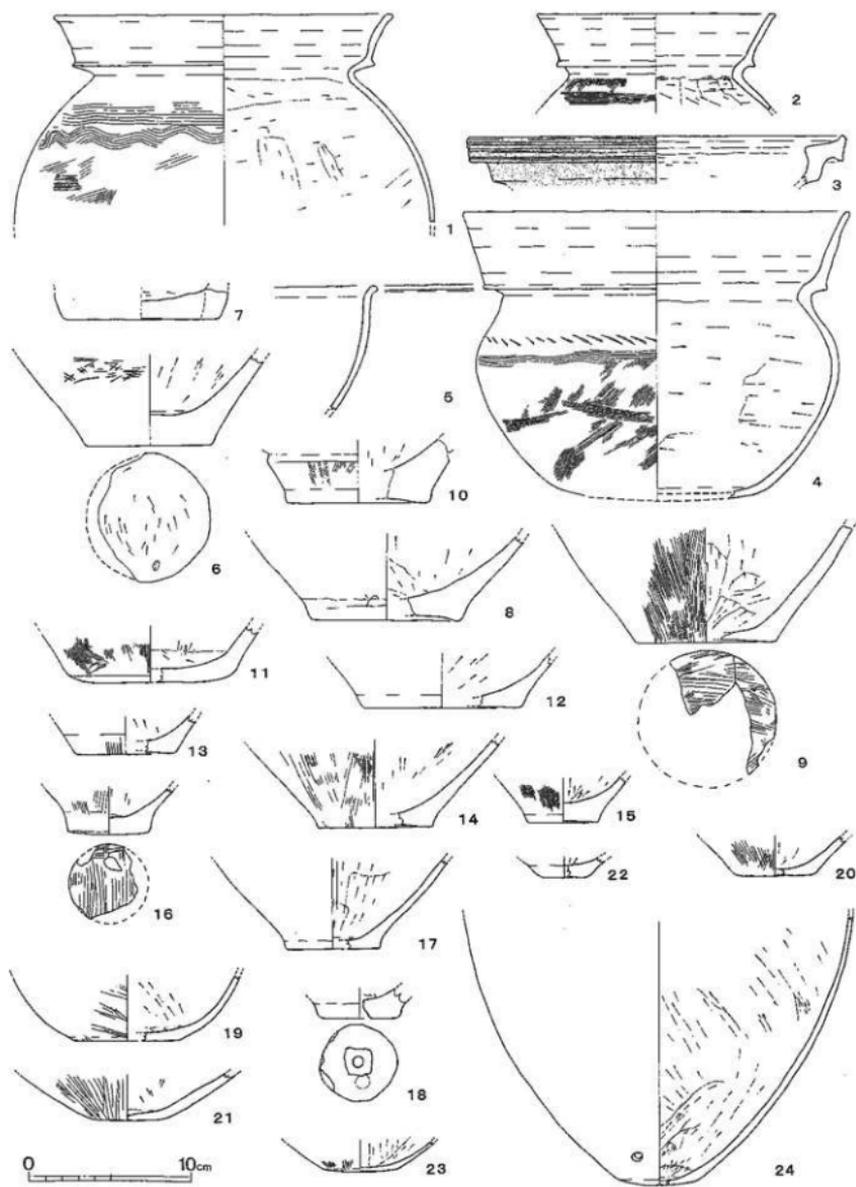
A46図 大溝出土遺物実測図2 (S=1/2)



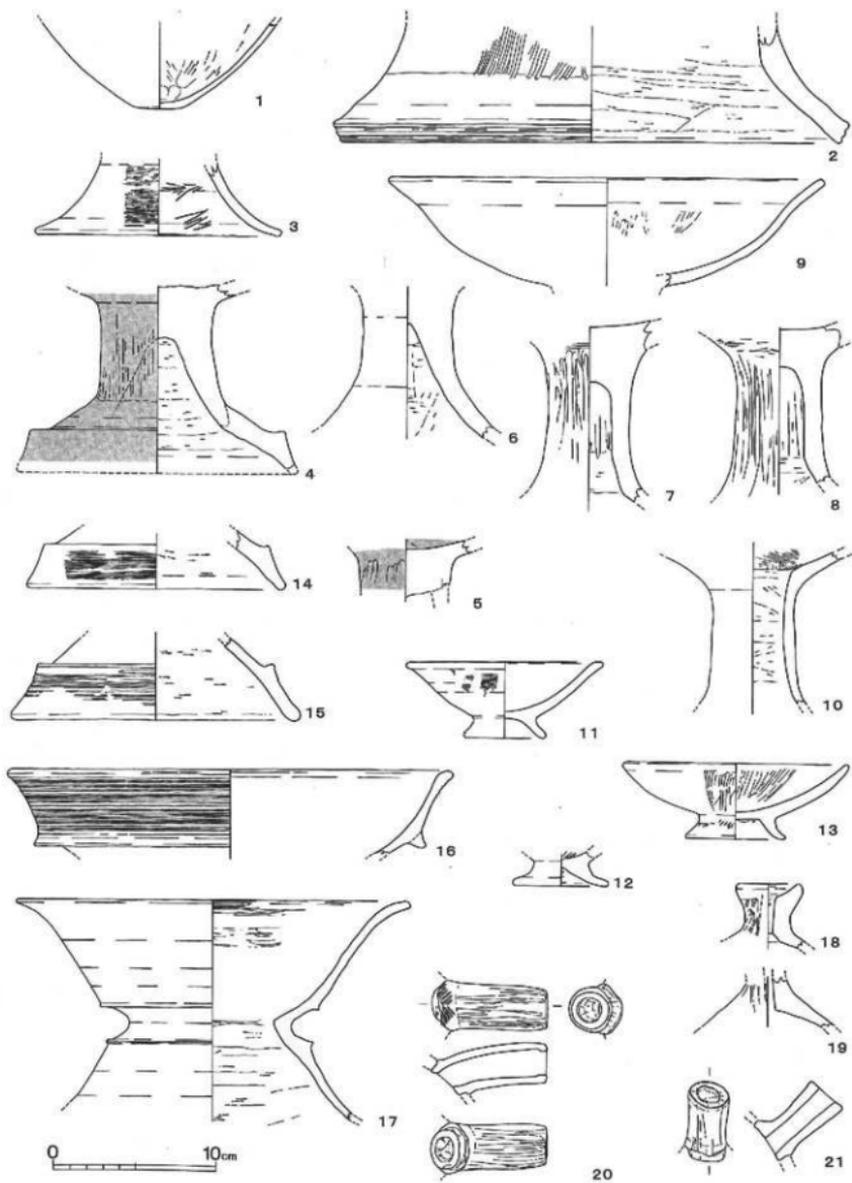
A47图 大溝出土遺物実測図3 (S=1/2)



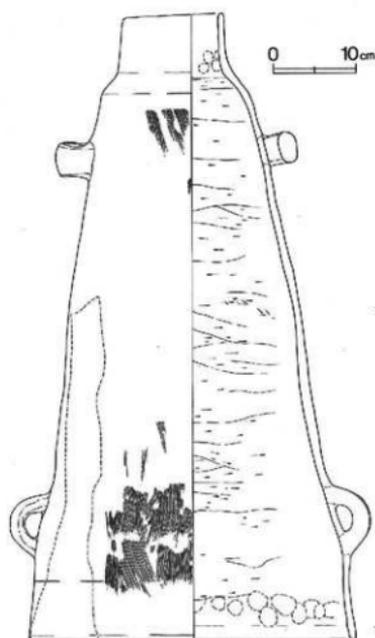
A48図 大溝出土遺物実測図4 (S=1/3)



A49図 大溝出土遺物実測図5 (S=1/5)



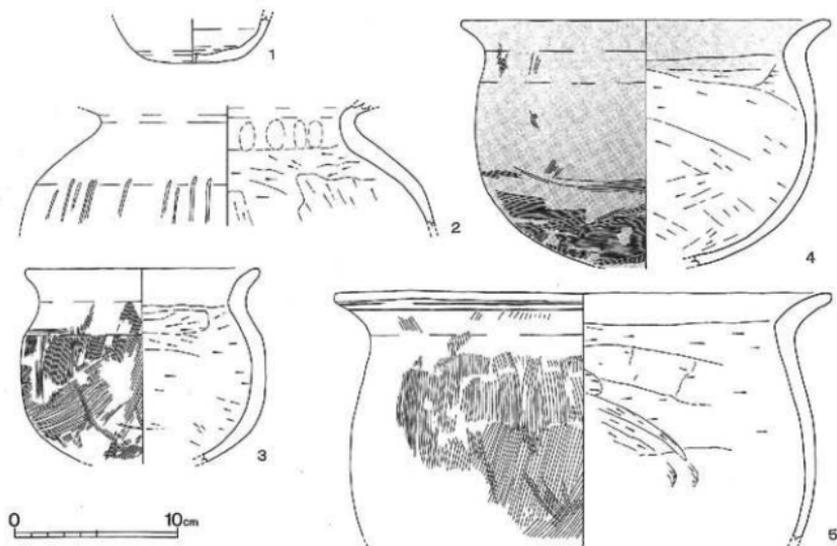
A50図 大溝出土遺物実測図6 (S=1/2)



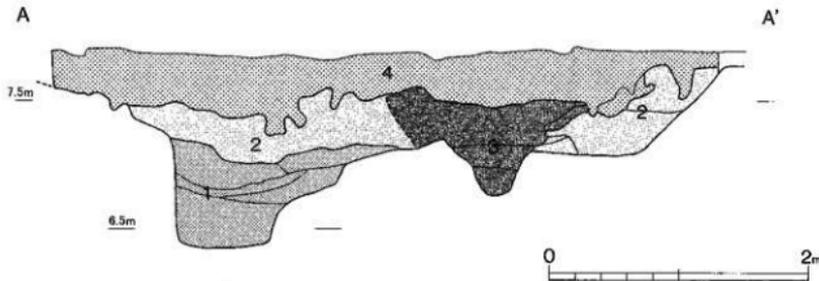
A51図 大溝出土遺物実測図7 (S=1/6)

A53図は土層の断面A-A'の掘り直し状況を1～4と古い方から順位を付けたものである。1(N)は他の土層にはない粘土に近い粘質土と砂質土が層を成して堆積しており、耐水状況が想定できる。2は1が堆積したのち幅を拡張して掘削したようである。3は2が堆積したのち深く掘削を行い、最終段階の4の時には再び幅を広げるが浅い溝で、中央西寄りの位置に土器の一括廃棄を行っている (A44図)。甗形土器を中心に装飾壺、壺、鼓形器台などの完形品が捨てられていた。

出土遺物は、弥生土器・古式土師器・土師器・砥石などがコンテナ5箱分である。前記した一括廃棄の土器が集中して出土するのは4(1層)の下底である。また終末から古墳初頭の土器のほとんどが4からの出土であるのに対し、後期の土器は1～3の主要な土器であ



A52図 大溝出土遺物実測図8 (S=1/6)



A53図 大溝掘り直し土層断面図 (S=1/60)

る傾向を示している(表1)。しかし調査時に4期の掘り直しの意識はまだなく、2と2と同レベルの3出土の遺物を一緒に取り上げたり、2・3の下半から下を下層として1・3の遺物を一緒に取り上げたりと混在させてしまっているため、1~4各期の時期を特定するには至らない。

A45-1・2は装飾壺である。1は同一のヘラにより、胴張りの体部の上半部に沈線2条による帯状の区画をし、上から両開きの刺突文、有軸斜格子文、平行沈線文を有する鋸歯文2段を施す。朱塗りの痕跡が観察される。2はほぼ完形のもので算盤状に胴が張り踏ん張りのきいた脚が付くもので、直立した口縁部には2個1対の穿孔がある。おそらくヘルメット状の蓋付きでその紐掛けであろう。貝殻腹縁による秀麗な文様が胴部上半全体と下半上部に施されている。各文様は沈線により区画され、文様の区切りには爪形文を施している。

A45-3~17は壺である。口縁部が、3~5・7は上下に拡張し口縁面に3~5条の凹線文を施したものの、6・8は上に拡張し口縁面にそれぞれ3条の凹線文、2条の沈線文を施したものである。9~16は所謂複合口縁のもので、9~12は口縁面に5条以上の擬凹線文を施したもので、10はナデ消したのか下半部分にのみ凹線が2、3条残る。13の口縁面には上下2段の波長の狭い波状文を施している。3の頸部には口縁部の凹線より若干幅広の7条の凹線文を施し、その下部に刺突文の痕跡が観察できるが風化のため不明瞭である。4の肩部には浅く施文した2段の刺突文があり、14の頸部にも浅く施文した刺突文が観察される。16は直立さみ

の口縁部の端部に平坦面をもち調整の時に付いた沈線が観察される。17はあまりシャープでない直口壺で、口縁端部が内傾して丸くなり、肩部以下はかなり薄い作りとなる。胎土に赤褐色粒子などを含み在地の胎土とは異なる

表1 大溝層位(4期)別出土遺物状況表

時期 層位	草田1	草田2	草田3	草田4	草田5	草田6	合計
1	2 (16.5)	5 (41.5)	2 (16.5)	2 (16.5)	1 (9)		12 (100)
2	2 (16.5)	5 (41.5)	4 (33)		1 (9)		12 (100)
3	8 (35)	9 (39)	3 (13)		3 (13)		23 (100)
4	8 (14.5)	12 (22)	5 (9)	5 (9)	19 (34.5)	6 (11)	55 (100)
(注) 上段: 個体数 下段: ()内は同層位における比率						総個体数	102

るため、搬入品の可能性あり。

A45-18～20は無頸壺でプランデーグラス状の体部をもつと考えられるものである。3点とも内外面にミガキ、丁寧なナデを行い、綺麗な仕上がりにしている。また19・20の外面には剥離痕が観察され、何か貼り付けてあったものと考えられる。

A45-21～A49-2は甕である。A45-21～A46-3・5は口縁部を内傾させて上下に拡張した面に各々3～5条の凹線文を施したもの。A46-4・6は口縁部を内傾させて上に拡張した面に4は4条の凹線文を施し、6はハケ目原体でナデのような沈線文を施す。A46-3の口縁部内面にはミガキ調整が行われている。またA46-2の肩部には2段の刺突文が施されている。

A46-7～11・13・15～A47-3・5～A47-11は所謂複合口縁の口縁面に擬凹線文を施したものである。口縁部は直立ぎみに外反したものの、内湾ぎみのもの、外反するものがある。擬凹線文は4条から14条を施し、その内A46-15～17、A47-6～11は部分的にナデ消しを行っている。A46-14は擬凹線文の代わりに波状文を施し、A46-12・A47-4は無文である。口縁部端部は、膨らませて丸くおさめるものA46-7～15・18・19、A47-1・2・4～7・10、口縁部幅と同じ幅かそれ以上の平坦面をもつものA46-16・17（この2個体は同一個体の可能性あり）、A47-3、口縁部が外反するのと同時にすっきりと丸くおさめたものA46-20、A47-8・9・11がある。突出部は、意識して引き出すものA46-7・8・16・17、A47-1・2・4・5、口縁部が受け口状となり突出しないものA46-9・15・18～20、A47-3・6・7・9、口縁部が強く外反しそれに伴って斜めに突出するものA46-10～14、A47-8・10・11がある。A46-20～A47-3・5・7～11は口縁部内面調整にミガキを行っている。A46-14は頸部に4条の擬凹線文、肩部に波状文、曲線を組み合わせた波状文を施す。A46-15・19、A47-1・2・11は肩部に刺突文を施す。A47-3は原体を引きずるように波長の長い波状文を施す。A47-9は肩部に4条の擬凹線文を施し、その直下に2段の刺突を重ね合うように施し格子模様になっている。

A47-12～A49-2は複合口縁の口縁部が外反し無文のものである。A47-12・13、A48-1～3の口縁部端部は引き伸ばして丸くおさめたもの、A47-14～17、A48-4～8の口縁部端部は引き伸ばしたものの、A48-9～A49-2の口縁部端部は若干外に曲げて平坦面をつくっている。突出部の形態は、口縁部からのナデにより突出させるもの、口縁部と頸部の両方からのナデによりつまみ出したように突出するもの大きく2形態に分類できた。前者はA47-12・14・15、A48-1・4・10、A49-1、後者はA47-13・16・17、A48-2・3・5～9・11、A49-2である。体部形態はA48-4のような肩が張り出すばかりとなる所謂倒卵形を呈するもの、A48-5のように胴部最大径位が中央近くまで下がり寸詰まりとなるものなどが想定されよう。施文は基本的に肩部に施しており、図示していないものは欠損のためと考えられる。貝殻腹縁・ハケ状工具による刺突文、貝殻腹縁・クシ歯状工具による波状文・平行沈線文、小口による平行沈線文などが組み合わせられて文様構成をなしている。底部形態はA48-4のみが完形品であり想定する資料となる。牛乳瓶蓋くらいの径で稜線があまく底部の痕跡を残す程度のものである。また相対的に薄手のものが多い。A48-4の胴部には径3cm強の焼成後に行われたと考えられる穿孔がある。

A49-3～5は鉢である。3は口縁が上下に拡張して面をもち3条の凹線文を施すもので、内外面とも朱塗りの痕跡が観察される。器形から高坏とも捉えられるが、内面調整にケズリを行っているので鉢とした。4は長めの複合口縁を有し胴部の張ったもので、底部の稜線はあまく不明瞭ではあるが底部の

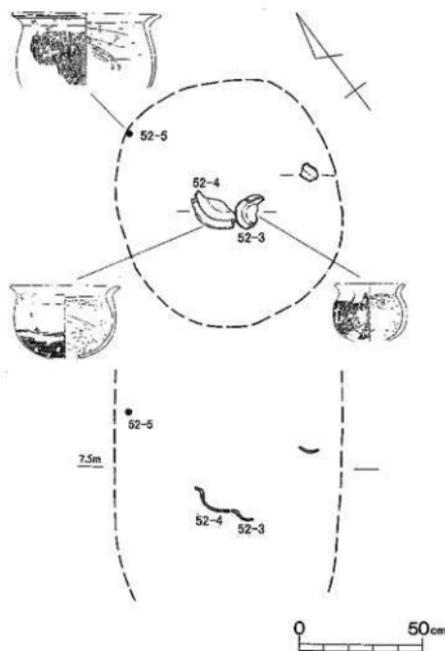
痕跡を残すものである。肩部には同原体による刺突文、平行沈線文を施す。5は無頸のもので口縁部は小さく外反する。内外面ともミガキ調整が行われる。

A49-6～A50-1は壺・甕・鉢などの底部である。7～10・12は底径9.4～8.4cmの大型の平底、6・13・14・17は底径7.5～5.6cmの中型の平底、15・16は底径4cm台の小型の平底である。11・18～22は11のみ底径10cmと大型の部類に入るが、あとは底径6.4～2.2cmで小型の稜線のあまい平底である。23～1は底径4.8～2.9cmで底部の痕跡を残すのみのものである。しっかりした平底は器壁が厚く、稜線をあまくする程器壁が薄くなり、痕跡を残すのみのは極薄の器壁となる傾向にある。外面調整にミガキを用いるものは6・21で、他はナデ及びハケ目調整である。6の外面には小さなキズ痕が観察されるが調整時のものかは不明である。23は外面底部付近にタタキらしき痕跡が観察できる。6の底面には1粒の初痕が観察され、7では底部円盤を囲むように器壁を立ち上げて成形する様子が観察される。18の底部中央には径6mmの、24の胴底部付近には径8mmの焼成後に行われた穿孔がある。

A50-2・3は脚部で、2は底径が30cmもある大型品である。裾部に面をもち2条の凹線文を施す。3は若干薄い器壁で、外面に細い横位のミガキを施す。橙色を呈し、A45-20と酷似した胎上をもつ。

A50-4～10は高坏である。4は接合部径7cm、底部復元径16.9cm、残存高11.3cmで、高さの割に厚く重量感ある作り。脚裾部は複合口縁状で安定している。5の接合部には4×3cmの固まりの粘土を充填している。4・5の外面及び坏部内面には朱塗りを施す。6～8・10は脚柱部であるが、脚部奥の接合部は粘土でナデ付けており、接合痕は観察できない。10の脚部から坏部へ移行した上面にはキズ状の接合痕が観察される。9の坏部は体部が丸みを帯び、口縁部が外反するもので端部は矩型におえる。以上の高坏脚部調整は観察可能なものは全てミガキを行っており、9の内外面もミガキを行っている。

A50-11～13は低脚坏である。11の脚部はまっすぐ着地し、12・13のそれは外反して踏ん張る。また11の口縁端部は外へ伸ばして平坦面をもつが、13のそれは内湾して丸く終える。11はこのように全体的な器形及び脚部内面調整が丁寧であり、部分的に煤が付着していることより、蓋として用いられた可能性もある。12・13の坏部内外面にはミガキが行われる。



A54図 大溝内検出井戸遺物出土状況図 (S=1/20)

A50-14~17は鼓形器台である。14~16は受部・脚部ともに短い面をもち擬門線文を施すもの、17は受部・脚部は長い面をもつが、筒部が短く無文のものである。

A50-18・19は中央に穿孔をもつ蓋の、18はつまみ部、19は笠状の胴部である。18の孔内には縦方向のスジ状の調整痕及び上下口に粘土の盛り上がりが見られるので、棒状のものに粘土を貼り付けて成形したものと考えられる。

A50-20・21は注口部である。壺・甕の胴部に挿入して外面から粘土を付加していることが観察される。20は本体との接合付近上部に両開きの刺突文を施す。

A51-1は甌形土器で、今回の調査で唯一の出上品である。器高76.5cm、口径11.5cm、底径39cmの大型で細身の秀麗なものである。ほぼ完形品であるが細長い割れ口が底部方向より対角上に2ヶ所入っており、そのみが欠損部分となっている。口縁部は細く逆漏斗状となり、底部はラッパ状に開く。把手が上は横位、下は縦位の上下に付く。内面ケズリ調整の方向が中央位置で逆になっている。

A52図は当遺構内より出土した須恵器・土師器を掲載した。後述する土師器以外は混入品である。A52-1は須恵器の坏底部で、内湾して立ち上がる体部をもつ。A52-2は土師器の甕であるが、分厚い作りで肩が張り、外面胴部には細いヘラ状工具で縦方向に不揃いなミガキをかけている。

A52-3~5の土師器は、A44図の北西位置に円形破線の図示内で集中して出土している。平面精査では検出できず、掘削中に黒褐色のベタベタした粘土を確認しており、後世の井戸が存在したと考えられる。A54図にはその拡大図を掲載した。3・4は重なり合うように出土している。ともに器高が低く丸みを帯びた体部で底部は丸底と想定され、口縁部は頸部から屈曲し外反する。同型式の小型・中型品となろう。5の口縁部は3・4と同形態であるが、体部は長く伸びるものとなろう。4の外面及び口縁部内面には朱塗りが施されている。

A65-4は流紋岩製の砥石である。欠損して三角形を呈している。表面の高い位置が仕上げ研ぎで面に光沢がある。裏面は中研ぎで細い刃跡が観察される。

以上より、当遺構は弥生後期初頭に掘削され、古墳初頭（草田6期）には廃棄されたと考えられる。

SB01 (A55・A62図)

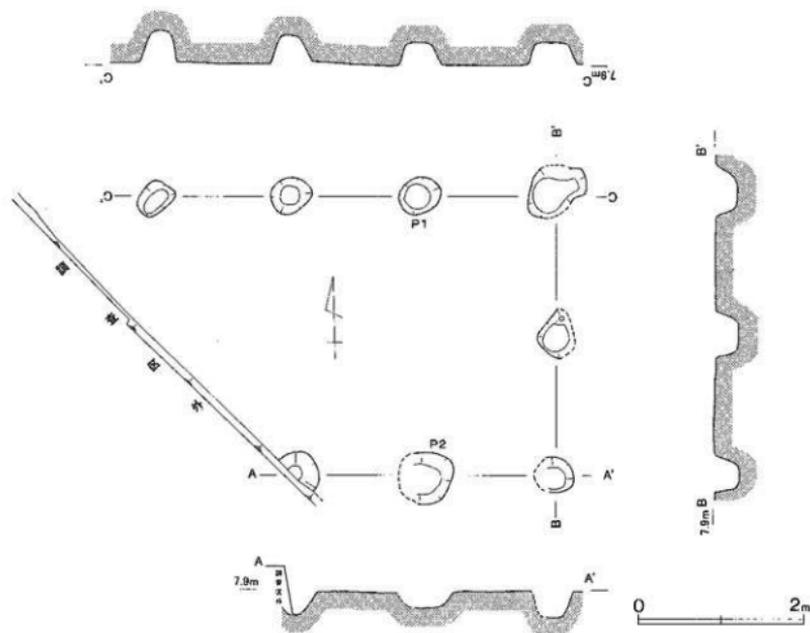
A・B-4~6Gr内、標高7.9mで検出した。調査区外へと延びるが現状で、3間×2間の桁行4.8m、梁間3.4m、深さ20~40cmで、W-1'-Nのほぼ東西に位置する。梁間2間としたが、1間として中央の柱穴は棟持柱の可能性あり。

出土遺物は、それぞれ小破片の弥生土器・古式土師器あるいは土師器が数点、1点のみ須恵器が出土しており、総合的に判断すると弥生土器から古式土師器の範疇と捉えられる。A62図には実測可能な弥生土器2点のみ（P1よりA62-1、P2よりA62-2）掲載した。1は甕の口縁部である。「く」の字状に屈折した頸部から口縁部に移行し、上下に拡張した口縁面には現状で2条の凹線文と1条の沈線文を施す。2はしっかりした厚みをもつ平底である。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生後期~古墳初頭に該当しよう。

SB02 (A57・A62図)

B・C-8Gr内、標高7.9mで検出した。SA02とP1が共用するが、1間×1間の桁行1.6m、梁間1.3m、深さ



A55図 SB01実測図 (S=1/60)

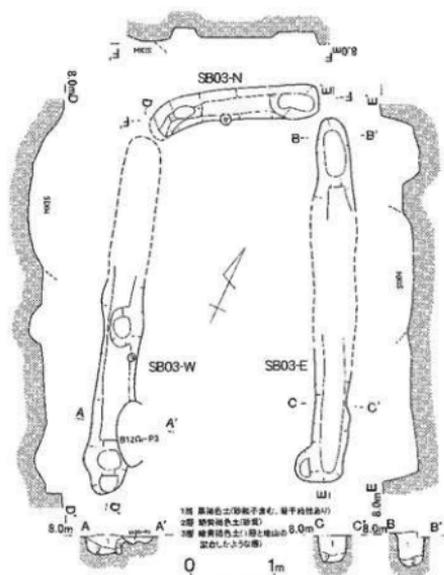
22～60cmで、N-32°-Wに位置する。P2はわずかにSK28を切っている様相を呈する（A15図）。出土遺物は、P1・P2から小破片の弥生土器あるいは土師器が数点である。A62-3はP1より出土した弥生土器の甕の口縁部である。「L」字状に屈折した頸部から口縁部に移行する。口縁端部は若干の肥厚が見せるが短型に終える。

以上より、当遺構の時期はSK28より新しいとのみ見える。

SB03 (A56・A62図)

B・C-12・13Gr内、標高8mで検出した。布掘りが2条平行とそれに直角するようにもう1条配置しており、平面形態は「コ」の字状となる。SD04に切られているが、SB03-Eは長さ4.45m、幅40～45cm、深さ35～45cm、SB03-Wは現存長2.8m、幅45～55cm、深さ25～40cm、E-W梁間2.64mを測り、N-26°-Wに位置する。これに直角するSB03-Nは長さ2m、幅40cm、深さ10～15cmと浅く、独立したものの可能性あり。底面はフラットな面にピット状の凹凸を伴う。

出土遺物は、弥生土器の小破片が小袋1袋分である。A62図には実測可能な2点を載せた。SB03-WからA62-4、SB03-EからA62-5。ともに甕の口縁部である。4は屈折した頸部から口縁部に移行し、上下に拡張した面には4条の凹線文を施す。5は複合口縁で端部を丸くおさめ、突出部は下からのナデによりわずかに意識し、口縁面には7条の擬凹線文を施す。



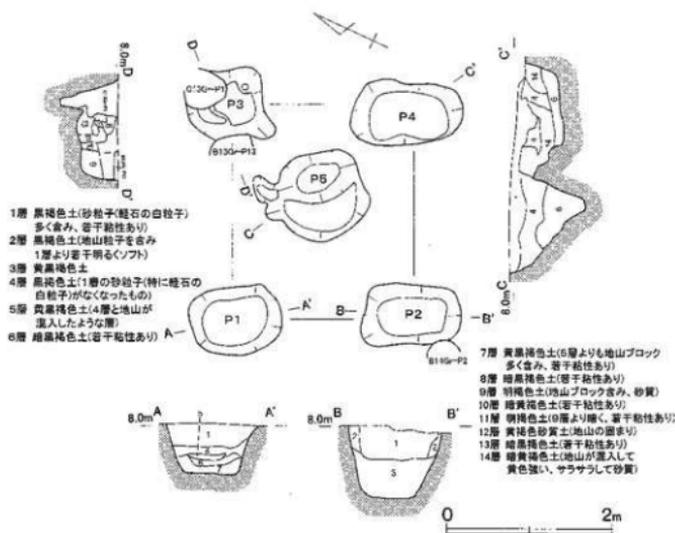
A56図 SB03実測図 (S=1/60)

SB04 (A57・A62図)

B・C-13・14Gr内、標高8.1mで検出した。1間×1間で、桁行2.6m、梁間2.2m、深さ50~90cmで、N-25°-Wに位置する。各柱穴の平面形態は長方形で、約110×80cmの大型で、中央にも同規模の柱穴が存在する。

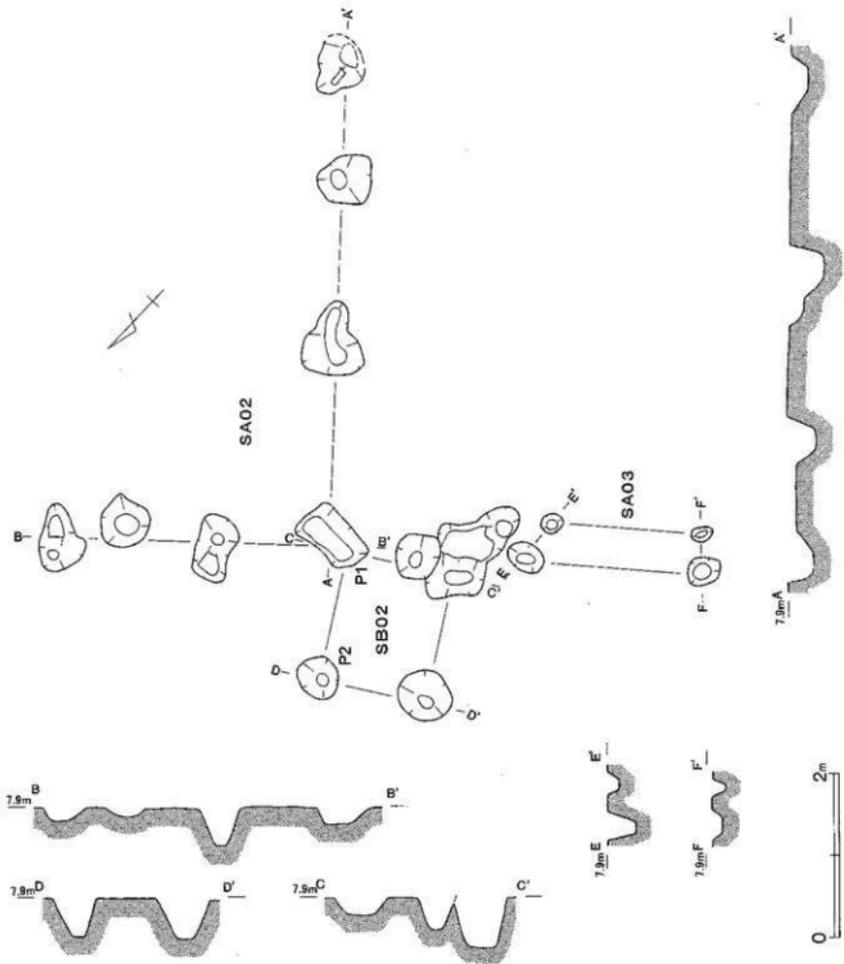
土層より柱根は観察されなかったが、それぞれ堆積状況に違いをみせる。柱根の腐食によるもの、柱を抜き取ったのちの自然堆積と人工的に埋めたものの違いであろうか。

出土遺物は、弥生土器の小破片が各柱穴より数点である。そのうち実測可能なもの3点を載せた。P1から出土したA62-6・7は甕の口縁部である。6は「く」の字に屈折した頸部から口縁部に移行し、口縁部は上下に拡張して面をもち、5条の凹線文を施す。頸部以下



A57図 SB04実測図 (S=1/60)

下の内面調整は、ケズリののち粗いナデを行う。7は短い複合口縁で端部は丸くおさめ突出部は下からの強いナデにより強く引き出した状態である。口縁面には12条の擬凹線文を施す。A62-8はP2からの出土である。高坏または器台と考えられる上部である。複合口縁でその面には4条のナデ潰したような擬凹線文を施す。口縁部から胴部へは緩やかに傾斜し移行する。内外面と



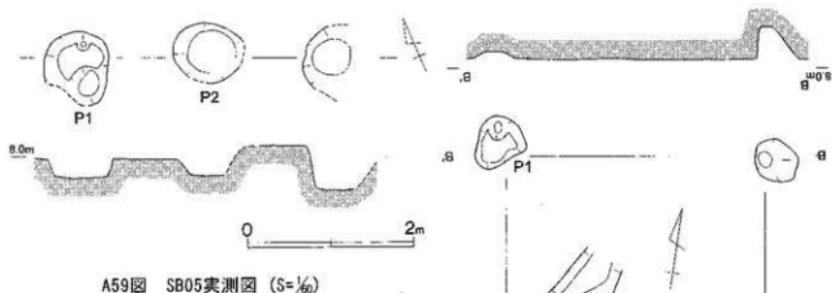
A58図 SB02・SA02・SA03実測図 (S=1/60)

もミガキを行う。

以上、SB03・04は若干のずれはあるが同方位に位置しており、時期もほぼ同様な弥生後期初頭～中葉に該当し、同時期併存していたと考えられる。

SB05 (A59・A62図)

C11Gr内、標高8.1mで検出した。3穴が等間隔で列をなしており、対応する柱穴列は調査区外と考え



A59図 SB05実測図 (S=1/60)

られる。2間×1間を想定し、桁行3m、梁間1m以上、深さ20～50cmで、W-23'-Nに位置する。各柱穴の直径は約80cmとSB04に次ぐ大きさではあるが、深度が小さい。

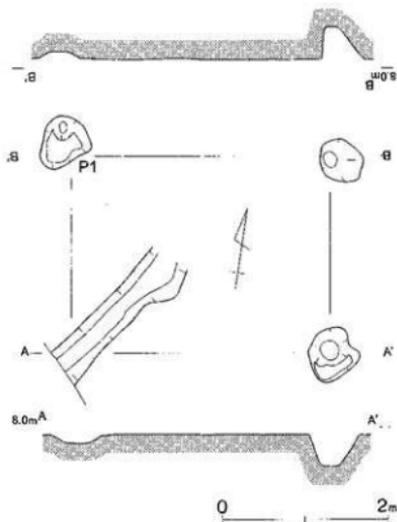
出土遺物は、弥生土器の小破片がP1・P2から数点である。実測可能なA62-9を載せた。9は甕の口縁部である。「L」字状に屈折した頸部から口縁部に移行し、口縁は上に拡張して面をもち4条の凹線文を施す。口縁端部は丸くおさめる。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生後期～終末に該当しよう。

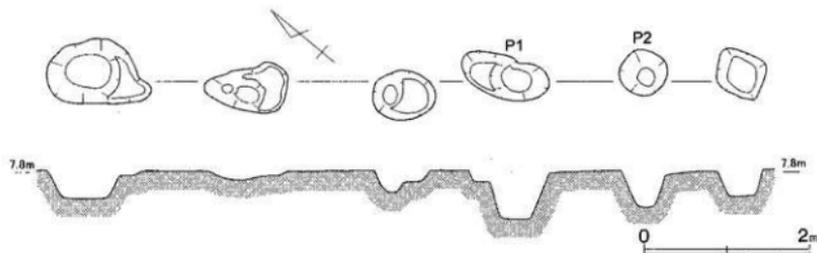
SB06 (A60図)

A・B-10・11Gr内、標高7.9m強で検出した。1間×1間で、桁行3.1m、梁間2.4m、深さ10～40cmで、E-8'-Nのほぼ東西に位置する。A01図よりSD11・12を跨いだような状況である。橋脚施設の可能性も考えられよう。

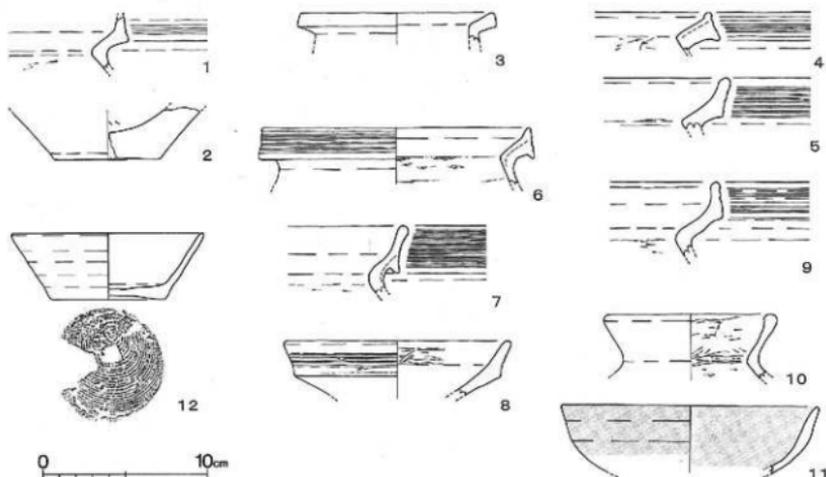
出土遺物は、P1から弥生終末から古墳初頭と思われる甕の小破片1点のみである。遺構の該当する時期も同じである。



A60図 SB06実測図 (S=1/60)



A61図 SA01実測図 (S=1/60)



A62図 SB01(1・2)、SB02(3)、SB03(4・5)、SB04(6~8)、SB05(9)、SA01(10・11)、C14Gr-P1(12)
出土遺物実測図 (S=1/2)

SA01 (A61・A62図)

B-6~8Gr内、標高7.8m強で検出した。6穴の柱穴が列をなす。西側の調査区外で対応する柱穴列の存在する可能性もあるが、近接するSK29・30を囲む塀を想定したい。長さ8m、深さ27~58cmで、N-41°-Wに位置する。

出土遺物は、ほとんどが土師器(弥生終末期土器も若干あり)の小破片が小袋1袋分である。P1からA62-10、P2から11が出土した。10は焼成は弥生土器のようでもある壺の口縁部と思われるが、口縁部内面にケズリ調整を行っている。11は朱塗りの土師器坏で、丸みを帯びた体部をもつ。

以上の出土遺物などより、当遺構は奈良・平安期に該当すると考えられる。

SA02 (A58図)

C-8・9Gr内、標高7.9mで検出した。SB02と柱穴ひとつを共有するが、それを軸に直角に柱穴が並ぶ。長辺5.8m、短辺3.3m、深さ20~46cmで、長辺がN-42°-Wに位置する。SK26・SD16などを囲む塀を想定したい。

出土遺物は、4穴から土師器・須恵器の小破片が数点で、実測可能なものはなかった。

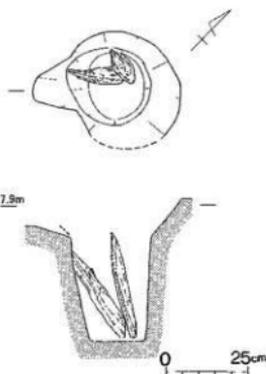
以上より、当遺構は奈良・平安期に該当すると考えられる。

SA03 (A58図)

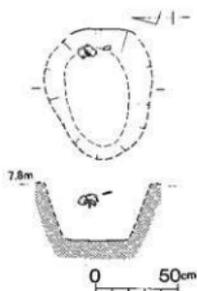
B-8・9Gr内、標高7.9mで検出した。大小ふたつの柱穴が組み合ったような出土状況である。大柱穴径約40cm、小柱穴径約24cm、深さ15~35cmで、大柱穴間2.1m、小柱穴間1.8mで、N-51°-Eに位置する。

出土遺物は皆無であり、時期については不明である。

SA04 (A01図)



A63図 C7Gr-P3木材出土状況図 (S=1/10)



A64図 C14Gr-P1遺物出土状況図 (S=1/10)

A・B-13・14Gr内、標高8.1mで検出した。小柱穴がN-5°-W方向に約5mの列をなす。SB04とほぼ同時期と考えられるが、方向が違い、検討の余地がある。

出土遺物は、南西隅の2穴より弥生土器の小破片数点が出土している。

C7Gr-P3 (A63図)

C7Gr内、標高7.9mで検出した。直径37×32cm、深さ41cmの柱穴の中に板材が2枚残っていた。基部は面取りしてある。

出土遺物は皆無で、時期は不明である。

C14Gr-P1 (A62・A64図)

C14Gr内、標高7.8mで検出した。SD05に壊されてはいるが復元直径80×65cm、深さ35cmの柱穴内に土師器坏 (A62-12) が壁に貼り付くように中位より1点出土した。器壁が直線的に立ち上がるもので、底部は回転糸切りである。

以上の出土遺物などより、当遺構は9～10世紀に該当しよう。

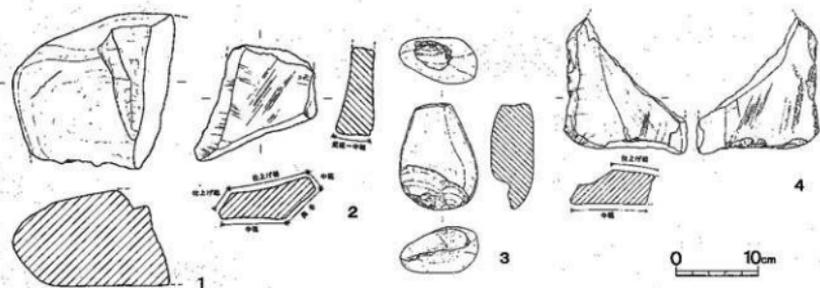
柱穴・遺構外出土遺物 (A66・A67図)

A区内より検出された柱穴で、建築物及び構築物とはならないが、柱穴の時期決定及び今後の検討において必要と考えられる遺物を掲載した。

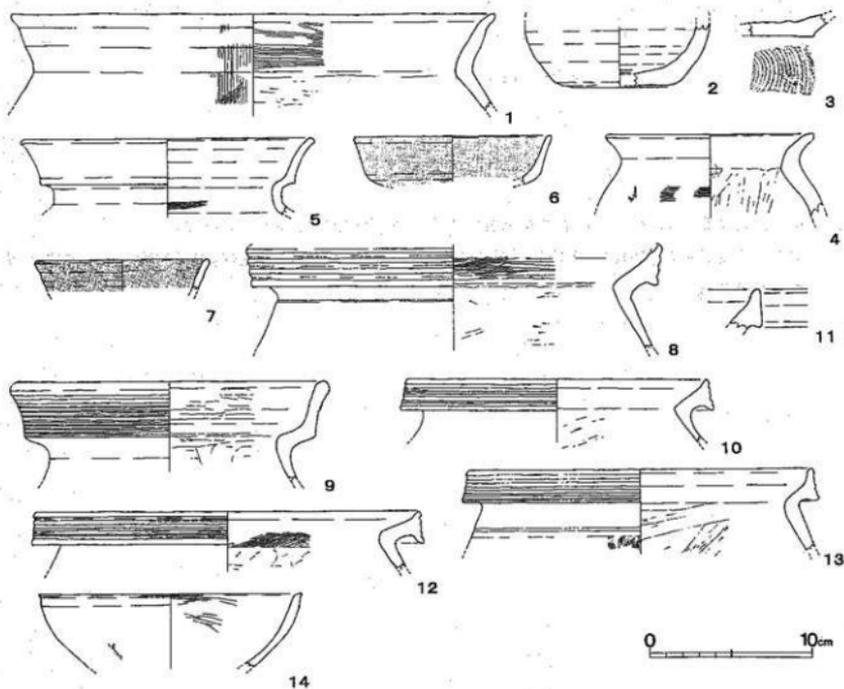
詳細は観察表に委ねる。

遺構外出土遺物も詳細は観察表に委ねる。

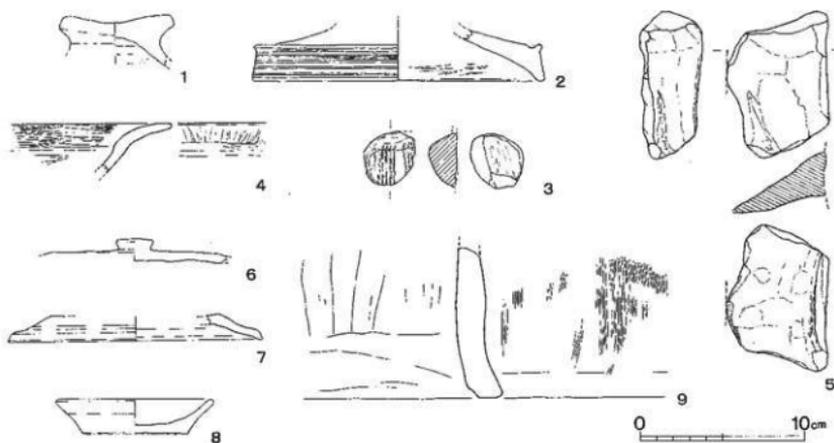
他にも弥生時代～古墳時代初頭、奈良・平安時代の柱穴が多数検出されたが、思うように組み立てることができなかった。A68図に委ねたい。



A65図 SI01(1)・SK29(2)・SD01(3)、大溝(4)出土石器実測図 (S=1/2)



A66図 柱穴出土遺物実測図 (S=1/2)

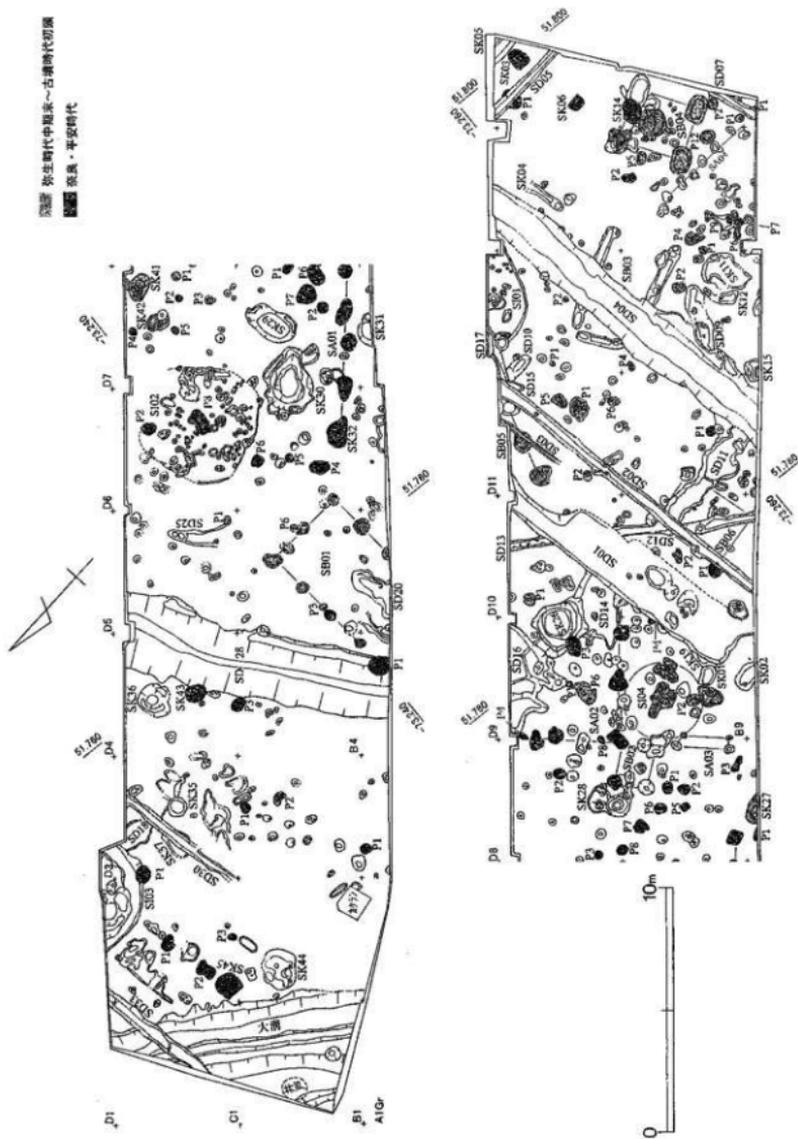


A67図 遺構外出土遺物実測図 (S=1/3)

注1 花粉分析結果は第4章「下志志遺跡発掘調査に伴う花粉分析等調査」を参照されたい。

注2 奈良国立文化財研究所の村上隆氏に分析を依頼した。その結果、金属的な付着物ではなく有機質の鉄の酸化物が付着したものであるという結果を頂いた。

図例 弥生時代中期末～古墳時代初期
 ■ 弥生・平安時代



A68图 A区柱穴時期別平面图

A～D区の報告（土器編年）において使用した参考文献

- * 正岡勝夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』1992 木耳社
- * 赤澤秀則『講武地区区営團場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』1992 鹿島町教育委員会
- * 岩橋孝典「出雲における庄内式併行期の様相」『庄内式土器研究Ⅷ』1994 庄内式土器研究会
- * 松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相—大東式の再検討—」『鳥根考古学会誌第8集』1991 鳥根考古学会
- * 松山智弘「小谷式再検討—出雲平野における新資料から—」『鳥根考古学会誌第17集 特集：山陰における弥生時代研究の諸問題』2000 鳥根考古学会
- * 次山淳「初期布留式土器群の西方展開—中四国地方の事例から—」『古代第103号』1997
- * 平石充「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ 古志本郷遺跡Ⅰ」1999 鳥根県教育委員会
- * 大谷兎二「出雲地域の須恵器の編年と地色色」『鳥根考古学会誌第11集』1994 鳥根考古学会
- * 大谷兎二「須恵器の観察と編年の作成～出雲地方を例として～」柳浦俊一「歴史時代の須恵器」1999 鳥根県埋蔵文化財調査センター専門研修資料
- * 柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古第3号』1979 松江考古学談話会
- * 伊藤博幸「ロクロ成形技法と底部切離し手法の考察—東国の須恵器と土師器—」『古代学研究59』1971 古代学研究会
- * 伊藤博幸「「ヘラ切り」と「ヘラ起し」と「糸切り」と」『古代学研究66』1973 古代学研究会
- * 「出雲平野の中世土器検討会資料」1998
- * 岡野大丞・平石充「古代末～近世の土器」 広江耕史「出雲地域の中世土師器について」1999 鳥根県埋蔵文化財調査センター専門研修資料
- * 八峠興「山陰における中世土器の変遷について—供膳具・煮炊具を中心として—」『中近世土器の基礎研究ⅩⅢ』1998 中世土器研究会
- * 「歴史時代資料紹介特集」『松江考古第8号』1992 松江考古学談話会
- * 橋本久和『中世土器研究序論』1992 真陽社
- * 大橋康二「肥前陶磁」『考古学ライブラリー55』1993 ニュー・サイエンス社
- * 中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』1995 真陽社
- * 横出賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『研究論集4』1978 九州歴史資料館
- * 永田鉄雄『出雲大津窯業誌』1982

B区の調査結果

1. B区の概要

B区は、幅5mの用水路を挟んでA区の南側に位置し、南東へ湾曲した延長距離140m、幅10m強の区間である。A区から連続した5mピッチの杭を打ち、北から南東へ16～40、西から東へA～Kとグリッドを設定した。B16杭の南東区画をB16Grと称する。

33・34Gr付近では周辺住民の方の依頼により遺状に未調査部分を残した。それを挟んで北側と南側では若干様相が違っている。またその付近の29～37Gr内には昭和47年に埋められるまで流れていたという幅2.5～5mの現代用水路跡が西から屈曲して南へ延びている。

北側は現地表面から約40cmの厚さで、現耕作土下より近世の水田耕作跡、その下層から遺物包含層、さらにその下層から層位を別にはできなかったが奈良・平安時代～中世、弥生時代中期～古墳時代初頭の遺構を中心に生活面を検出した。ピットが集中している場所が何か所があるが、建物になるのか柵列等になるのか判断できなかった。

南側は地山面の標高が若干高くなるためなのか、現地表面も約10cm高くなり60cmの厚さで現耕作土・旧耕作土があり、その下層から近世の溝状遺構、さらにその下層から層位を別にはできなかったが奈良・平安時代～中世、弥生時代中期～古墳時代初頭の遺構を中心に生活面を検出した。特に奈良・平安時代～中世の溝状遺構、堀方が2m以上もある井戸跡4基が集中しており、そのため古い遺構をかなり破壊してしまったようである。

B01図の全体平面図は中世以前の遺構である。

2. 遺構と遺物

B区からは上記したように、近世から弥生時代の遺構が重複している。以下、各遺構の詳細と出土遺物について述べる。

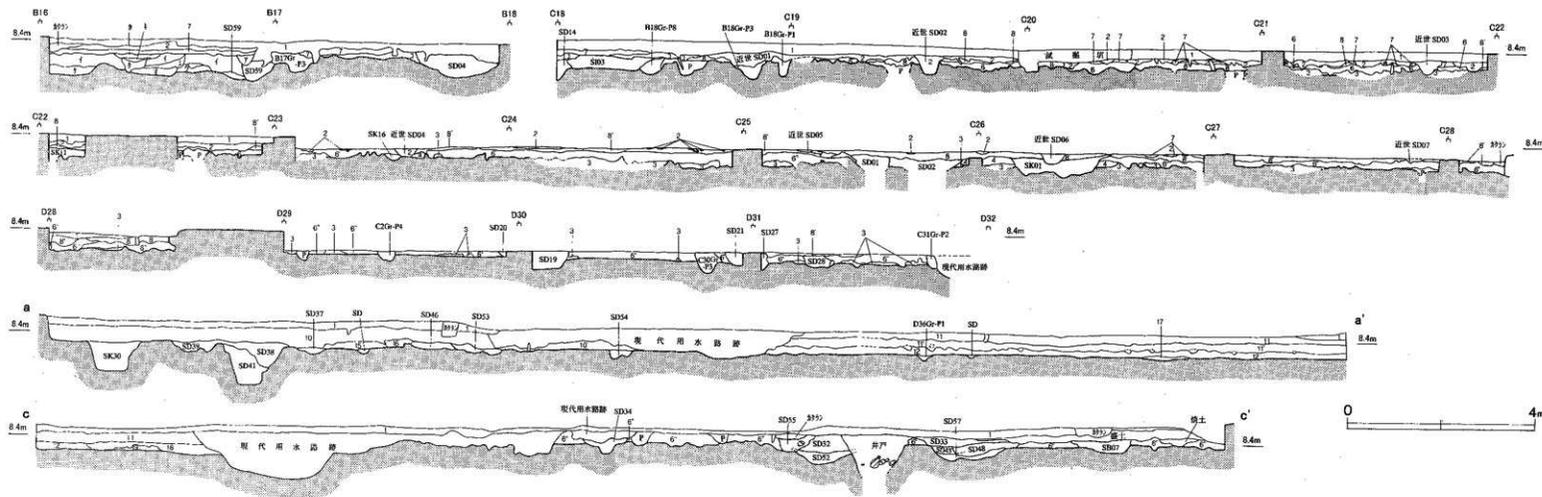
近世遺構 (B01・B02図)

現耕作土である1層を下げると近世包含層である2層が浅く全体に、また深く溝状に堆積している。

その溝状遺構として17～28Gr間、標高8.2m強で近世SD01～08を検出した。近世SD01のみが直角の溝を有するが、それぞれはN-15°-Eとほぼ南北に軸をとり併走する。幅20～50cm、深さ5～24cmを測る。近世SD01と02間の距離は5.5m、近世SD02と03間の距離は7.5m、近世SD03と04間の距離は6.5m、近世SD04と05間の距離は6m、近世SD05と06間の距離は3.5m、近世SD06と07間の距離は5m、近世SD07と08間の距離は4.2mと規格性はないようである。近世SD06の中には、長さ約3m、直径約3cmの細長い木が5・6本束ねた状態で連続して検出された。木製の暗渠ではないかと考えられる。とすると他の近世SD01～08もそれと似た機能を想定することができ、水田の用排水路と考えられる。

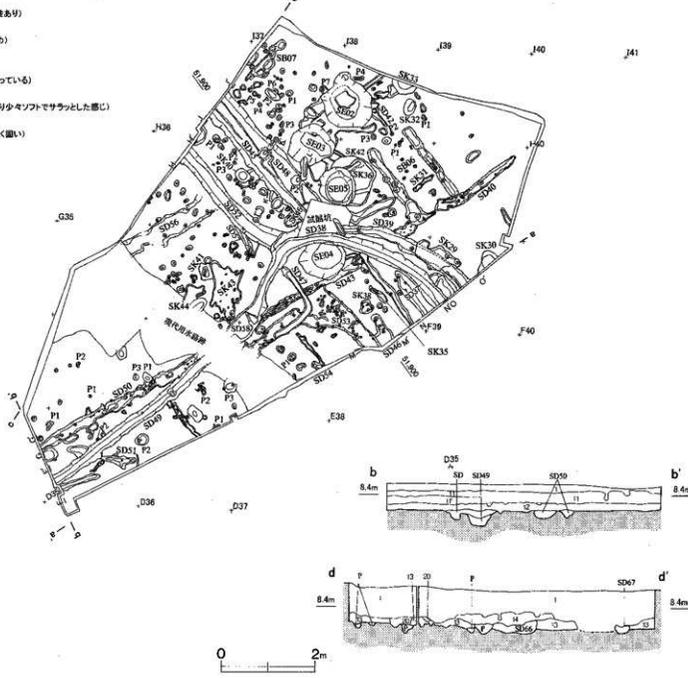
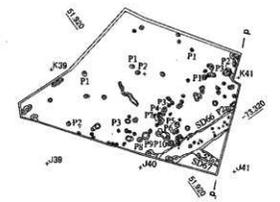
近世SD01に平行して杭列も検出したが、溝と付随するものであろう。また、B21Gr内では二股に割れた牛の足跡が検出された。水田耕作に牛を使用していたものであろう。

南側の区では、標高8.5m強で現代用水路跡東に現代の平行したまっすぐな溝が2条検出され、その下からN-14°-Eのほぼ南北に延びるSD32・33、これらよりもう少し南北軸に近いN-5°-Eに延びるSD34を検出した。また試掘坑隣で検出した井戸跡の詳細はSE05で記述する。



- 1層 耕作土
- 2層 暗褐色土(砂粒子多く、褐色粘子を含む、粘性あり)→近世遺構遺土(A区と同層)
- 3層 暗褐色土(地山の混成層)
- 4層 暗褐色土(遺構内)(A区と同層)
- 5層 暗褐色土(砂粒子多く含む)
- 6層 暗褐色土(8層より地山を含まず黄色味を帯びる、砂粒子含み粘性なし)
- 7層 暗褐色土(6層の暗褐色が強く付いた部分)
- 8層 暗褐色土(6層の暗褐色が弱く付いた部分、若干粘性あり)
- 9層 暗褐色土(砂粒子含み粘性あり)
- 10層 暗褐色土(砂粒子多く含む、若干粘性あり)(A区と同層)
- 11層 暗褐色土(砂粒子多く含む、若干粘性あり)
- 12層 暗褐色土(砂粒子多く含む、若干粘性あり)
- 13層 暗褐色土(砂粒子多く含む、若干粘性あり)
- 14層 暗褐色土(砂粒子多く含む、粘性あり)
- 15層 暗褐色土(地山粘子を含む、粘性あり)
- 16層 暗褐色土(地山ブロック粘子を含む、粘性あり)
- 17層 暗褐色土(地山粘子を含む)
- 18層 暗褐色土(砂粒子多く含む、粘性あり)
- 19層 暗褐色土(砂粒子多く含む、粘性あり)
- 20層 暗褐色土(砂粒子多く含む、粘性あり)

- 1層 暗褐色粘質土(褐色粘子多く、小砂粒を含む)
- 11層 1層より褐色粘子少ない小砂粒を含む
- 12層 暗褐色粘質土(小砂粒を含む)
- 13層 暗褐色土(砂粒子多く含む、粘性あり)
- 14層 暗褐色土(砂粒子多く含む、粘性あり)
- 15層 暗褐色土(砂粒子多く含む、粘性あり)
- 16層 暗褐色土(砂粒子多く含む、粘性あり)
- 17層 暗褐色土(地山粘子を含む)
- 18層 暗褐色土(砂粒子多く含む、粘性あり)
- 19層 暗褐色土(砂粒子多く含む、粘性あり)
- 20層 暗褐色土(砂粒子多く含む、粘性あり)

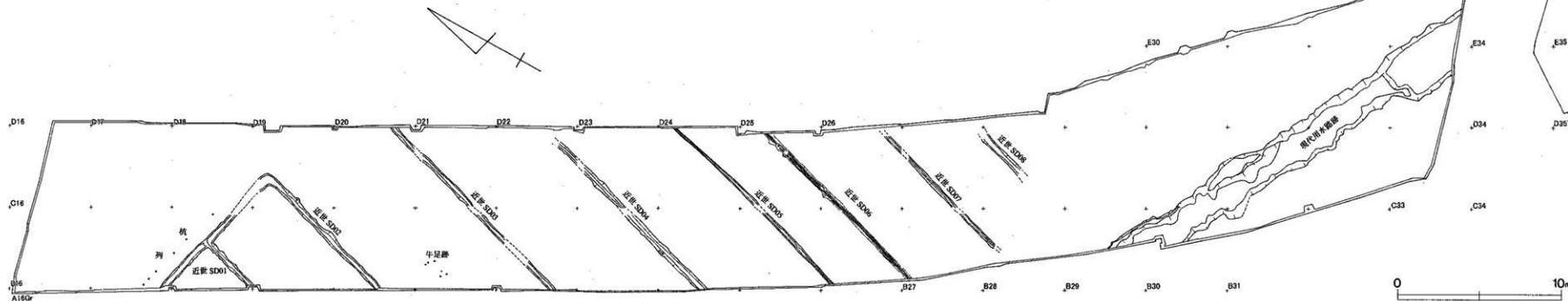
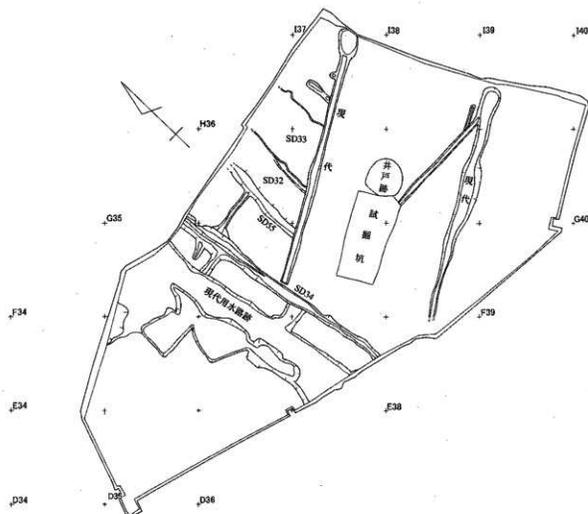


B01図 B区遺構配置図 (S=1/50) 及び土層断面図 (S=1/50)



B21

B21Gr 内 牛足跡拡大図 (S=1/20)



B02図 B区近世遺構配置図 (S=1/200)

出土遺物は、時期決定となるようなものはなく、弥生土器から陶磁器に至るまでの小片のみである。
SI01 (B03・B04図)

C16Gr内、標高7.95mで検出した。中央と南側はSD03・04に壊され、北東は調査区外へと続く。SD03に直角する辺と平行する辺があるがそれぞれは鈍角なので、平面形態は多角形または隅丸方形であったと思われる。両辺から現状の長さは共に2.4m、深さ10～20cmを測り、軸方向は不明である。これに伴う柱穴はP2のみであり、P1とした落ち込みはSI01に切られた古い遺構と考えられる。また、1層の下で部分的に検出される6、7cm厚さの2層は1層と地山が混合したマーブル状を呈する土層であり、貼り床の可能性がある。堀方床面標高は7.75mである。

出土遺物は、弥生土器で、B04-1は貼り床直上、B04-3は若干浮いて出土した。1～3は壺の口縁部である。口縁が上下に1は内傾して肥厚し、2は若干外傾して拡張したもので、それぞれ面をもち、1は3条の凹線文を2は5条の凹線文を施し、また2の頸部には列点文を施す。3は複合口縁のやや長めで端部は肥厚して丸くおさめたもので、突出部は下からの強いナデにより下に出る。口縁面には18条の浅い擬凹線文を、肩部には波長の短い波状文を施す。波状文下の胴部にはハケ目ののち細いミガキが不規則に行われている。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生後期の範疇であろう。

SI03 (B04～06・B68図)

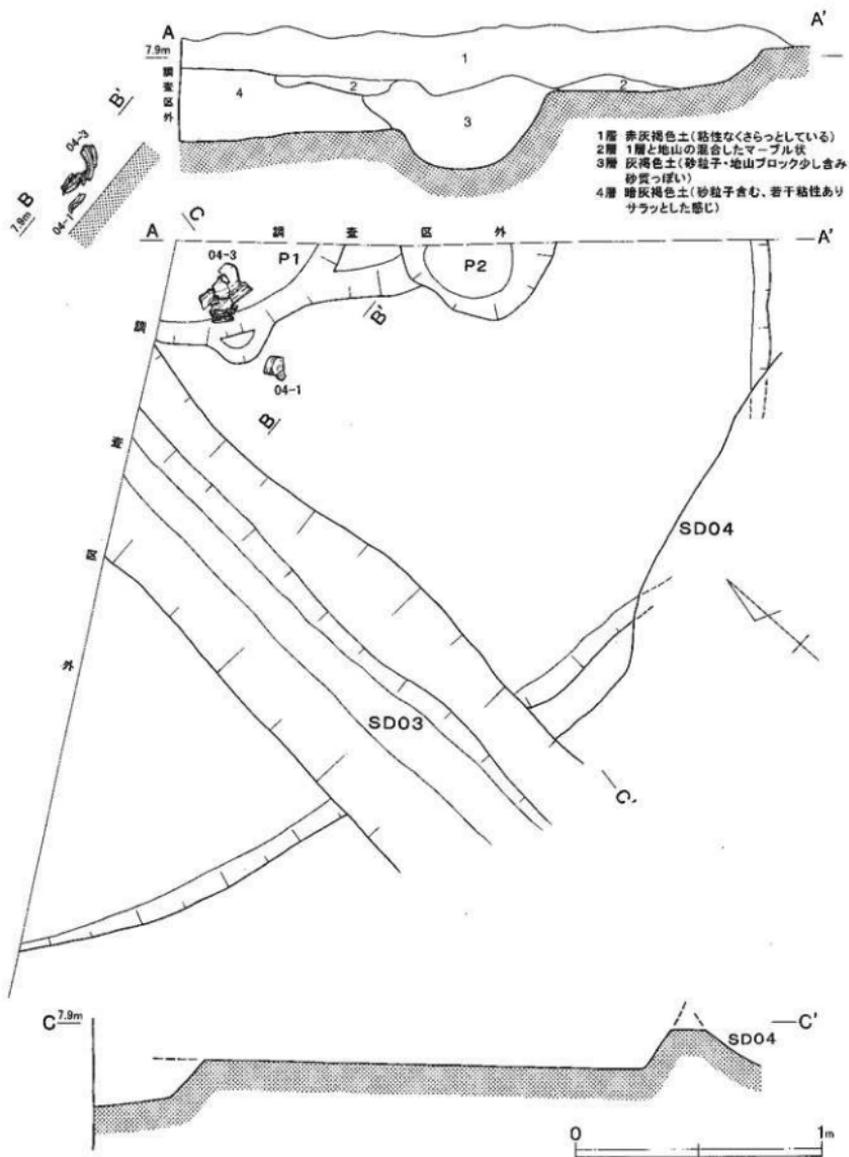
B・C-17・18Gr内、標高8.1m弱で検出した。ほとんどがSD03・04・14・65、SK18～20、SE06、B17Gr-P3・P4、B18Gr-P8・P9、C18Gr-P2などの新旧の遺構に壊されているが、一部に若干の立ち上がりを見せることと、フラットな面に遺物が集中して出土したので窪穴式住居跡と捉えた。

調査行程の都合により、B-17・18Gr内を前半に、C-17・18Gr内を前半には廃土捨て場に使っていたため、他のB区調査が終了してのちの後半に重機掘削をもちいて調査を行ったため、特にこのSI03に関しては不明瞭な調査となってしまった。

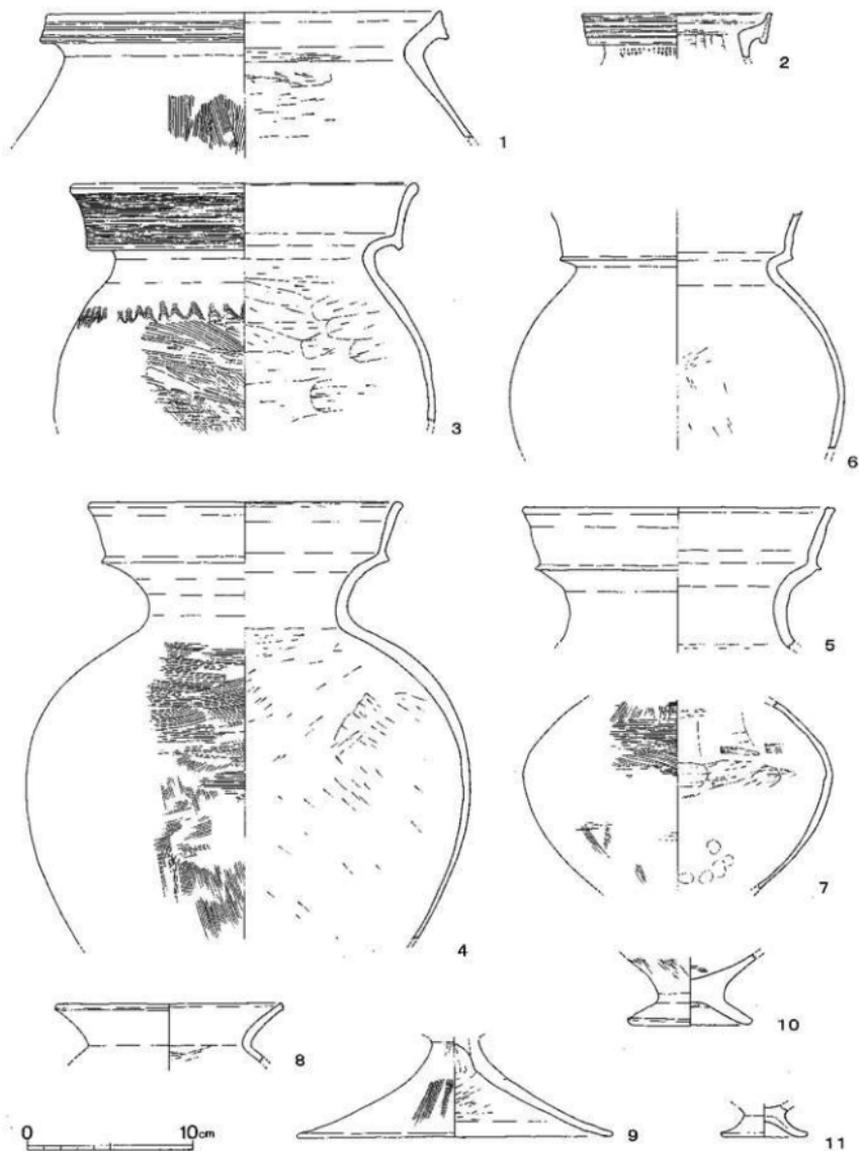
B・C-18Gr内で立ち上がりを確認し、これに伴う柱穴をB17Gr-P2・P5、B18Gr-P11、C18Gr-P1とした。住居の復元は中央ビットから確認できた2辺の立ち上がりまでの距離をそれぞれもう一方の辺までの距離として捉えると、東西5m、南北4.2m、深さ15cmで、W-14°-Nに位置する。中央ビットと捉えたB17Gr-P5は黒土とした土で固く締まっており、火を受けている可能性がある。

出土遺物は、古式土師器の範疇となろう土器及び石製品である。遺物はB17Gr-P5とB18Gr-P11を結んだ周辺に集中し、床面から若干浮いた状態で出土している。

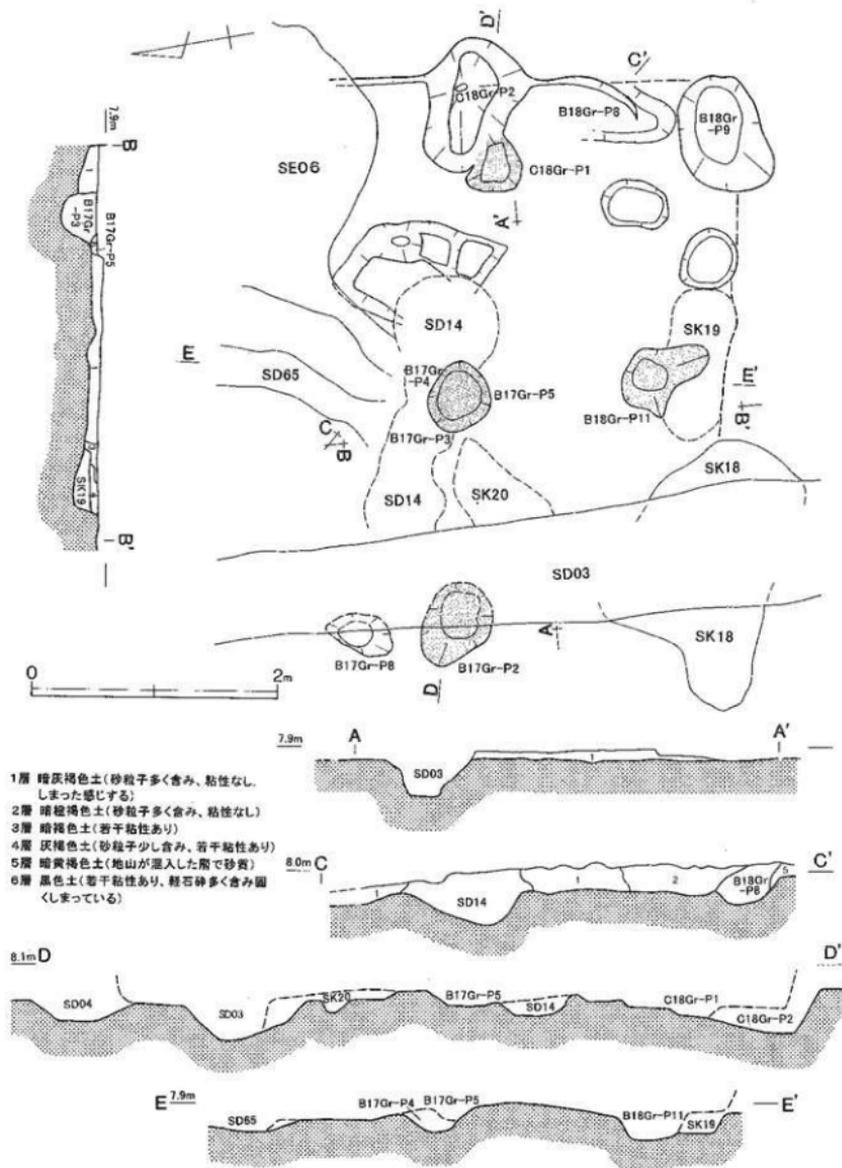
B04-4・5は複合口縁の壺で口縁端部は外に出たしっかりした平坦面をもち、突出部は4は上からの5は上下からの強いナデにより出る。4の体部は球状を呈するが底部付近の形状は不明、また胴部は極薄の器壁である。B04-6～8は壺で、6は複合口縁を8は「く」の字状口縁を有するものである。6は内外面とも剥落が著しいが極薄の胴部をもち体部が球状にやや膨らんでいる。7は胴部のみであるが、極薄の器壁で胴部最大径位は内面からの指押さえにより強く張り出す。8は頸部が「く」の字状に屈曲しスムーズに口縁部に至る。口縁端部は4mm程の担面をもち器壁からのナデにより上下にわずかな突出をみる。胎土の様子は複合口縁のものとは差違は感じない。壺及び甕の肩部はヨコハケ目調整が見えるのみで、文様としての痕跡はほとんどない⁴¹。B04-9は低脚高杯の脚部である。径の小さな接合部



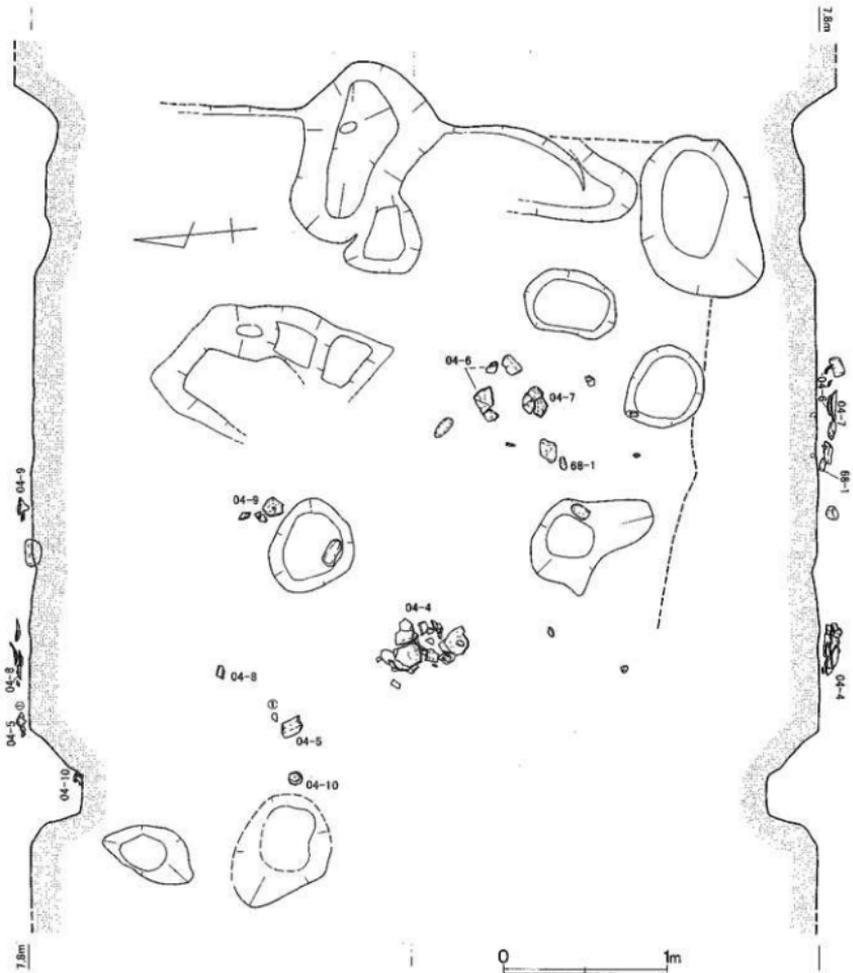
B03図 S101実測図 (S=1/20)



B04図 S101(1~3)・S103(4~11) 出土遺物実測図 (S=1/2)

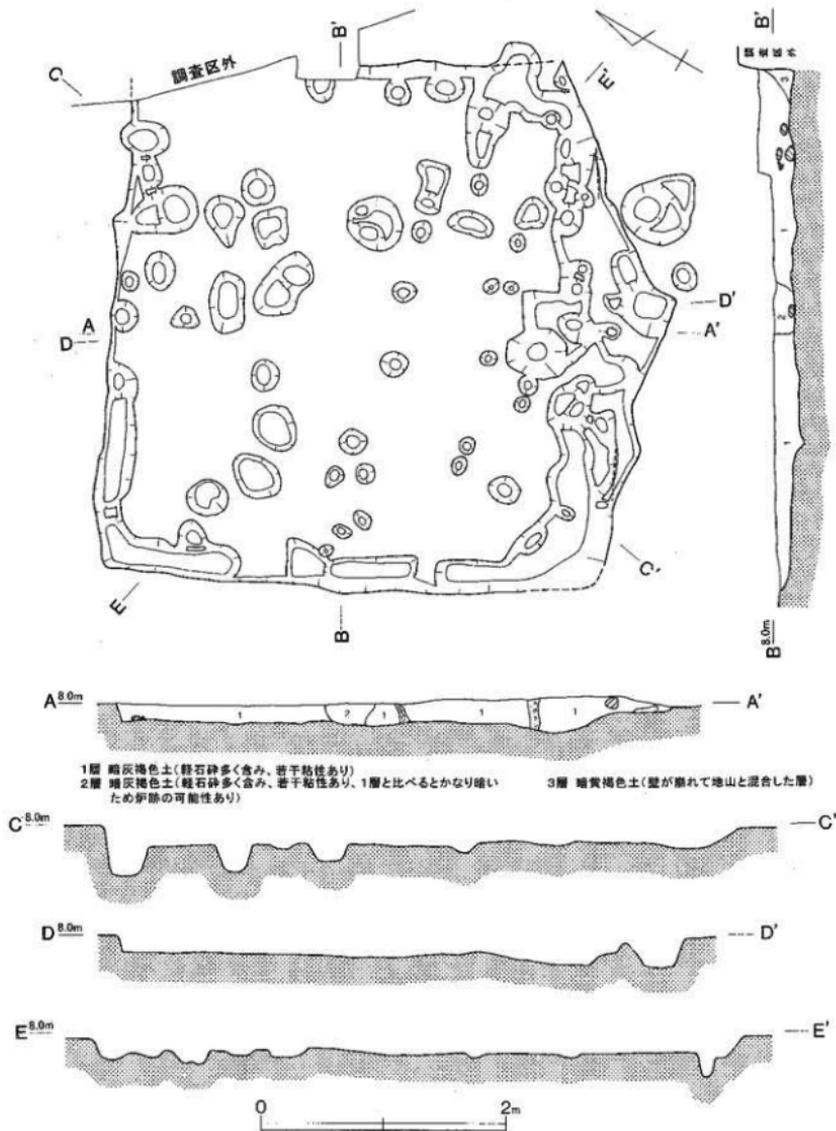


B05図 S103実測図 (S=1/40)

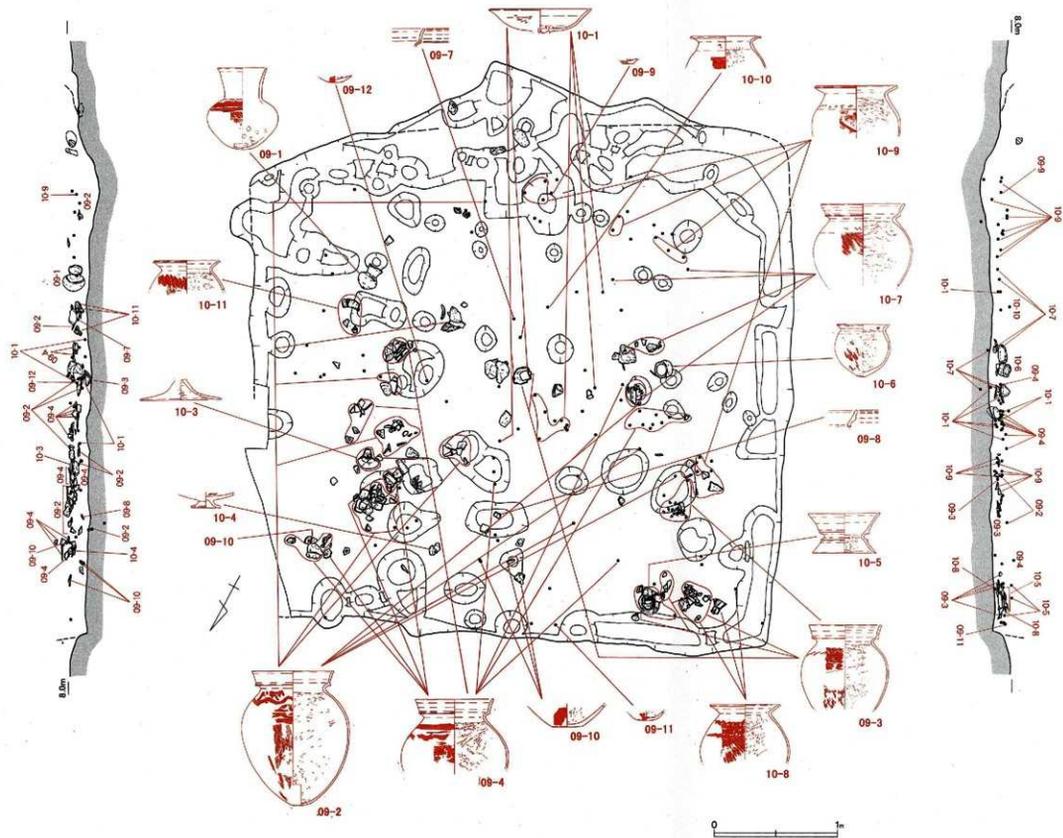


B06図 S103遺物出土状況図 (S=1/50)

で柱部もほとんどなく外反ぎみに裾広がりとなる。充填法を用いているが、充填する粘土の型が円盤ではなく筒状のものを切った型で、刺突痕もあるが全体に押さえ込んでいる。B04-10は脚部で、SD03に落ち込んだ状況で出土した。柱部が短いなりにあり、脚裾部が厚くしっかりと踏み出す。体部は急傾斜な立ち上がりを見せるので鉢である可能性が高い。B04-11は小型の低脚坏で、底径4.4cm程のものである。脚裾部が開き伸びている。B68-1は流紋岩製の磨製石器で、掌で握るのに丁度よいサイズ



B07図 S104実測図 (S=1/40)



B08図 S104遺物出土状況図 (S=%)

である。太めの角棒状を呈し、全面に横位の研磨をし、秀麗な石に作り上げている。

以上の出土遺物などより、当遺構は古墳初頭（草田6期・布留0併行期）に該当しよう。

S104 (B07~B10²²・B68図)

C-22・23Gr内、標高8m強で検出した。東側は若干調査区外へと延び完全にプランを出すことはできず、南側は壁面の崩れによるものか實際彫れたプランを採っていたのかは不明であるが、ほぼ正方形の平面形を呈し、東西長4.3m、南北長4.1m、深さ10数cmを測り、E-29°-Nに位置する。幅20cm強、深さ床面から10cm弱の周溝が北東コーナー付近以外は巡っている。主柱穴は確認できないほど床面がほこぼこと小規模なピットが穿たれている。

墩高は20cmと低く、かなり後世の削平を受けている。暗灰褐色土の堆積のみを確認しており、貼床らしき堆積物は確認できなかった。

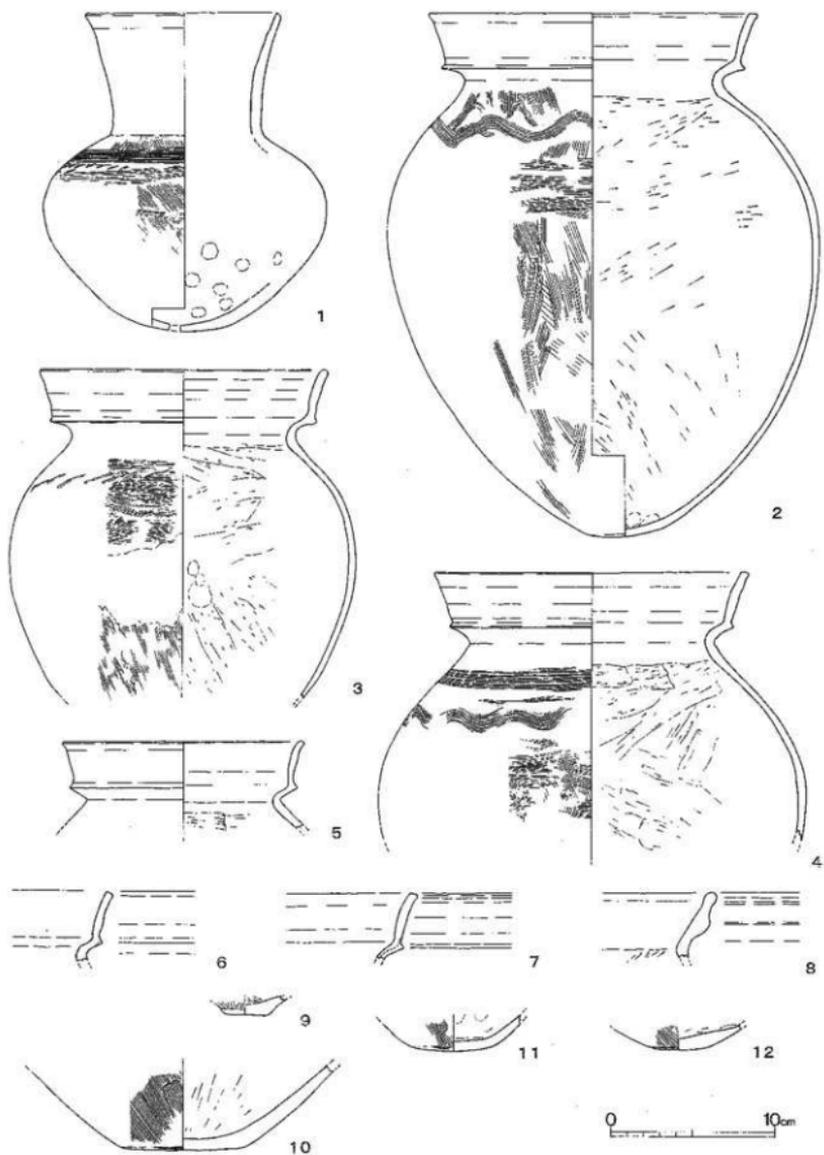
その20cm内に、遺物が完形品2点を含め部分的に固まりをみせながらも同一個体がバラバラの散乱状態で、住居跡内全体から出土している。床面より若干浮いた標高7.9mのラインにはほぼそろっており、遺物が廃棄されたのは短期間と考えられる。

出土遺物は、弥生土器から古式土師器及び石製品である。また当住居跡からは搬入品と考えられる土器が纏まって出土しており、それらは後半に記述する。

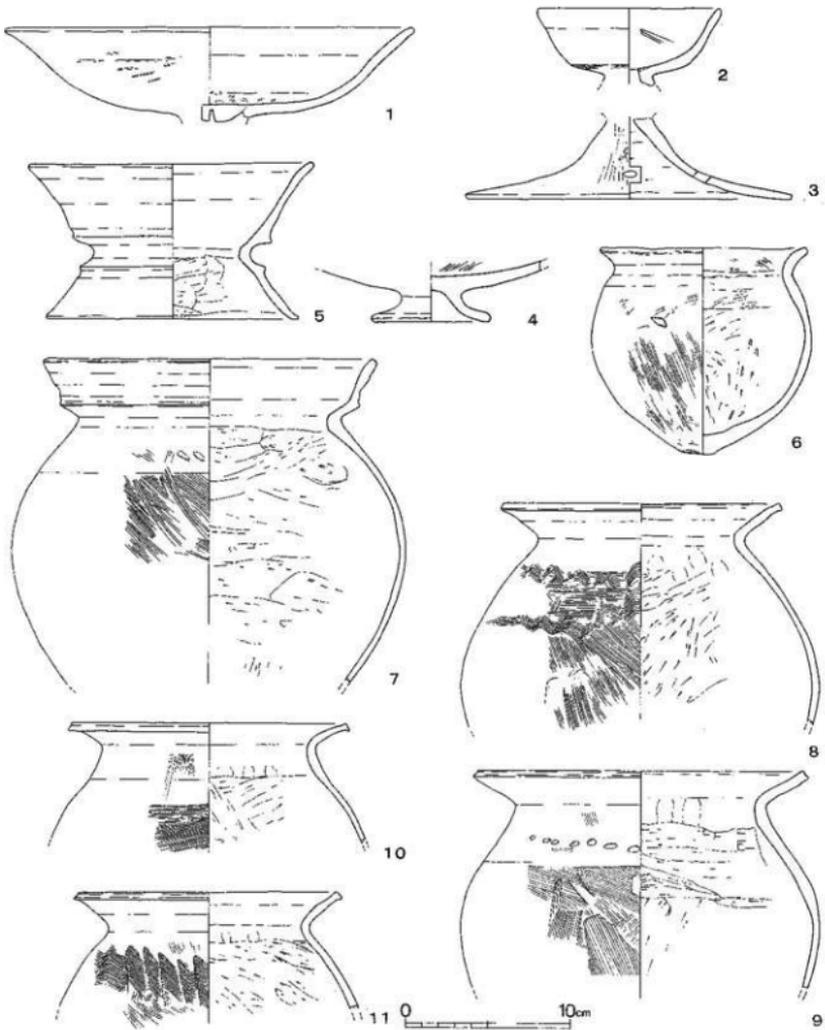
B09-1は口縁部が若干長くはあるが直口壺としておく。完形品である。ほぼ丸底化した底部から肩部の張った胴張り、口縁部は中程より外反する。底部中央には直径7mmの焼成前穿孔がある。肩部には8条の平行沈線文を一周させ、その下には刺突文が1/3周のみ施され全周しない。内面胴部下半には指頭汗痕がほこぼこ付いている。

B09-2~7は複合口縁をもつ甕である。若干肩の位置が下がり胴部に丸みの加わるプロポーションを呈し、底部はわずかな稜線を残す（B09-2）。口縁端部は外に出すようにしっかりした平坦面をもつもの2・5~7とまっすぐな平坦面をもつ4、3のみは丸みを帯びた平坦面である。突出部は上からのナデにより出すが強く出す2・4・6・7、あまり強くない3・5がある。2~4の肩部には若干の文様が施されている。2は周辺の外ハケ目と同一原体にて波状文を施すが一部重なり合ったところは二重に施す。3はハケ目原体と考えられる幅の長い刺突文を施しその直下に直径2mmの焼成後穿孔をひとつ行っている。4は貝殻腹縁と考えられる原体により一筆描きで平行沈線文と波状文を施す。B09-8は複合口縁が退化したような形状をもつ甕の口縁部で、堅緻な胎土である。B09-9~12は底部である。9は稜線があまい小さな平底で外面は底近くから粗いハケ目を行い、逆さにみるとまるで瓶の蓋のような形と大きさをしている。10~12は底径の差はあるが共に稜線のあまいわずかに平底の痕跡を残すものである。11の内面にはおこげが付着している。また直接接合はしなかったが、色調・胎土・調整などの観察により、10は4の、11はB10-8の底部の可能性はある。

B10-1は高坏の坏部である。接合部の根本から欠損しているため充填用の円盤が剥き出しで円盤の様子がよく観察できる。円盤の下中央にはしっかりした刺突痕も残る。平たく立ち上がる坏部は中程からゆるく外反する。外面調整に細かい横位のミガキが行われている。SK10出土B18-4の脚部と接合する可能性あり。B10-2は脚付きの器部分である。接合部が剥ぎ取られそれが丸くなっている。中央部分がないのは円盤充填法による接合方法のため円盤が欠損したと考えられる。丸みのある体部から



B09図 S104出土遺物実測図1 (S=1/3)



B10図 S104出土遺物実測図2〔6~11:搬入土器〕(S=1/2)

口縁部へは若干の外反をみる。B10-3は低脚高坏の脚部である。小さな接合部からラッパ状に脚柱部が開き、裾部は平べったく広がる。1ヶの円形スカシが施されている。2と3は色調が若干異なりはするが、胎上と接合部径がほぼ同じであることより、同一個体の可能性もある。B10-4は低脚坏で、脚

裾部が広がり、坏体部の立ち上がりがゆるく広がるタイプである。B10-5はやや小型で縮約された鼓形器台で、受部・脚部の両端面はシャープなナデにより外反する。突出部は受部・脚部側からのナデによる。

B10-6~11は搬入品と考えられる土器である。6は小型甕で、外反した「く」の字状口縁をもち口径と器高が同じで丸みを帯びたプロポーションを呈するが、底部は尖りぎみで痕跡を残すものである。作りは全体的に粗雑であるのとなりに使い込んだように外面にススが附着している。また外面に初痕が2ヶ所ほど剥がれ落ちた痕跡あり。B10-7は堅緻な胎土の複合口縁を有する甕であるが、端部は若干肥厚したように平坦面をもち、突出部は上からのナデにより出そうとしているがシャープさに欠ける。肩部には斜め施文の浅い雨粒形列点文が現状で2点ほど確認できる。外面ハケ目調整には部分的に先端の丸い幅広のもの¹⁰がある。またこの土器も6と同様かなり使い込んだように外面にススが附着している。8~11は堅緻な胎土の「く」の字状口縁を有する甕で、端部は8・9は3~4mm程の平坦面をもち、10は下に強く、11は若干上下に拡張し4mm程の平坦面をもつ。共に頸部がやや長く肩部がなだらかに膨らんだ胴部へと移行する。内面調整のケズリが在地系土器のそれよりも下がった位置から行われるためであろう。また7同様に外面には部分的に先端の丸い幅広の粗いハケ目がみられる（10は破片のため残存部分では未確認）。肩部における施文は、8が周辺のハケ目と同一原体による波状文を一段目は明瞭に、2段目からは不明瞭に終えている。9は雨粒形列点文が2/3周巡る。11は幅のある波状文であるが糜状文と組み合わせたいようなきついもので一見須器にでも施したものようである。胎土がかなり堅緻なのでそのためかもしれない。10は破片のため残存している部分では無文である。これらの土器も6・7同様にかなり使い込んだように外面にススが附着している。11のみは煮炊き用具として使用されてなかったのかススが附着せず綺麗である。

B68-2・3は石製品である。2は流紋岩製の砥石で全面使用し、荒砥ぎから仕上げ砥ぎまで利用している。3は安山岩製の敷き石で元来は平べったく丸い石で、中央及び縁辺に敷打痕を残す。

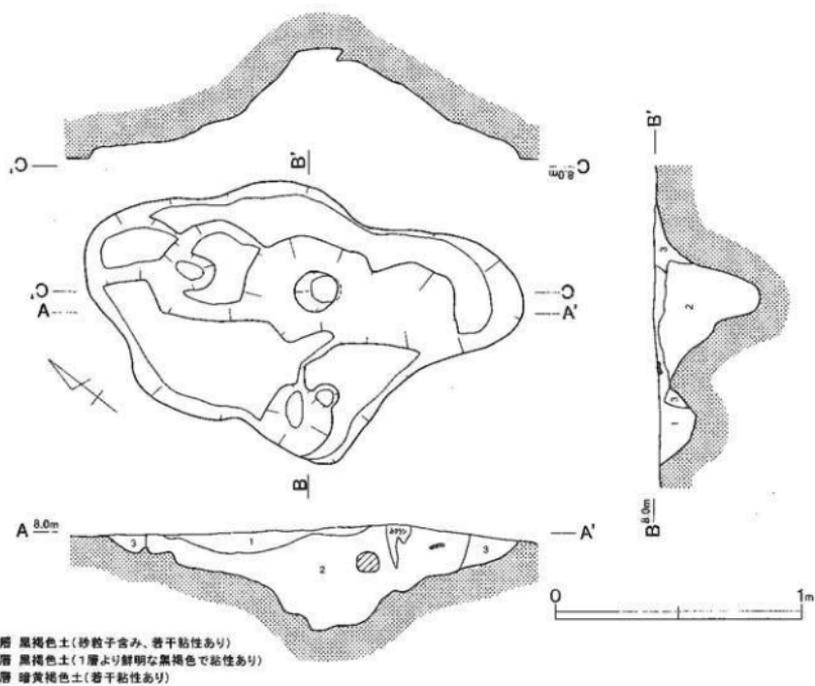
以上の出土遺物などより、当遺構は古墳初頭（草田6期・布留0併行期）に構築され、廃棄されたと考えられる。

SK05 (B11~B13図)

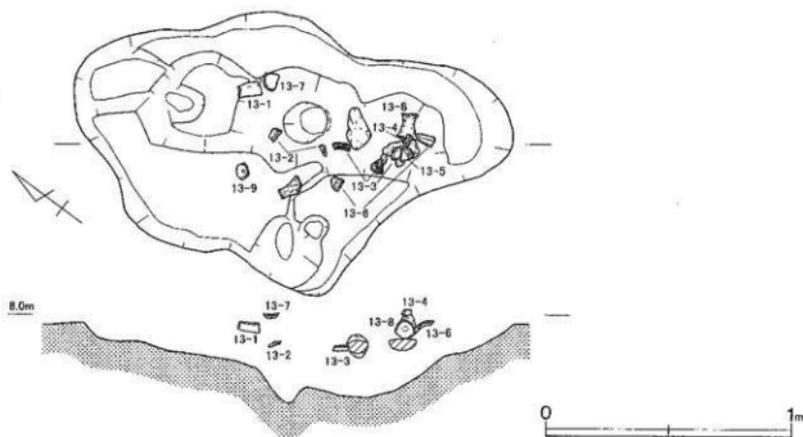
B19Gr内、標高8m強で検出した。長軸1.8m、短軸1.15mの不整楕円形を呈し、最深45cmを測り、N-38°-Wに位置する。短軸断面より中央にある径16cm強の一番深い部分は柱穴状を呈している。長軸断面では両側に緩やかな傾斜をしているが、底部は北側に傾斜し、また若干のステップをもつようである。このことより当遺構は、一応土坑状を呈しているが、単独の柱を北側に倒して抜いたためにできた堀方であると考えられる。

遺物は若干南寄りの1層及び2層上位より出土した。2層は柱が抜かれた後に堆積しており、その時期に破砕行為が行われたと考えられる。

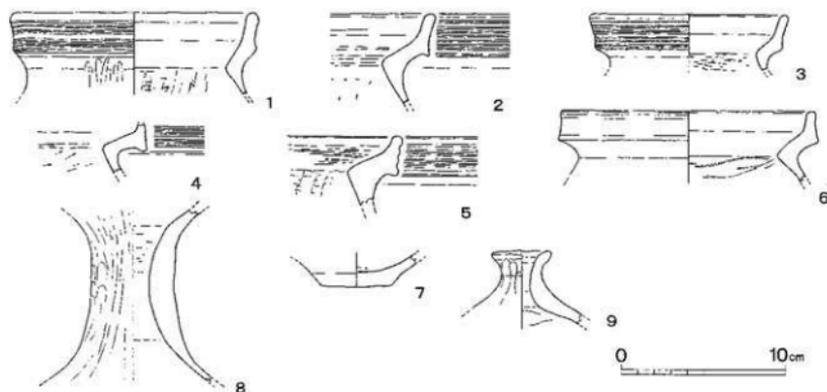
出土遺物は、弥生土器である。B13-1~3は複合口縁をもつ甕で、共に口縁端部はやや膨らませて丸くおさめるが、1・3は突出部が出ずに受け口状を呈する。特に1は頸部からも連続して直線的である。2の突出部は下からの強く突き出すようなナデにより下に出る。口縁面には共に7~8条の擬凹線文を施し、1・3はその後に中央を軽くナデで平坦にしている。3の突出部には1/4周ほど米粒大の刺突が入



B11図 SK05実測図 (S=1/20)



B12図 SK05遺物出土状況図 (S=1/20)



B13図 SK05出土遺物実測図 (S=1/5)

るが、文様なのか傷痕なのかは不明である。B13-4~6は甕で、4は口縁部が上下に拡張して面をもつもの、5・6は短い複合口縁状を呈する口縁部で、4・5の口縁面にはそれぞれ現状で5条、3条の門線文を施し、6は無文である。5はごっつい作りのわりに3条の門線文もしっかりと施文し、口縁部内面にはミガキ調整を行っている。前記した1と6は暗褐色を呈することナデ調整に不慣れな感じで他の土器と比べるとシャープさに欠けており、他集落からの搬入品の可能性あり。B13-7はやや小さな平底の底部である。B13-8は高坏の脚柱部で、柱部は厚手で上下両方に薄くなり広がりみせる。上は内表面に坏部が剥げ落ちた跡の丸みが残り、下は裾広がりとなると考えられる。B13-9は中央に穿孔をもつ蓋である。つまみから笠状を呈すると思われる体部上半で、手捏ねで作られている。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生後期中葉に廃棄されたものと考えられる。

SK10 (B14~18・B68図)

B22Gr内、標高8.1m弱で検出した。長軸1.85m、短軸1.25m、深さ95cmを測り雨粒状の平面形態を呈し、W-15°-Nに位置する。断面は雨粒の細い位置から3つのステップが階段状につくられ、反対側面は直立きみの逆台形を呈している。階段状のステップからステップまでの高さは約20cm、最下段のみ30cmである。南に位置するB22Gr-P4は径45×60cm、深さ35cmを測り、付随するビットであると考えられる。

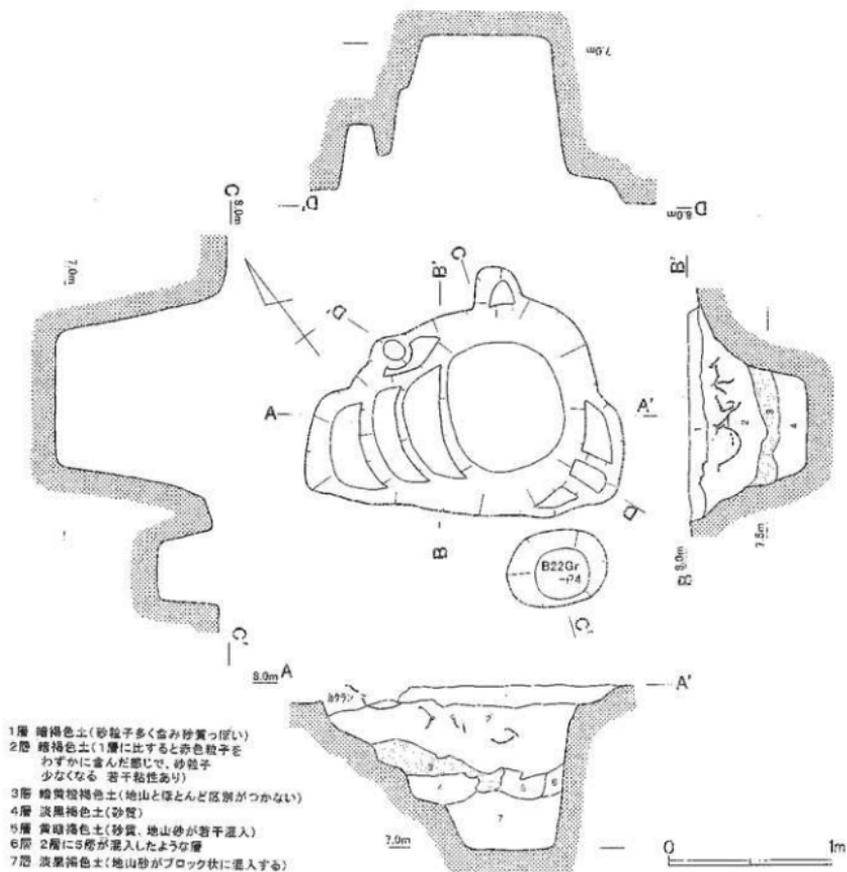
遺構検出中より上面西寄りから中央にかけて遺物が集中して出土始めた。上位1・2層からの出土であり、最終的には後述するほぼ完形の甕13個体と破片の甕2個体、ほぼ完形の鼓形器台3個体と破片の鼓形器台1個体、高坏1個体であった。人為的に置かれたような状況である。そのため断面では中央に向かって傾斜しているが、これは中央が地盤沈下状となり中央にあった土器が下がったものと想定したい。土器を全て取り上げると中央付近から15×10cmの平べったい碟 (B68-4) が一握りの大きさ

の軽石2個とともに標柱石の如く埋置されていた。礫及び2層下には地山とほとんど区別できない3層が人為的に埋められていた。また3層下、4～6層も人為的に埋められたような砂質土である。最下層の7層からは湧水があり、当遺構は階段を有する素掘りの井戸であると考えられ、上記した点より井戸を廃棄する際に、砂質土で人為的に埋め、中央にきれいな地山砂を埋め、地鎮のためであろう礫を供え、土器を供え、井戸祭祀を行ったものと想定される。また階段は水酌みの際に使用したとすればすぐに崩れそうな弱いものであるので何か付設物のあった可能性が考えられる。

出土遺物は、弥生土器から古式土師器及び石製品である。B16-1～B18-1は複合口縁をもつ甕である。但し、B17-2は他の甕よりも若干大きくスの付着もみられないので壺の可能性あり。プロポーシオンは全体的に肩の張らないナデ層で、胴張りのB16-1、底部付近が若干すぼみ倒卵形のB16-3、胴部があまり張らない寸胴のB16-8・B17-3、胴が膨らみ底部にかけてすぼまりをみせない球形に近いB17-5・6と同様と考えられるB17-1・2・4、更にB18-1のように胴が膨らみ球形を呈するものがある。特に内面頸部を指ナデにより伸ばしているのが観察されるB16-1・7はナデ肩がきついようである。口縁端部は、口縁を引き伸ばしておさめるB16-1～3、若干肥厚して丸くおさめるB16-5、水平な平坦面をもつB16-4・7・8、B17-1・2、内傾する平坦面をもつB16-6、外傾する平坦面をもつB17-3～6、B18-1は外に折り曲げて外傾する面をもつ。突出部は上からのナデにより出しているが、B16-5・7、B17-5、B18-1は下からも出すためのナデを施している。特にB16-7、B17-3・5は強く引き出す。底部はB16-3、B17-5・6、B18-2のように稜線がほとんどなく底部としての痕跡を残すもので、丸底に限りなく近づいたものである。外面肩部（胴部最大径位以上）には、全てに何らかの文様と思しき施文が行われている。ヘラ原体によるものとして、B16-1は平行沈線文で2列の区画を作りその中に逆方向の刺突文を連続して行い、B16-3・5・6・8、B17-6は1、2列の「ノ」の字状の刺突文を連続して行っているが、B16-6のみは1周しない。ハケ目原体によるものとして、B16-2・4、B17-1・2は逆「ノ」の字状の刺突文を連続して行い、B16-3・B17-5は波状文を施す。只殻復縁原体と考えられるものとしては、平行沈線文のB16-5・6、B17-4と波状文のB16-6・7、B17-3・4がある。あとB17-6・B18-1は数条のだれたような波状文を施す。また胴部最大径位以上には、胴部最大径位以下に行われる細かいタテハケ目原体よりも単位の大きいヨコハケ目が行われており、それを調整としてのハケ目であるのか多条の平行沈線文としての意識によって行われたものかは判断しがたい。B17-5の胴下半部には焼成後の穿孔がひとつみられる。15個体の甕のうち外面にススが付着しないものは前記したB17-2のみで、全体的に使い込んだようなススの付着したものが多くみられる。底部B18-2の内面にはおこげも付着している。

B18-3は脚付きの鉢であると考えられるが、特に内面体部上半にススまたはおこげが付着しており、2次使用によるつまみ付きの蓋であった可能性もある。鉢部は深く丸い立ち上がりを見せ、ヘルメット状で、口縁部はしっかりと外反する。B18-4は高坏の脚部である。中空の状況で出土しており接合方法は不明である。直線的な脚柱部で下位に向かい徐々に開き、裾広がりとなる。屈曲部に2ヶ1対の円形スカシが穿孔され、正面感をだす。SI04出土B10-1の坏部と接合する可能性あり。

B18-5～9は鼓形器台で、受部径が23cm台のやや大きなもので、8・9を同一個体と考えると4個体分の口径は5mm以内の差でほとんど同じ。器高は受部の高さで比較すると6が最も高く、5・7はほぼ同じ、8が最も低いが差は1.1cmである。脚部底径は若干差をみせ、6は7より約1cm大きく、9は7より約2cm大

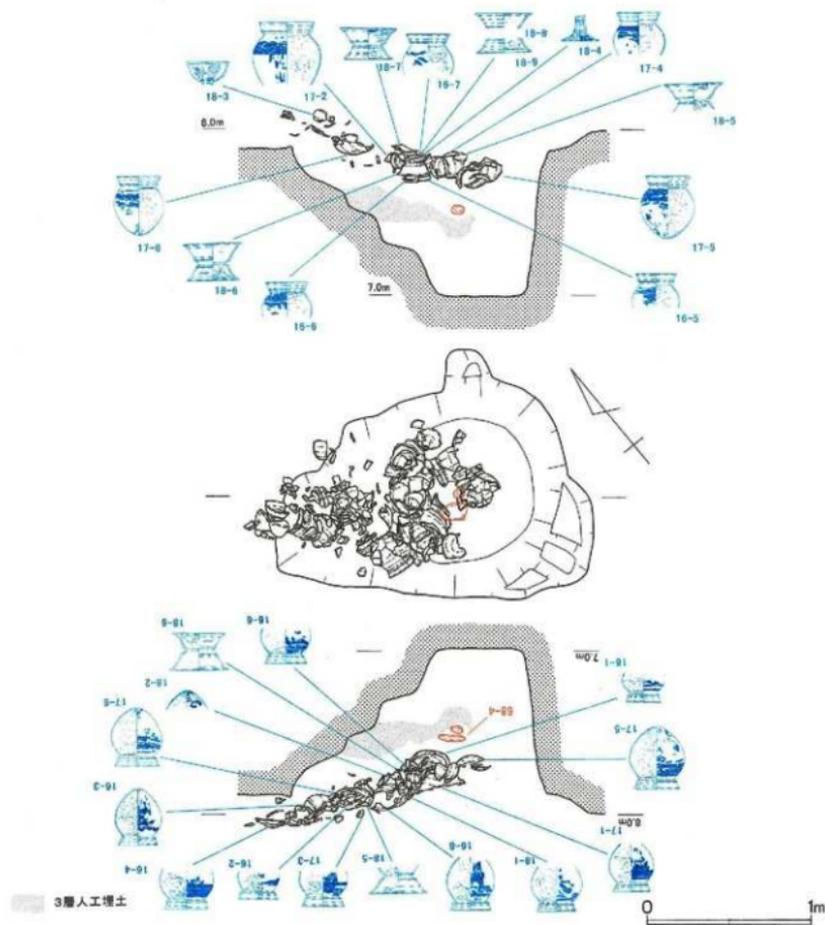


B14図 SK10実測図 (S=1/50)

きい。5は堅緻で、口縁端部は体部からそのまま厚みをもっておえているが、6～9の口縁・脚端部は引き伸ばして面をつくる。6の脚部には5つ並びのヘラ記号が施してある。

B68-4は流紋岩の平べったい石である。表裏面とも若干研磨して更に平たくしており、上下縁辺部及び表面中央に敲打痕が観察される。

以上の出土遺物などより、当遺構は古墳初頭(草田5～6期)に井戸祭祀を行い、魔衆したものと考えられる。

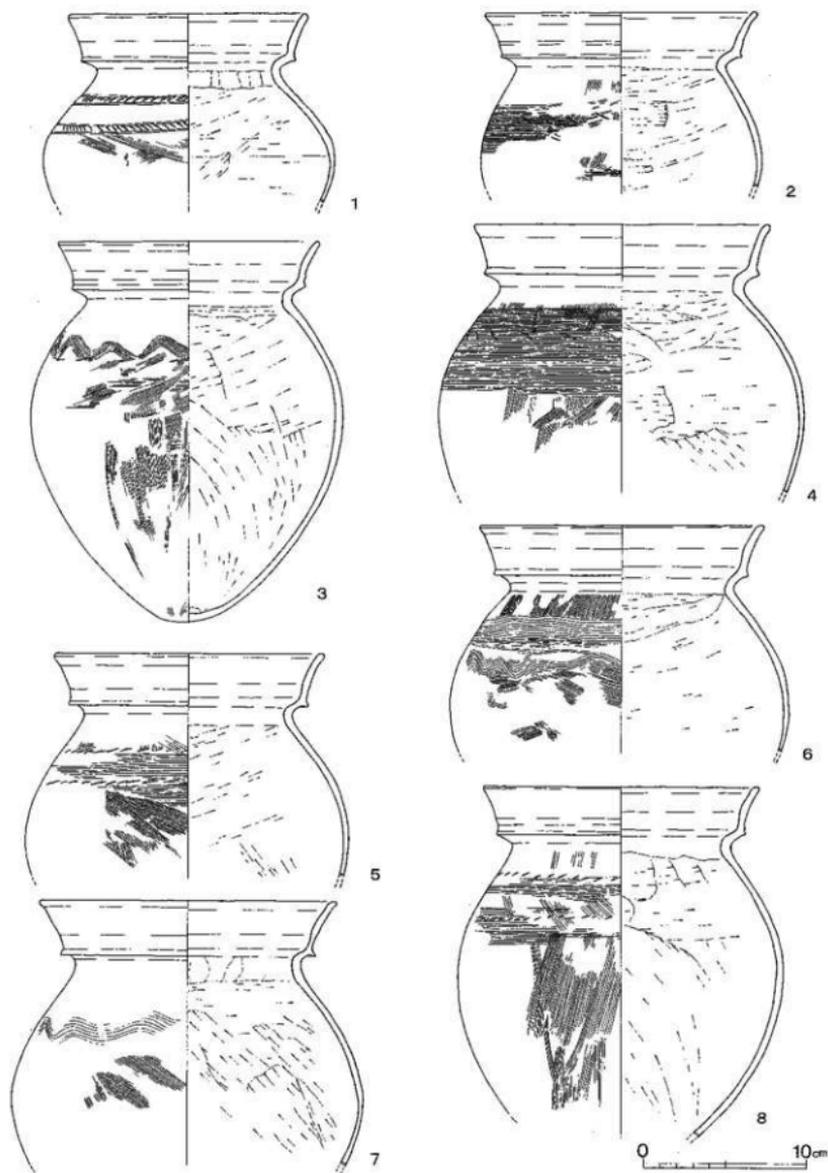


B15図 SK10遺物出土状況図 (S=1/50)

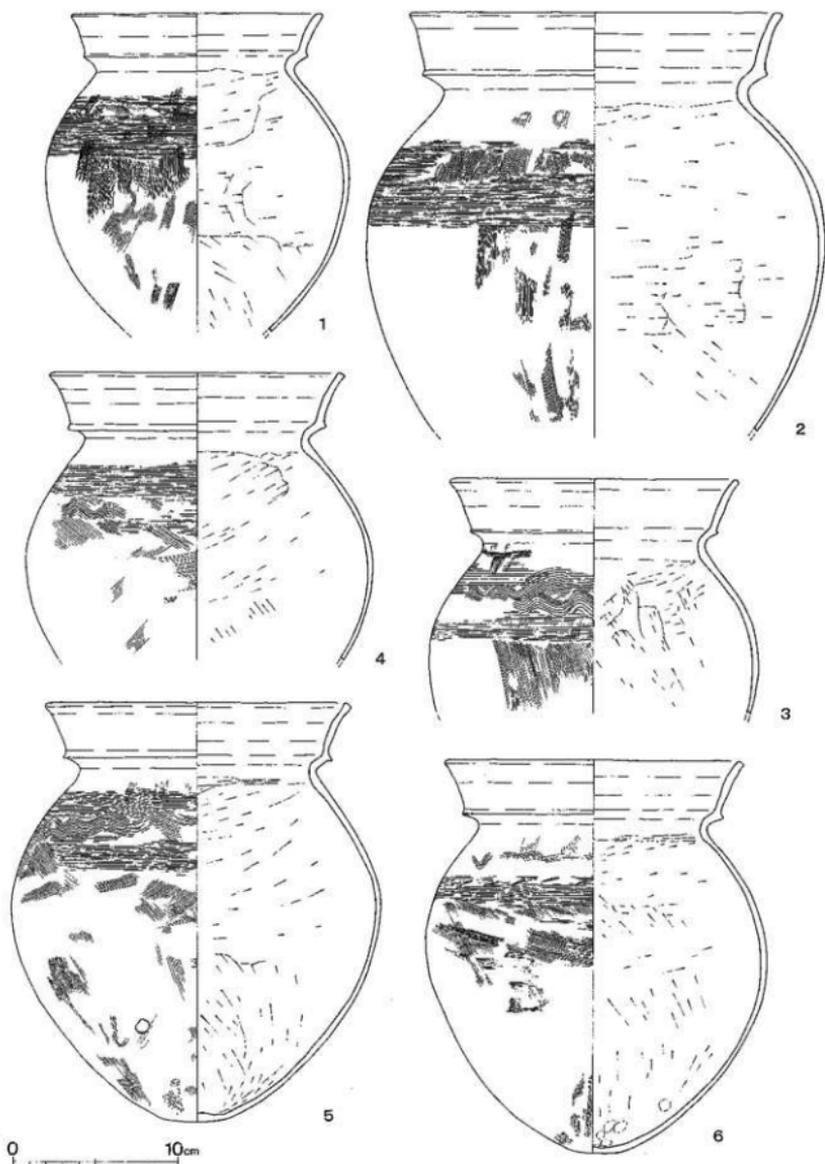
SK11 (B19・B20図)

C-21・22Gr内、標高8mで検出した。北側をSD10に切られているが、東西長2.7m、南北長2.3mの不整形三角形を呈し、深さ約20cmを測り、長軸に対してE-29°-Nに位置する。全体的に中央へ傾斜しており、小ピットが西半分に集中する。ほぼ中央位置の床面からは約10cm浮いて土器が集中して出土している。

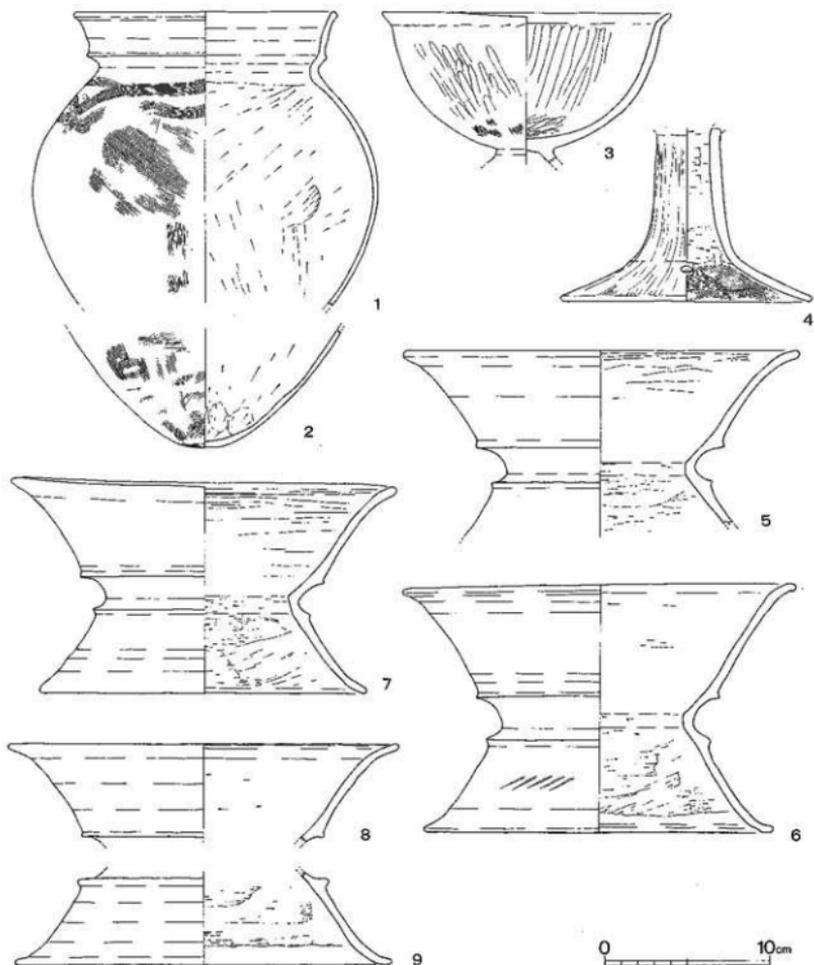
出土遺物は、弥生土器から古式土師器である。B20-1は集中して出土した土器とP2出土の土器が接合したものである。甕の底部から胴部下半にかけてのものである。底部の意識はあるけれど稜線が不



B16図 SK10出土遺物実測図1 (S=1/4)



B17図 SK10出土遺物実測図2 (S=1/2)



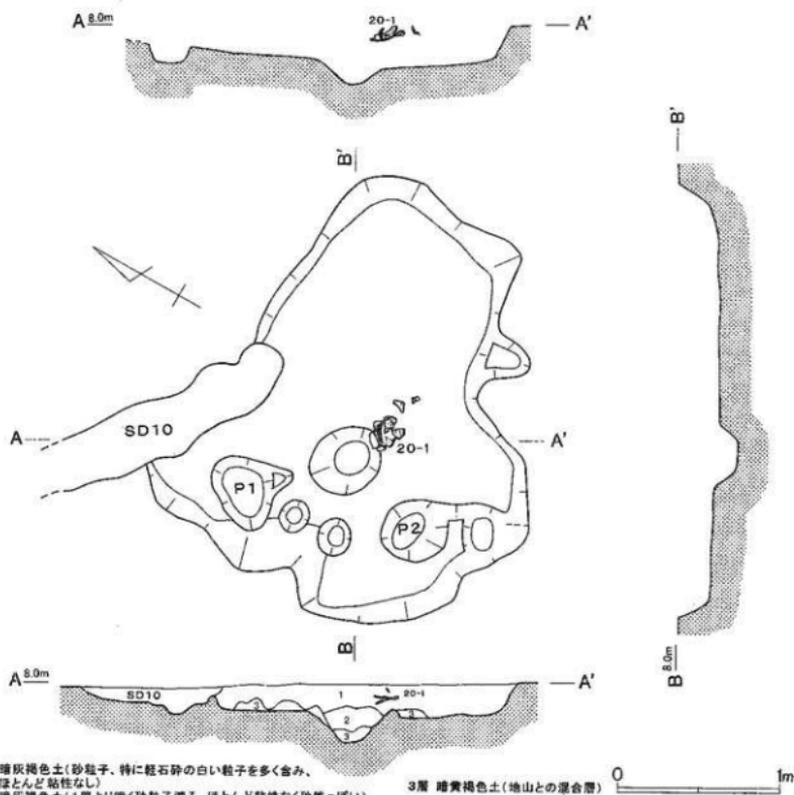
B18図 SK10出土遺物実測図3 (S=1/2)

明瞭で、内面からの指頭圧痕により膨らみをもって立ち上がる。

以上の出土遺物などより、当遺構は古墳初頭（草田6期）に該当しよう。

SK25 (B21~B24図)

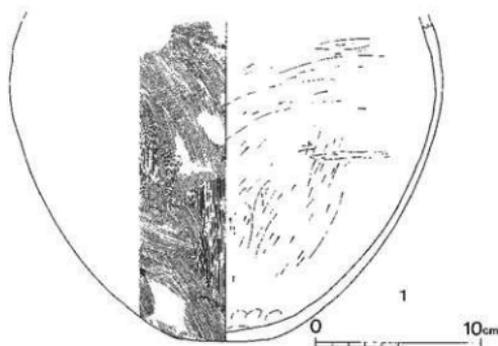
B28Gr内、標高7.9mで検出した。上面付近には柱穴が集中していたため、遺構確認時からプランが不明瞭であるが歪な方形を呈し、南側は調査区外へと延びている。断面は筒状を呈しており、一段目



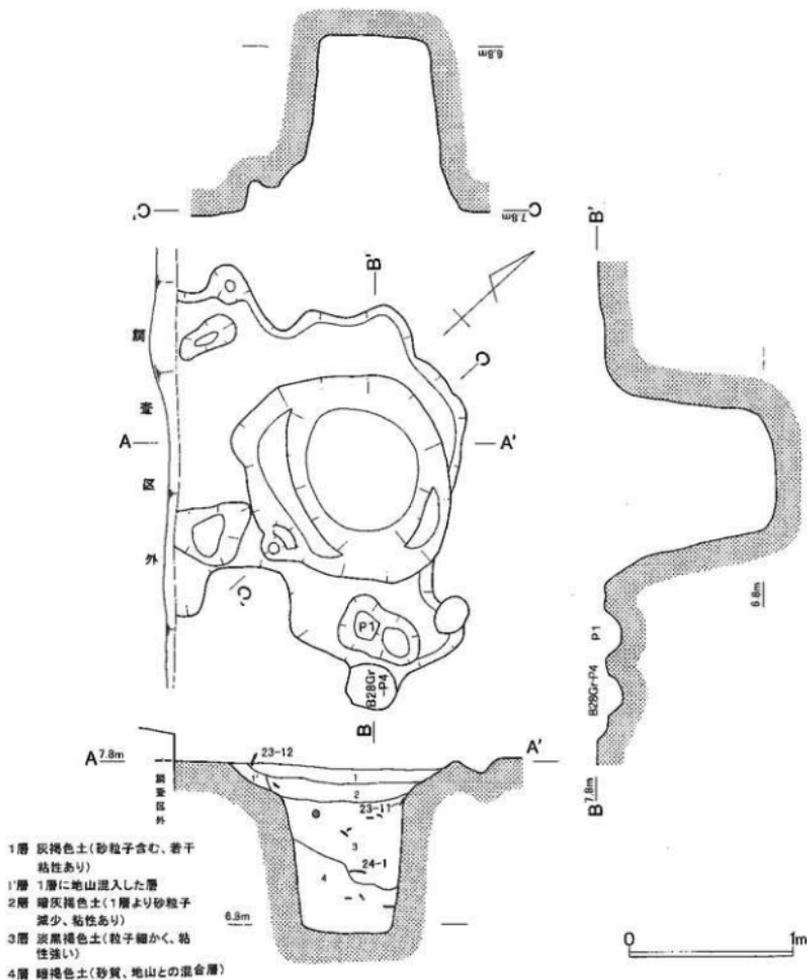
B19図 SK11実測図 (S=1/50)

の掘り込み面は南北現存長1.7m、東西1.45~2.1mで、深さ5~10cmを測り、二段目の掘り込み面は直径1.2m、底面径70~80cm、深さ1mを測る。

1・2層は若干粘性があり、3層は粘性強く、最下層の4層は砂質土となる。また下位からは湧水するため、当遺構は茶掘り

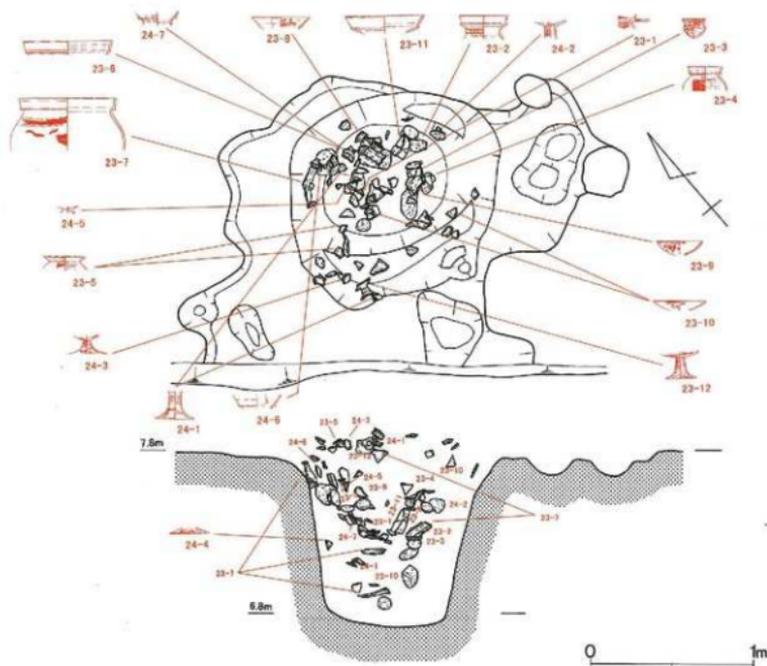


B20図 SK11出土遺物実測図 (S=1/5)



B21図 SK25実測図 (S=1/30)

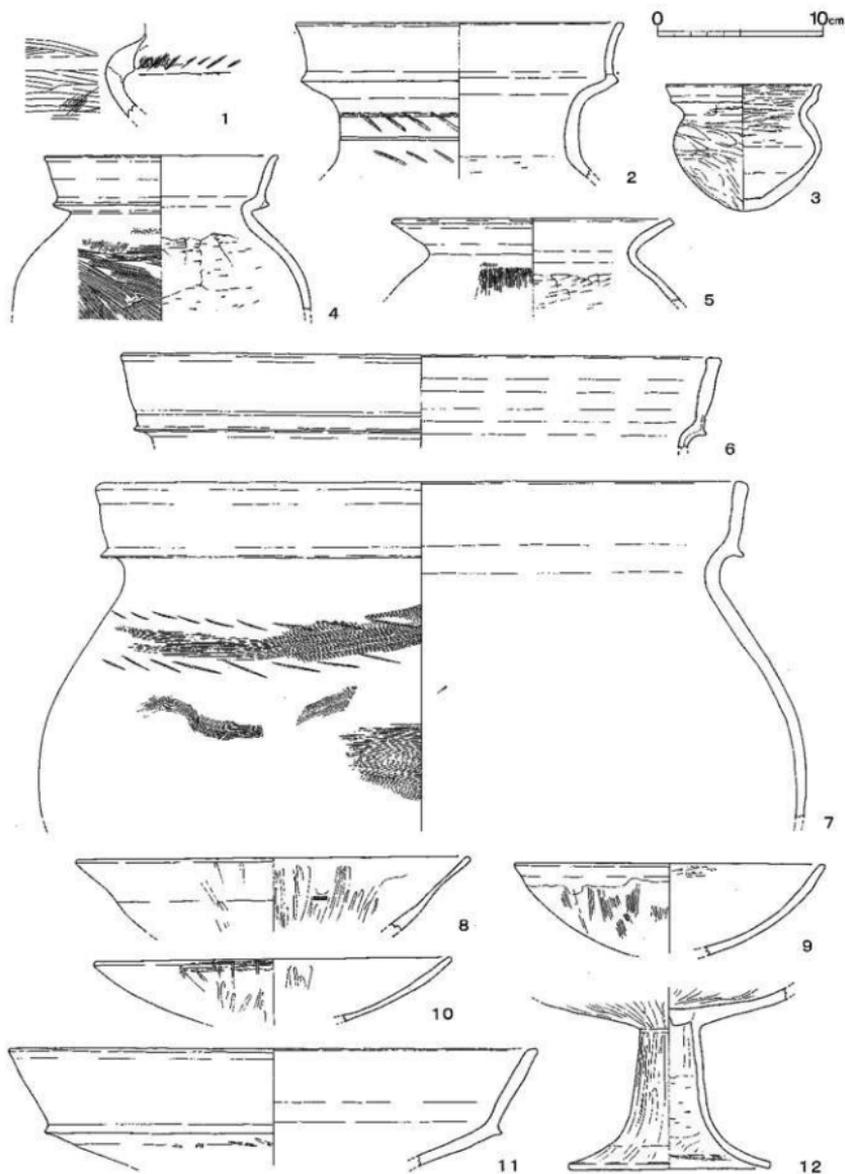
の井戸であると考えられる。遺構検出中の上面から遺物の出土をみる事ができたが、基本的に外壁際より傾斜に沿って転げ落ちたような状況を呈する。自然堆積のような土層を呈しているが、後述する土器の時期幅がないこと、1層と4層出土の土器が接合したことなどより廃棄の時間幅及び土層堆積時間幅は短期間であったと考えられる。また他の遺構と土器構成が違い、普通甕⁴⁴が少なく、高坏の量が多く大甕を出土すること、完形のミニチュア土器が1点出土していることなどより、祭祀的な様



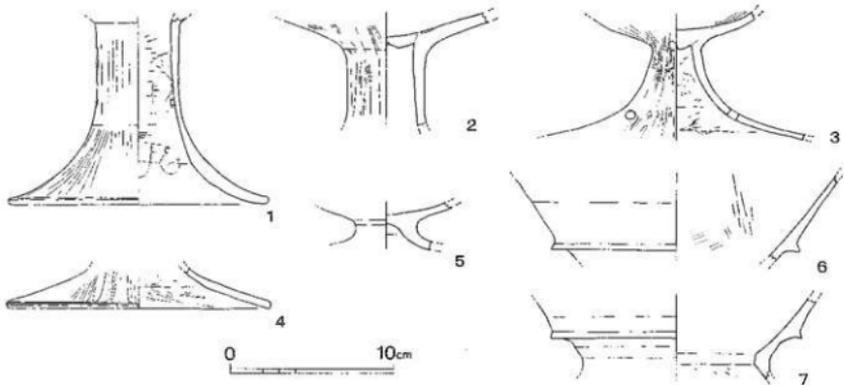
B22図 SK25遺物出土状況図 (S=1/50)

相が窺える。

出土遺物は、弥生土器から古式土師器である。B23-1・2は壺で、1は鋭い小口により大きな刻目を入れた突帯をもつ頸部で外反するものである。内面には粗いハケ目調整を行い、在地では見かけないタイプである。搬入品の可能性あり。2はやや直立する複合口縁を有するもので、擬口縁状の上に貼り付けて複合口縁とし端部は若干肥厚させ平坦面をもつ。頸部には1条の凹線文を施し、その上下に小口による刺突文を施している。B23-3～7は大小さまざまあるが寛である。3はミニチュアで、口径の広い鉢状を呈し全面ミガキで仕上げている。複合口縁の無文のもので頸部をくびれさせ、最大径は胴上半部にもつてきてそのまま裾すばまりに底部へと続く。底部はわずかに平底の痕跡を残す。4は複合口縁を有する普通寛で、端部は外に引き出し平坦面をつくり、突出部は上からのやや強いナデにより上に跳ね上げている。頸部は強くくびれるが肩部はなだらかに下がり、胴部は膨らませ丸くなる。内面頸部はナデにより長くつくり、ケズリ調整が下がった位置からとなる。5は「く」の字状口縁を有する寛で、端部は4mm程の平坦面をもち上下のナデにより若干出るようである。肩部は直線的ではあるが膨らんだように続く。6・7はそれぞれ口径が35.8cm、38.2cmを測る大型のものである。直立ぎみの口縁部で、端部は肥厚して平坦面をもち突出部は上下のナデにより鋭く出る。6の口縁部下半に1



B23图 SK25出土遺物実測図1 (S=1/2)



B24図 SK25出土遺物実測図2 (S=1/6)

条の沈線が施されている。7より、胴部はあまり張らず口径との差が少ないプロポーションを呈するようである。肩部にはハケ目原体による平行沈線文、波長の長い波状文及び小口による2段の刺突文を施す。

B23-8～12・B24-1～4は高坏である。8～11は坏部であるが、皿状の平べったいもの(10)から深い立ち上がりもの(8)までである。8は口縁部付近で内外面に若干の変化をみせ外反する。9は口縁部の外面に指押さえによりくびれをつける。10はそのまま口縁部に至り短型におえる。11は複合口縁状のもので、端部は外に曲げ平坦面をもち、突出部は上下のナデにより強調している。基本的な擬口縁に載せた形状を呈する。12～4は接合部から脚柱部にかけてである。接合部の残存する12・2・3は全て円盤充填法を用いており、中央に円形の刺突痕が残った円盤が装着してある。3は脚柱部が短くラッパ状に開きながら裾部へと続き、裾部も長いようである。脚柱部と裾部の境目には円形スカシが現状で1点残存している。他の脚柱部は直線的に伸びて裾広がりとなるタイプである。高坏は個々に胎土及び焼成などが違っている。

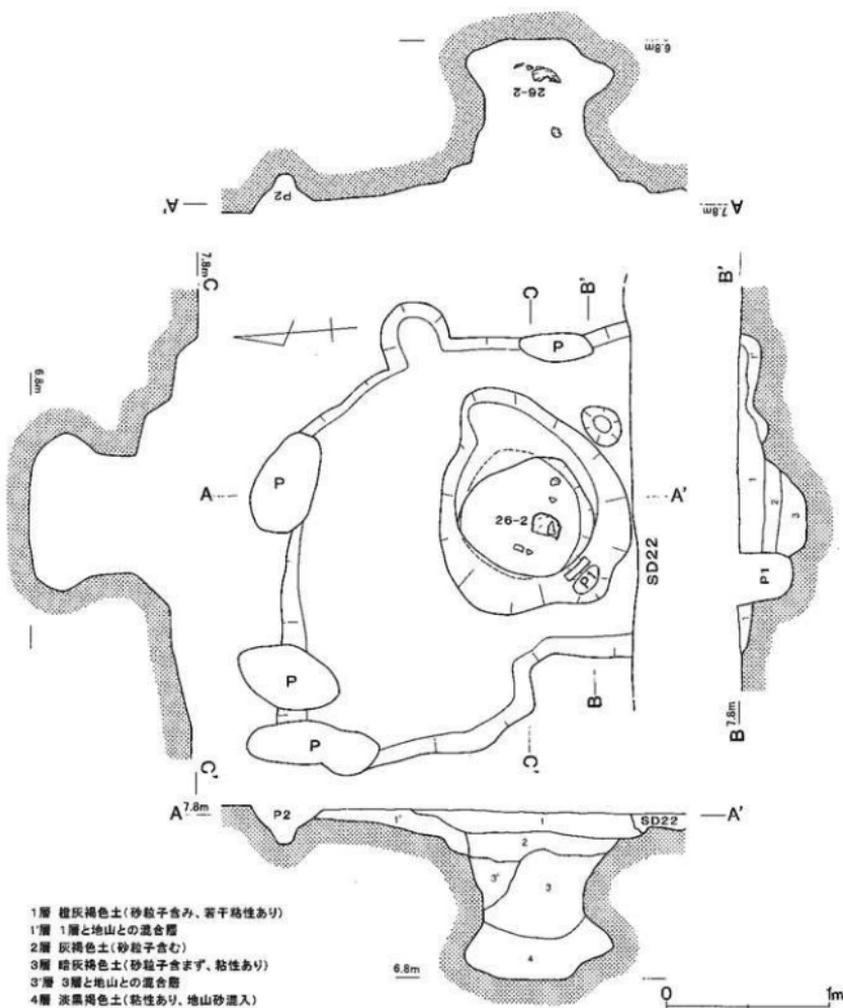
B24-5は低脚坏で、坏部は広がりを見せ、脚端部はやや跳ね上がる様相を呈する。B24-6・7は鼓形器台の受部である。6の内面には使用痕と思しき傷痕あり。

以上の出土遺物などより、当遺構は古墳初頭(草田6期・布留0併行期)に遺物の廃棄行為が行われたと考えられる。

SK28 (B25・B26図)

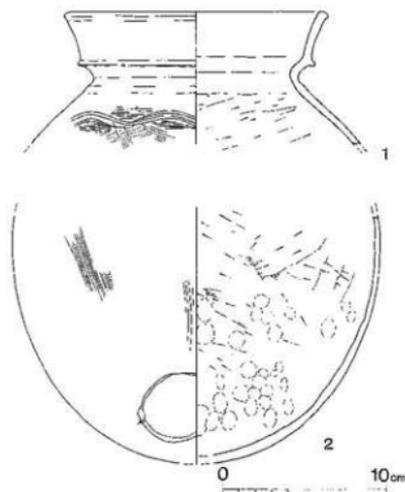
C29Gr内、標高7.8m強で検出した。上面は後世の柱穴が集中していたため、遺構確認時からプランが不明瞭であった。また南側はSD22に破壊されている。最終的に断面は筒形の先端袋状を呈しており、一段目の掘り込み面は南北現存長2.05m、東西長2～2.2mで、深さ4～15cmを測り、二段目の掘り込みは直径1.15m、中途の最狭径70cm、先端袋状径95cm、深さ85cmを測る。

1・2層は若干粘性があり、3層は粘性をもち、最下層の4層は粘質土である。また下位からは湧水す



るため、当遺構は井戸であると考えられる。その最下層からは甕の胴部下半が、1段堀の平坦状から甕の口縁部が出土している。最終的には自然堆積したものである。

出土遺物は、古式土師器である。B26-1・2は前記した甕の口縁部と胴部下半で、1は複合口縁で端部は肥厚して外に引き出すように平坦面をつくり、突出部は上下のナエにより鋭く横に出る。頸部から胴部へは肩が張り、膨らむような形状を呈すると考えられる。肩部には平行した2条の浅い凹線状



B26図 SK28出土遺物実測図 (S=1/2)

が壺の下から出土した。壺は床面から約20cm程浮いており、横向きに埋置してあった。土器棺の可能性を考えたい。

出土遺物は、弥生土器小片1点及び古式土師器である。B29-1は複合口縁を有する壺で、端部は矩形で平坦面をもち、突出部は上下からのナデにより出る。締まった頸部から肩部は張り出し底部にかけては裾すばまりのプローションを呈する。底部は痕跡を残した稜線のあまいものである。口縁部から頸部は若干厚みを帯びるがそれ以下は極薄の器壁である。肩部にはハケ目原体による小さな羽状文を1周させる。胴部下半の1/2にススが付着している。B29-2は高坏で、刺突痕のない円盤を充填して接合し、体部は湾曲して立ち上がる。中途に段を有しその上は欠損し形状は不明である。この高坏の外面上にも一部ススが付着している。

以上の出土遺物などより、当遺構は古墳初頭（草田6期）に埋置されたものである。

SD01・02 (B01・B30・B31図)

B-24・25、C-25・26Gr内、標高8.1m弱で検出した。SD02が構築された後に真上に幅を狭くしてSD01を構築している。SD01は検出長14m、幅90~120cm、深さ40cm、SD02は検出長14m、幅1.7~1.9m、深さ30cmを測り、E-1°-Nのほぼ東西方向に延びる溝状遺構である。断面2段掘りの北側を浅く南側を深くしておりその形態も両遺構に共通している。SD02の西より標高7.73mから土鍾（B31-1）が1点出土した。

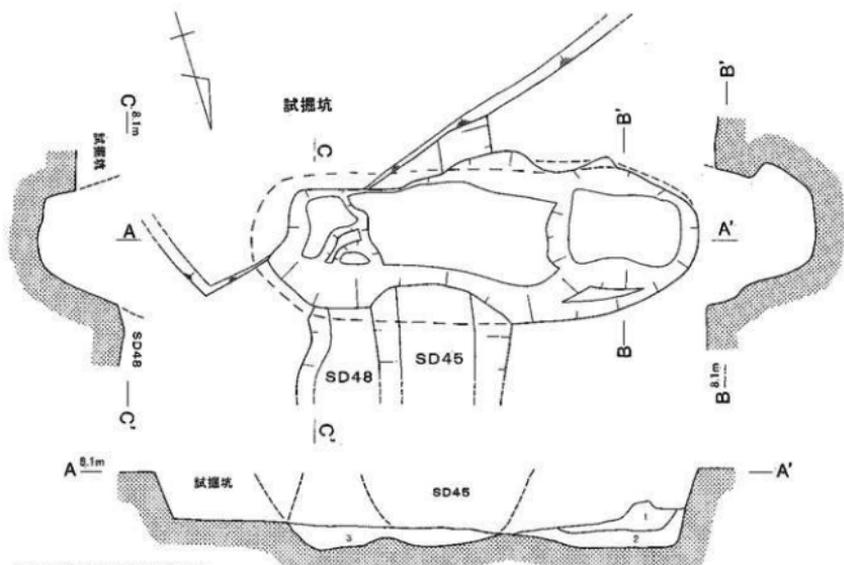
出土遺物は、SD01は弥生土器・土師器・須恵器の小破片が小袋1袋分である。SD02は弥生土器・土師器・須恵器・陶器（小片1点）の小破片が中袋1袋分及び前記した土鍾が1点出土している。土師器

の波状文を施す。2は堅靱な胎土の球状を呈するもので内面には多くの指頭圧痕が観察される。底部は完全な丸底で、位置は内面のおこげの付着具合と、内面ケズリ調整の方向などより決めた。底部付近には焼成後穿孔が大きく開いており、また外面には使い込んだようにススが付着する。

以上の出土遺物より、当遺構は古墳初頭（草田6~7期）に該当すると考えられる。

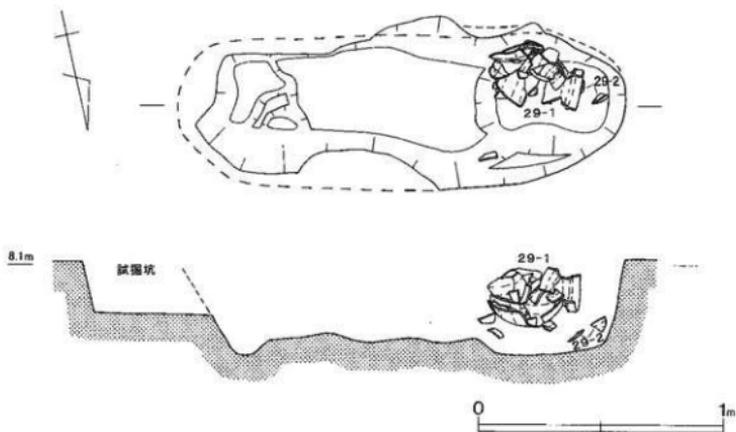
SK45 (B27~B29図)

G37Gr内、標高8.1mで一部を検出した。中央部をSD45・48及び試掘坑によって壊されており全体の様相を掴むことは難しい。カプセル状の平面形を呈し、現存東西長1.75m、南北長62cm、深さ35~44cmを測り、W-7°-Nのほぼ東西方向に位置する。床面は東西両端が一段下がっている。その西側の南寄りにはほぼ完形の壺（B29-1）が潰れた状態で1個体と高坏（B29-2）の坏部の一部

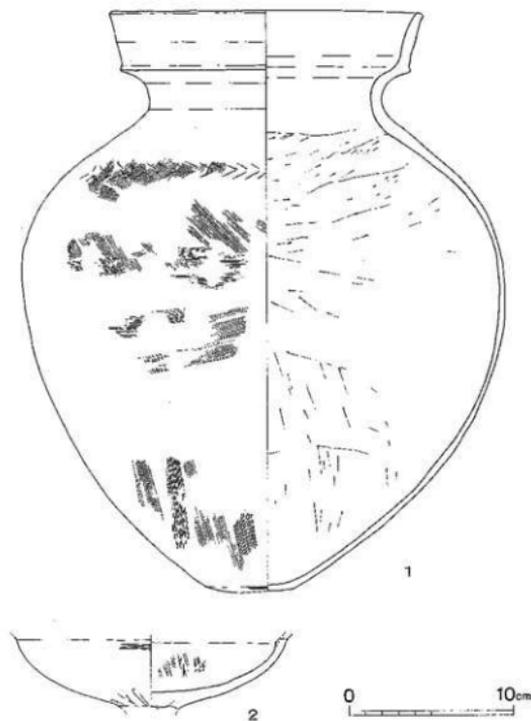


- 1層 暗灰褐色土(かなり粘性あり)
 2層 暗灰褐色粘質土(1層より明るい、地山粒子含む)
 3層 褐灰色砂質土(地山ブロック含む、粘性あり)

B27図 SK45実測図 (S=1/20)



B28図 SK45遺物出土状況図 (S=1/20)



B29図 SK45出土遺物実測図 (S=1/3)

04から派生した北溝の検出長4.4m、幅60~90cm、深さ20~30cm、南溝の検出長6m、幅1.2~1.4m、深さ30cm、SD59の検出長5.2m、幅70cm、深さ40~60cmを測る。

各溝の下層は粘質土と砂が混合しソフトな土で、特にSD03の南側には木片が出土しており、流水した状況を呈している。ただしSD04から派生する南北溝は底面標高が高いため砂質っぽい土が堆積している。

SD03の北側よりガラスの小玉が1点出土しているが、これはSI01を破壊したときに混入したものであるのではないかと考えられる。SD59の南端底面からは青磁碗が1点 (B31-8) 出土した。

出土遺物は、SD03が弥生土器・土師器・須恵器の破片が小袋に1袋分ずつ及び、SD03はガラス小玉1点、SD04は磁器、SD59は磁器・円筒埴輪の破片である。B31-2はSD03出土ガラス小玉である。直径4mm程のスカイブルーを呈するものである。土師器・磁器以外は混入品である。

B31-3・4はSD04出土須恵器坏、伊万里焼の碗である。3は底部糸切りで体部へゆるやかに立ち上がる。4は施釉は高台以外に施され、畳付け部分はしっかり着地し、直立ぎみに立ち上がり体部はあま

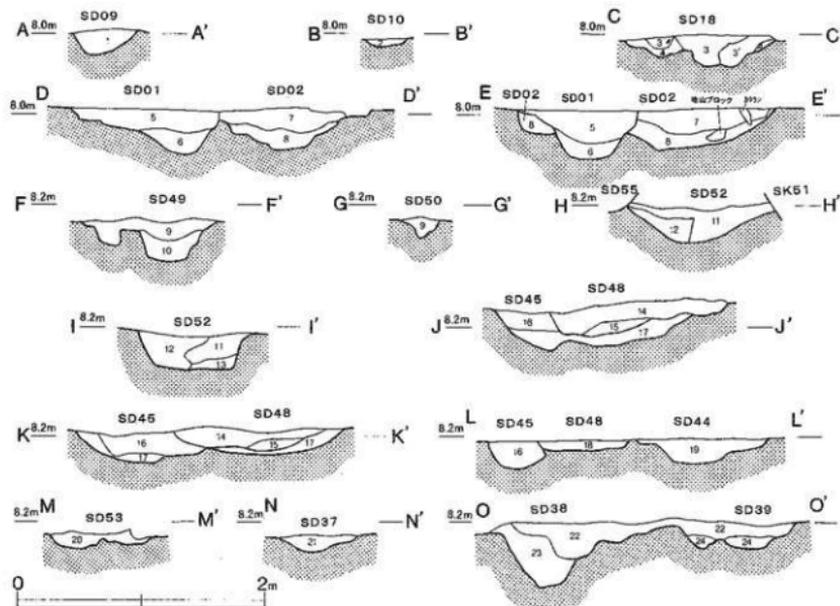
には朱塗りの坏片が含まれる。B31-1は土鍾である。管状で、中央部が膨らみをもち紡錘形を呈する。

以上より、当遺構は大雑把に中世頃のものとしか判断できない。

SD03・04・59 (B31~B32図)

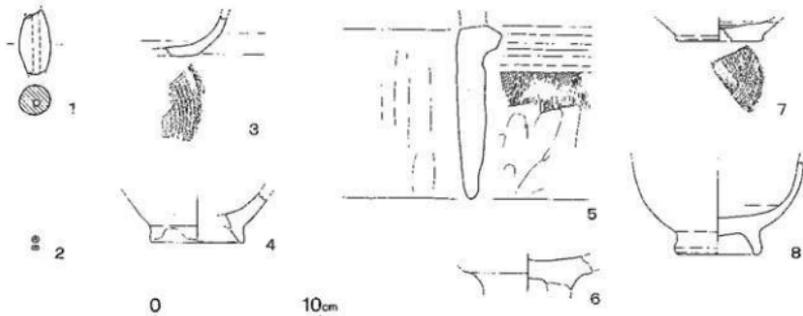
B-16~17、C-16・17Gr内、標高8.1~8mで検出した。3本の溝状遺構はSD03がN-3°-E、SD04がN-7°-Eから調査区北端でN-14°-Wに湾曲するが、SD59がN-1°-Wに位置しほぼ南北方向に併走して延び、SD04のみがC-16・17Gr内で2本の溝が直角に平行して派生しほぼ東へ延びていく。この溝上にSD03が後から構築されている。各溝の両端は調査区外へ延びていく。

SD03の検出長13.6m、幅70~100cm、深さ50cmで北側に若干深くなるようである。SD04の検出長10.4m、幅50~130cm、深さ20~40cmで北側が急に浅くなり幅も狭くなるため立ち上がるのかもしれない。SD

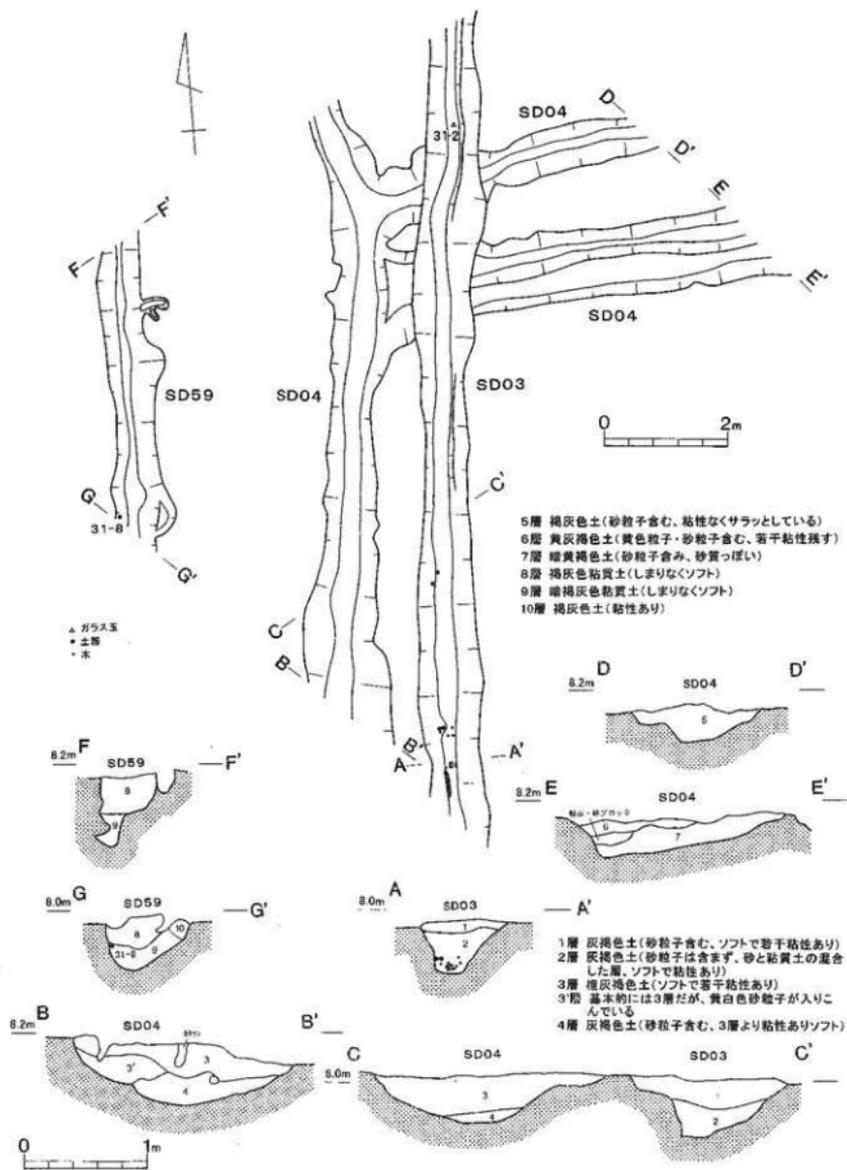


- 1層 暗褐色土(若干粘性あり)
- 2層 暗黄褐色土(赤褐色土と地山が混合したような層で砂質っぽい)
- 3層 暗灰褐色土(砂質っぽいが若干粘性あり、砂粒子多く含む)
- 3層 基本的に3層だが、地山砂子少し含む黄褐色っぽい、砂粒子少なくなる
- 4層 暗黄褐色土(地山との混合層)
- 5層 褐色土(地山がマール状に入っている、砂粒子含む粘性なし)
- 6層 暗褐灰色土(粘性あり、ソフトでベタベタしている)
- 7層 褐色土(砂粒子含む、粘性あり)
- 8層 灰褐色土(砂粒子少し含む、ソフトで若干粘性あり)
- 9層 暗灰褐色土(粘性あり)
- 10層 暗灰褐色土(9層より明るく地山砂子含む、粘性強い)
- 11層 暗褐色土(砂粒子含む、粘性あり)
- 12層 暗灰褐色土(粘質でベタベタしている)
- 13層 灰褐色土(灰白色地山砂子含む)
- 14層 暗灰褐色土(砂粒子含む)
- 15層 褐灰色土(砂・灰白色土ブロック含む)
- 16層 暗灰褐色土(14層より薄い、粘質)
- 17層 黄褐色土(地山ブロック含む)
- 18層 暗灰褐色粘質土
- 19層 暗灰褐色粘質土(黄褐色砂子含む)
- 20層 灰褐色土(砂粒子少し含む、粘性あり)
- 21層 褐色土(砂粒子含む、粘性あり)
- 22層 褐色土(砂粒子含む、粘性あり)
- 23層 褐色粘質土(粘土に近くベタベタしている)
- 24層 褐色土(22層より暗く粘性あり)

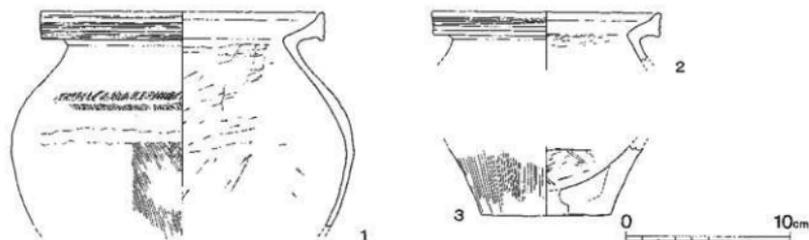
B30図 SD01・02・09・10・18・37~39・44・45・48~50・52・53土層断面図 (S=1/6)



B31図 SD02(1)・SD03(2)・SD04(3・4)・SD59(5~8) 出土遺物実測図 (S=1/6)



B32図 SD03・04・59実測図(平面図 $S=1/60$ ・土層断面図 $S=1/40$)



B33図 SD18出土遺物実測図 (S=1/2)

り開かないようである。B31-5~8はSD59出土の円筒埴輪・須恵器高坏・土師器坏・青磁碗である。5はスカシ部以下の底部破片である。厚手でタガを有するもので、内外からの指押さえにより底端部を薄くしている。6は脚接合部内径が1.8cmで、細身の脚部が付くものと思われる。7は底部糸切りで体部へはくびれをもって立ち上がる。8は太めのしっかりした高台が付き、軸は畳付け以外全てにかかり、釉内部はヒビ割れが文様効果のように入っている。

B31-4は近世の伊万里焼、B31-8は15世紀以降の青磁と考えられるので、これらの溝状遺構は、15世紀以降のものであろう。

SD09・10 (B01・B30図)

C-18~20Gr内、標高8mで検出した。SD09・10は一連の区画溝を成すと考えられ、SD10は長さ5.7m、幅30~40cm、深さ5~10cmを測り、N-30°-Wに位置する。それから北へ2m空けてSD09が検出長6m、幅35~50cm、深さ5~20cmを測り、N-22°-Wに位置し、C18Gr内ではN-32°-Eに方向を変え、調査区外へ延びる直前にも再び西寄りに振る。

出土遺物は、弥生土器から古式土師器にかけての小破片が10数点のみであるが、古墳初頭に該当しよう。

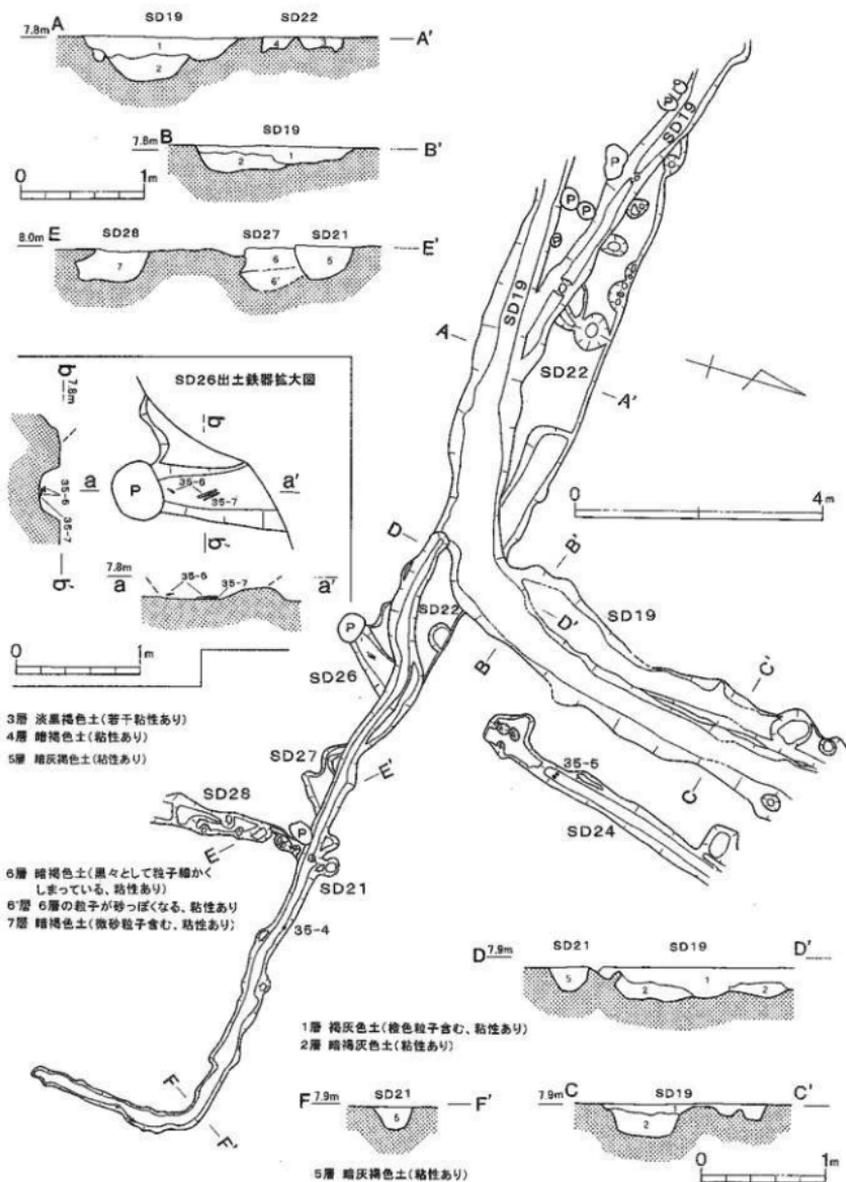
SD18 (B01・B30・B33図)

C-25・26Gr内、標高8mで検出した。歪な溝状を呈しており、中央をSD01・02に壊され、調査区外へと延びている。検出長7.7m、幅1.2~2.8m、深さ7~30cmを測り、N-16°-Wに位置する。

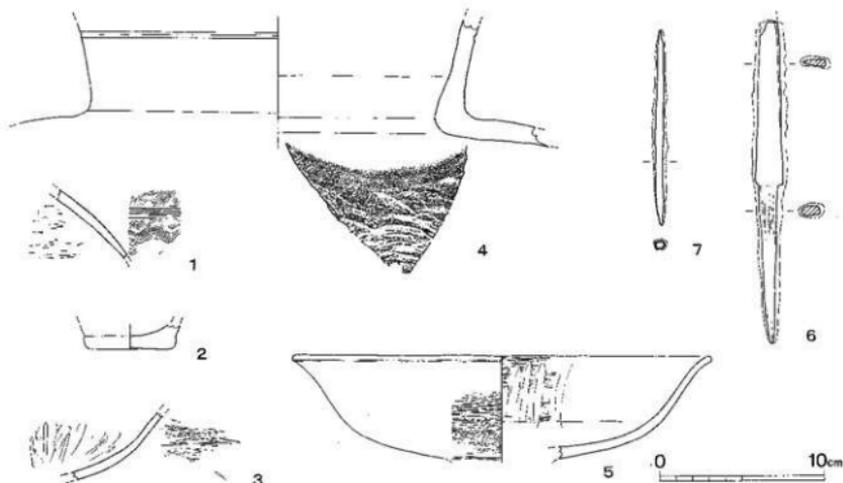
SD01・02の北側から土器 (B33-1) が底面より10~15cm浮いて出土している。

出土遺物は、弥生土器である。B33-1・2は甕で、1の口縁部は上下に拡張し直立して面をもち、口縁面には5条の擬凹線文を施す。頸部はきつく屈曲し、肩部は下がりつつも張り出して胴部下半へとすばまってゆく。胴部最大径位付近は指押さえにより窪ませる。肩部には2段のクシ歯状工具による刺突文を施す。外面全体に使い込んだようにススが附着している。2の口縁部は上に拡張し直立して面をもち、口縁面には3条の凹線文を施す。外面にわずかな朱塗りの痕跡が確認できる。B33-3は底部である。厚くしっかりした平底で、底面は凸凹している。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生後期前葉に該当しよう。



B34図 SD19・21・22・24・26～28実測図(平面図S=1/50・土層断面図S=1/50)及びSD26遺物出土状況図(S=1/50)



B35図 SD19(1~3)・21(4)・24(5)・26(6・7) 出土遺物実測図 (S=1/5)

SD19・21・22・24・26~28 (B34・B35図)

B-28・29、C-29~31、D-29~32Gr内、標高8mで検出した。溝状遺構が集中している場所である。

SD21は粘性のある暗灰褐色土の堆積した溝で、SK27、SD19・22・26~28を切りながら鉤の手状に走る。総延長13.2m、幅30~40cm、深さ10~20cmを測り、W-5°-Nのほぼ東西に若干の曲線を描きながら伸びるが東端で直角に南へ振る。

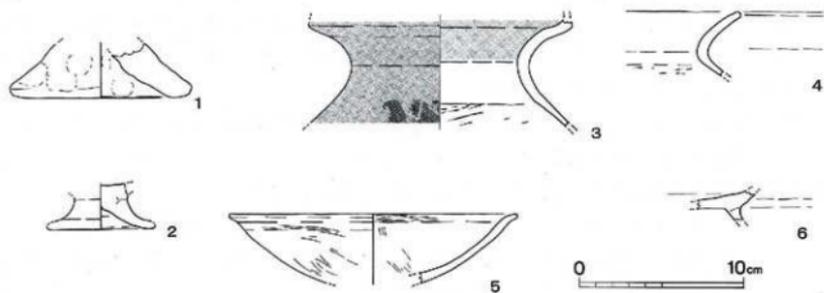
SD19は全体的に2段掘りで2層の堆積状況を呈している。上段が1層、下段が2層と分かれるが、あるいは1層が新しい溝、2層が古い溝である可能性も含んでいる。SD22を切りながらL字状を呈する。検出長15m、幅1~1.5m、西側の二股溝はそれぞれ幅が狭くなり40~60cm、深さ1段目は約10cm、2段目は20~30cmを測り、N-13°-E方向で北から南に伸び、E-6°-N方向で西へ振り二股に分かれる。

SD22はSD19・21に接され詳細は不明であるが、検出長10.6m、幅60~140cm、深さ5~20cmを測り、W-4°-Nに位置する。東端はSD21とともに狭くなっていくので、その付近で立ち上がるものと考えられる。

SD24はSD19にほぼ併走する溝状遺構で、検出長4.3m、幅30~40cm、深さ15~20cmを測り、南端は底面が浅くなり立ち上がる。N-13°-Eに位置する。

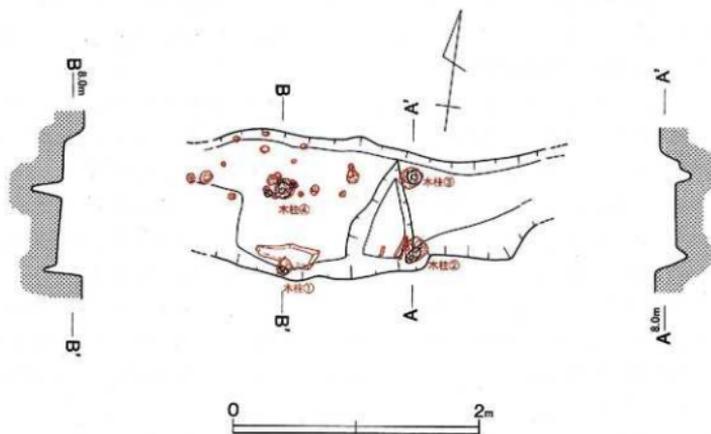
SD26~28はSD21に切られ、部分的に確認できる溝であり、SD22と続く可能性もある。SD26はSD21から南東へ派生したような溝であるが、そこから鉄製品が2点出土した。SD28は南へ伸び、現代用水路跡の南岸に同方向に伸びているSD29の西側の小溝状に続きそうである。

出土遺物は、SD21が弥生土器・土師器の小破片と須恵器が1点、SD19・24・26~28が弥生土器・古式土師器、そして前記したようにSD26からは鉄製品2点で、SD22は皆無である。B35-1~3・5は弥生土



B36図 SD45(1)・48(2)・49(3・4)・50(5)・52(6)出土遺物実測図 (S=1/3)

器から古式土師器で、1は壺または甕の胴部破片である。波状文・平行沈線文・波状文と同一原体により施しており、胎土に淡灰黄色粘土を含む。2は径のやや小さな平底である。3・5はそれぞれSD19・SD24から出土した高坏の坏部である。5は底部がやや平べったくボール状の体部から口縁部は外反する。3・5ともに内面調整はハケ目のちミガキ、そして外面調整は在地土器には見かけない細かい横位のミガキを行っている。胎土・焼成・色調の観察などからも3・5は同一個体の可能性あり。B35-4は須恵器の大型の壺である。若干開いて立ち上がる頸部に沈線が1条巡り、内面タタキはだれた同心円



B37図 SD58実測図 (S=1/6)

状である。B35-6・7は鉄製の刀子とヤスである。6は先端が欠損しているが現存長19.7cmで、刃部10cm、基部9.7cmの直角間のものである。欠損部分より断面を観察すると、刃部の断面三角形の外側にもう一枚あり表面ではそれに着いている有機質のものがめくれた状態で残存する。7はほぼ完形のもので、棒状で両先端が尖り中空の断面四角形のものである。

以上の出土遺物などより、SD21が最も新しく奈良・平安期、SD22が最も古く弥生終末期、他のSD19・24・26～28は弥生終末～古墳初頭に該当すると考えられる。

SD37～40・43・45・48～50・52・53・56・58 (B01・B30・B36・B37図)

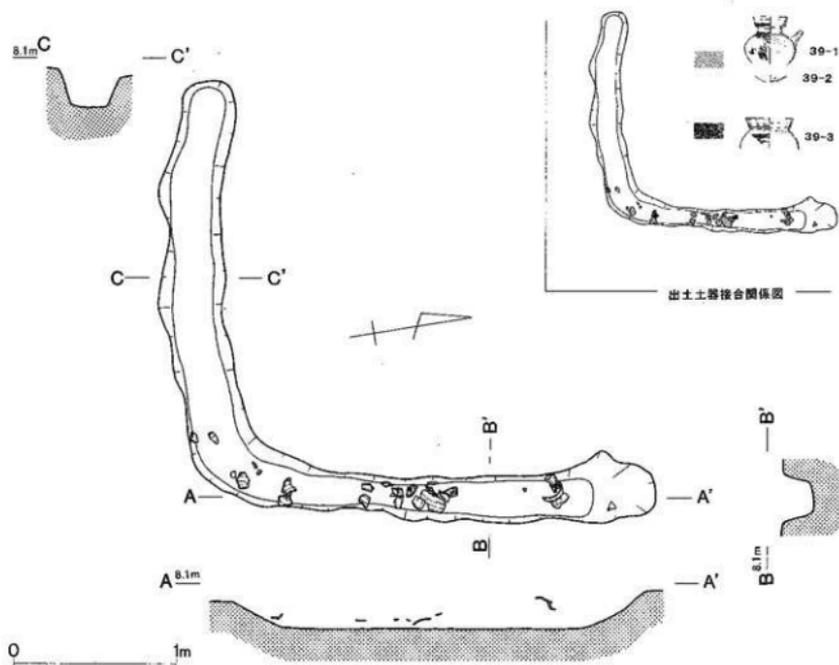
D-35、E-35・36、F-35～39、G-36～39、H-36・37Gr内、後世の攪乱により標高8.4～8.1mで検出した。この地域には溝状遺構が集中しているが、切り合い関係及び出土遺物より大きく2時期に分類することができるので、以下新溝と古溝として分記する。

新溝は、SD37～39・45・48・52・58である。SD37～39は調査区南壁より併走して湾曲して延びる溝状遺構である。SD37・39は途中で立ち上がり終えるが、SD38は現代用水路跡直前でSD58と重複して自然に絶ちきれとなる。SD37は検出長2.9m、幅70cm、深さ12cmを測り、N-2'-Eのほぼ南北に位置し、SD38は検出長14.6m、幅60～70cm、深さ10～35cmを測り、SD39は検出長7.2m、幅50～75cm、深さ10～15cmを測る。SD45・48・52は調査区北壁より併走して南へ延びる溝状遺構である。SD45は検出長8m、幅60～100cm、深さ20～30cmを測り、SD48は検出長6.8m、幅70～100cm、深さ12～25cmを測り、SD52は検出長6.4m、幅80～100cm、深さ25～35cmを測り、3条ともほぼN-10'-Eの南北方向に位置する。SD38にぶつかる直前で後世の遺構及び試掘坑によって攪乱を受け詳細が不明となってしまうが、SD38へと繋がる可能性もある。SD48はSD45を切っており、新溝の中で最も新しい溝である。SD58はSD35が絶ちきれとなる直前に検出した。西側は現代用水路跡に壊され詳細は不明であるが、溝の中に4基の木杭(木杭①～④)を長方形配置で検出した(B37図)。長軸100cm、短軸60cmでE-12'-Nに位置する。板状の石が木杭①・②を押さえるように配置しており、木杭④の周囲には小杭が乱立しており、補助的な役割をした可能性がある。木杭の掘り方はなく直接打ち込んであった。

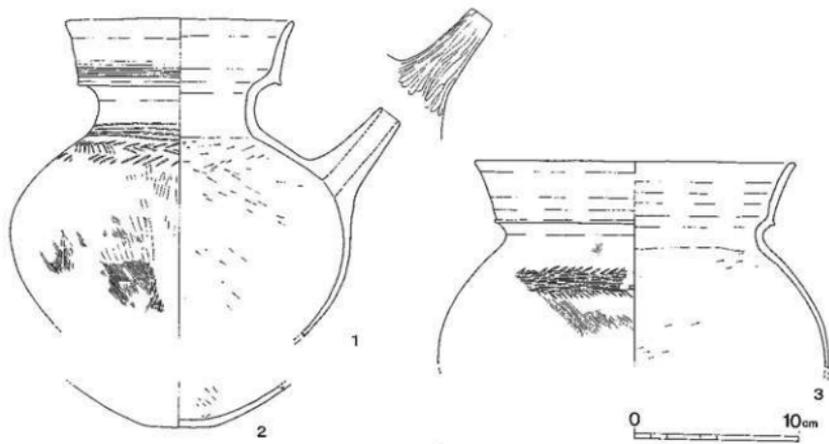
古溝はSD40・43・49・50・53・56である。SD40は調査区東壁より西方向へ延び、後世の遺構及び攪乱に壊されながらSD43へと続き、SD58に切られた後は現代用水路跡を越して、SD49またはSD50へと続き、再び調査区外へと延びていく。SD53は調査区南壁より北へ湾曲して延び、SD47に切られて西へ屈曲する。現代用水路跡に切られたのちは、屈曲したと仮定するとSD49・50に続きそうである。SD56は調査区西壁から東へSD43などと併走して延び、SD55に切られる。SD40・43を連続した溝とすると検出長16.4m、幅40～60cm、深さ5～20cmを測り、W-12'-Nのほぼ東西に位置し、SD49は検出長10m、幅60～70cm、深さ20～30cmを測り、SD50は検出長9.6m、幅40～60cm、深さ5～25cmを測り、2条ともそれぞれW-5'-N、W-13'-Nのほぼ東西に位置する。SD53は検出長7.2m、幅50～200cm、深さ5～10cmを測る。

これらの溝状遺構は、区画溝であると考えられるが、その内容は後世の攪乱及び重複関係が多く今ひとつ不明な点が多い。

出土遺物は、新溝から土師器・須恵器の破片及びSD48からの陶器片1点がある。古溝から古式土師器及びSD49からは混入と思われる須恵器・土師器の小破片がある。B36-1はSD45出土の土師器の脚部である。厚さ1.5～2cmもある極太のもので、指頭圧痕の残る粗雑なつくりである。B36-2はSD48出土



B38図 SD47実測図 (S=1/50)



B39図 SD47出土遺物実測図 (S=1/5)

の古式土師器の低脚杯の脚部であるが、SD44を切っているので、SD44の遺物が混入した可能性のあるものである。接合部から外広がりとなり端部も開いて踏ん張る。脚部と坏部が別々のつくりである。B36-3～5はSD49・50出土の古式土師器である。3は壺で、複合口縁の付くゆるやかな曲線を描くタイプとなろう。外面及び内面口縁部に朱塗りが施してある。4は単純口縁を有する甕で、頸部がゆるやかに屈曲して口縁部に至る。端部断面は矩型で4mm程の平坦面をもつ。3・4は胎土・焼成がよく似ている。5は高杯の坏部である。小型の浅い立ち上がりをもせる体部で、口縁端部は外反する。B36-6はSD52出土の須恵器高台付き坏である。若干外縁に外反ぎみの高台が付く。

以上の出土遺物などより、新溝と古溝はそれぞれ奈良・平安期と弥生終末～古墳初頭に該当する。

SD47 (B38・B39図)

E・F-37Gr内、標高8m強で検出した。直角に曲がったL字状を呈する平面形で、1辺2.5mの総延長5m、幅30～40cm、深さ約20cmを測り、北からN-8°-Eで南に下がり、W-5°-N方向へ西へ延びる。検出当初は方形周溝墓などを想定し、周囲を精査したが、同時期の同様な遺構は存在せず、単独のL字状の溝と判断した。

南北辺からは土器が集中的に出土し、当遺跡唯一の注口土器 (B39-1) となった。破碎された出土状況で、若干の高低差をもっている。

出土遺物は、古式土師器である。B39-1は注口付きの壺である。若干直立ぎみで長めの複合口縁を有するもので、端部は外反して伸ばし、突出部は下からのナデにより斜め下に出る。口縁面には調整時の沈線が残る。注口は肩部に斜め上方向から差し込まれている。頸部には同一原体のヘラによる4条の平行沈線文、肩部には組み合わせの羽状文を施す。B39-2は直接接合はしないが1の底部であると考えられる。小さめの稜線のあまい平底である。B39-3は口縁面のやや長い複合口縁を有する甕である。端部はわずかに平坦状を成すが、外へ伸ばす意識と思われる。突出部は上下からのナデにより小さく出る。肩部には貝殻腹縁による平行沈線文及びクシ歯状工具による刺突文を施す。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生終末期 (草田4～5期) に構築されたものである。

SB01 (B40・B42図)

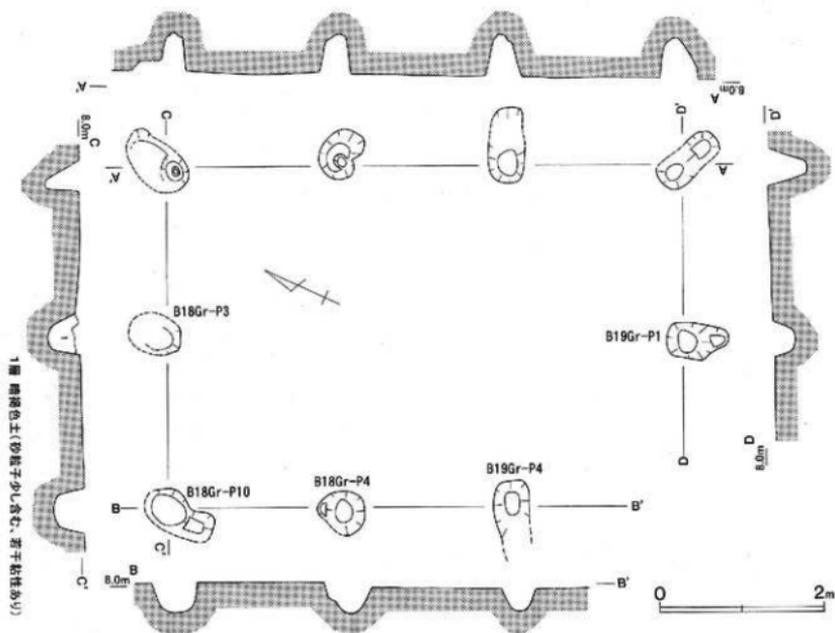
B-18～20、C19Gr内、標高8mで検出した。SK05・SB03を切って、3間×2間の桁行6.2m、梁間4.2m、深さ24～50cmを測り、N-24°-Wに位置する。各柱穴は約90×45cmの平面形態が長楕円形を呈しているものが多く、それらは2段掘りとなっている。

出土遺物は、弥生土器小袋1袋分である。B42-1は複合口縁を有する甕で、口縁端部は若干膨らみ丸くおさめ、口縁面には7条の擬凹線文を施し、中央をナデ消す。外面にはススが付着する。B42-2は脚裾部の破片で、端部は膨らませて丸くおさめ、脚部面には現状で6条の擬凹線文を施す。内外面とも朱塗りの痕跡あり。

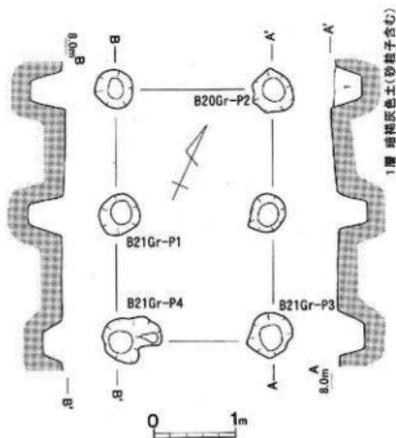
以上の出土遺物などより、当遺構は弥生後期中葉に該当しよう。

SB02 (B41・B42図)

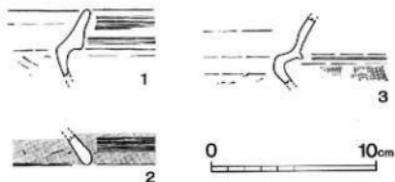
B-20・21Gr内、標高8mで検出した。2間×1間の桁行3.1m、梁間1.9m、深さ24～42cmを測り、N-21°-Wに位置する。各柱穴は直径約50cmのほぼ円形を呈し、同規模である。



B40図 SB01実測図 (S=1/60)



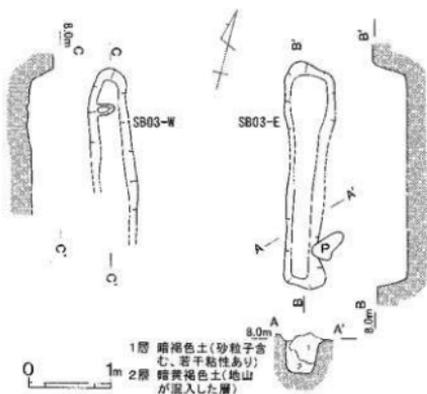
B41図 SB02実測図 (S=1/60)



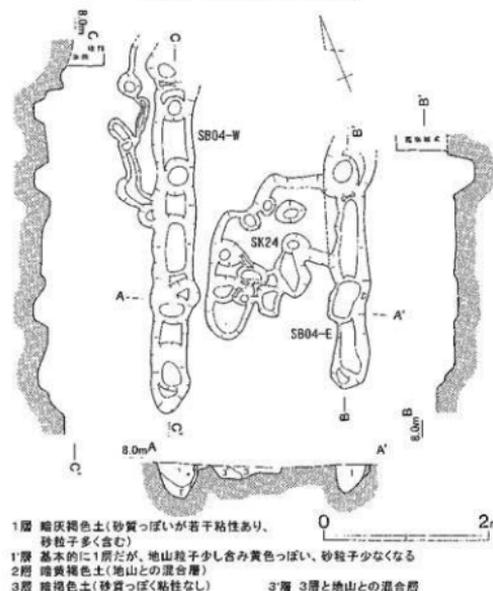
B42図 SB01(1・2)・02(3)実測図 (S=1/5)

出土遺物は、弥生土器から古式土師器が小袋1袋分である。B42-3は複合口縁を有する甕で、突出部が上下の強いナデにより引き出る。

以上の出土遺物より、当遺構は弥生終末期に該当しよう。



B43図 SB03実測図 (S=1/60)



B45図 SB04実測図 (S=1/60)



B46図 SB04出土遺物実測図 (S=1/2)



B44図 SB03出土遺物実測図 (S=1/2)

SB03 (B43・B44図)

B-18・19Gr内、標高8mで検出した。併走する2条の溝から構成される布掘りの掘立柱建物跡で、SB03-Wは調査区外へ延びる。SB03-Eは長さ2.7m、幅30～60cm、深さ38cm、SB03-Wは検出長1.8m、幅30cm、深さ30cm、E-W梁間2.4mを測り、N-12°-Wに位置する。底面は凹凸のほとんどないフラットな状況呈する。

出土遺物は、弥生土器数点である。B44-1・2は甕の口縁部である。1は小さいながらも複合口縁状を呈しており、端部は若干膨らませて丸くおさめ、口縁面には3条の凹線文を施す。内外面とも橙赤色を呈しているが、塗布したのか焼成により落いた色調であるのか判断できず。2はゆるやかに立ち上がった頸部から口縁部に至り、口縁は上下に拡張して面をもち、6条の凹線文を施す。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生後期前半に該当しよう。

SB04 (B45・B46図)

C-23・24Gr内、標高7.9mで検出した。併走する2条の溝から構成される布掘りの掘立柱建物跡で、北側は調査区外へと延びる。SB04-Eは検出長3m、幅34～60cm、深さ22～45cm、SB04-Wは検出長4.5m、幅40～90cm、深

さ22~45cm、E-W梁間2.1mを測り、N-22°-Eに位置する。底面は凹凸が激しく、それぞれ柱穴状を呈し、E-W間それぞれの柱穴がほぼ対応している。SB04-Eに接しているSK24及びSB04-Wの北側が西へ若干広がっているのは、構築時また抜き取り時の掘り方と考えられる。

出土遺物は、弥生土器10数点である。B46-1・2は甕の口縁部で、1は口縁部が下に拡張して面をもち、断面三角形を呈する。口縁面には3条の凹線文を施す。外面頸部以下に縦位のミガキ状の調整痕あり。2は小さいながら複合口縁状を呈し、口縁端部は若干膨らませて丸くおさめ、口縁面には4条の凹線文を施す。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生後期前半に該当しよう。

SB05 (B47・B48図)

B-25・26Gr内、標高7.9mで検出した。併走する2条の溝から構成される布掘りの掘立柱建物跡で、南側は調査区外へと延びる。SB05-Eは検出長4.4m、幅70~100cm、深さ30~44cm、SB05-Wは検出長3.4m、幅62~85cm、深さ35~40cm、E-W梁間2.5mを測り、N-23°-Eに位置する。底面は小さな凹凸はあるが、柱穴状とならずフラットな状況を呈する。ただし、北端と現状での中央位置では柱穴状を呈し、

E-W間が対応する。

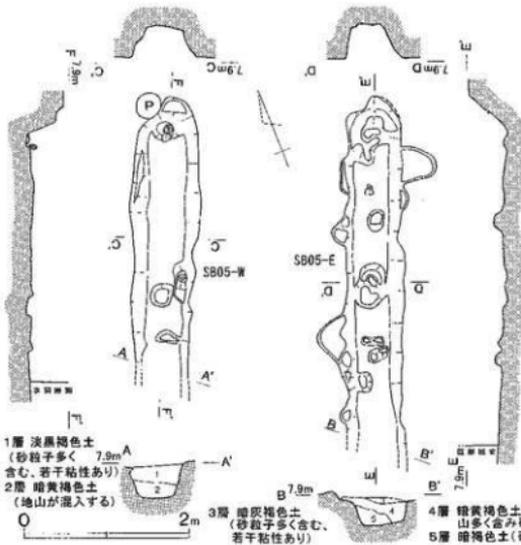
またSB05-E・Wともに底面から10cm大の礫が数点出土し、SB05-Eの最北端では径2cmの木杭が残留していた。

出土遺物は、弥生土器である。B48-1・2は甕の口縁部で、1は口縁が上に内傾しながら拡張して面をもち、3条の浅い小口でナデたような凹線文を施す。2は口縁が上下に拡張して面をもち4条の凹線文を施す。頸部はゆるい「く」の字状に屈曲する。

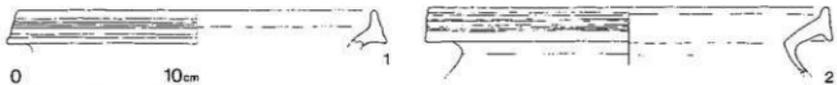
以上の出土遺物などより、当遺構は弥生後期前半に該当しよう。

SB06 (B49図)

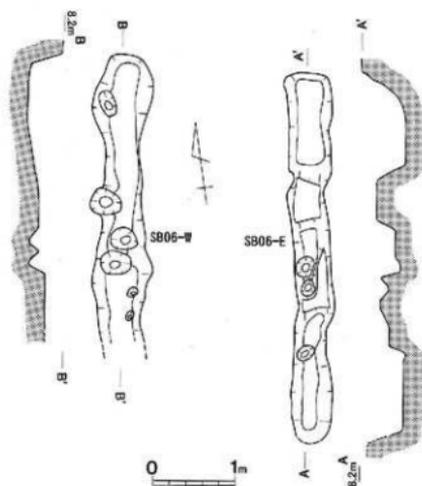
G-38・39Gr内、標高8.2mで検出した。併走する2条の溝から構成



B47図 SB05実測図 (S=1/60)



B48図 SB05出土遺物実測図 (S=1/6)

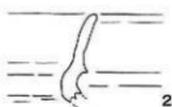
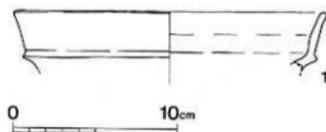


B49図 SB06実測図 (S=1/60)

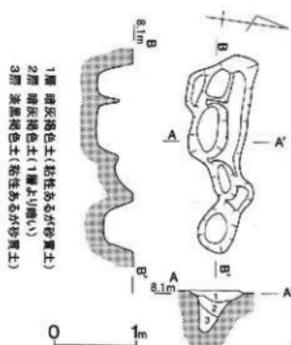
される布掘りの掘立柱建物跡で、南側はSD40・43、SK34にそれぞれ切られている。SB06-Eは検出長4.6m、幅40～50cm、深さ20～55cm、SB06-Wは検出長3.5m、幅40～70cm、深さ20～45cm、E-W梁間2.2～2.4mを測り、N-8°-Eに位置する。底面はフラットな面と立ち上がってステップ状になる面とで凹凸をなしており、E-W間は一応対応している。掘り込みとしてはかなりしっかりしたものであるが、その割に遺物がほとんど出土していない。

出土遺物は、弥生土器の小片が数点である。図下に耐えうるものはなかったが、壺の口縁部から頸部にかけての破片が1点あった。口縁部が上下に拡張して面をもち、口縁面にはしっかりした3条の凹線文を施している。内面頸部以下の調整はケズリで、他の調整はナデを行っている。

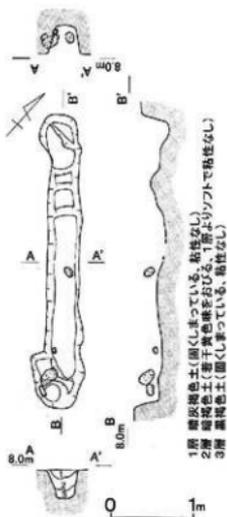
以上より、当遺構は弥生後期前葉と考えられる。



B52図 SB07(1・2)・08(3)出土遺物実測図 (S=1/5)



B50図 SB07実測図 (S=1/60)



B51図 SB08実測図 (S=1/60)

SB07 (B50・B52図)

H37Gr内、標高8.1m強で検出した。4基の柱穴が寄り集まって歪な溝状を呈しているが、北側の調査区外に対応する遺構を想定し、布掘りの掘立柱建物跡として取り扱う。長さ2.4m、幅40～80cm、深さ22～45cmを測り、梁間80cm以上とし、E-10°-Nに位置する。

出土遺物は、古式土師器が小袋1袋分である。B52-1・2は複合口縁を有する甕の口縁部である。1の口縁端部は平坦ぎみに幅をもちおさめ、突出部は上からの強いナデにより出る。2の口縁端部は幅をもつが伸ばして終え、突出部は下からの強いナデにより出る。

以上の出土遺物などより、当遺構は弥生終末期（草田5期）に該当しよう。

SB08 (B51・B52図)

B-21・22Gr内、標高8m弱で検出した。細長い溝状遺構であるが、西側の調査区外に対応する遺構を想定し、布掘りの掘立柱建物跡として取り扱う。長さ3.6m、幅35～60cm、深さ15～35cmを測り、梁間1m以上とし、N-43°-Wに位置する。底面は小さな凹凸があり、特に両端では柱穴状を呈し、他はフラットな状況呈する。底面直上の3層は堅くしまっており故意に締め固めて敷いたような状況呈しており、底面付近より検出した礫数点はその上に載っている。

出土遺物は、弥生土器数点である。B52-3は甕の口縁部から頸部にかけての破片である。口縁は上下に拡張して面をもち3条の凹線文を施す。頸部は緩やかに屈曲する。内面頸部以下は小口でナデたような調整を行っている。

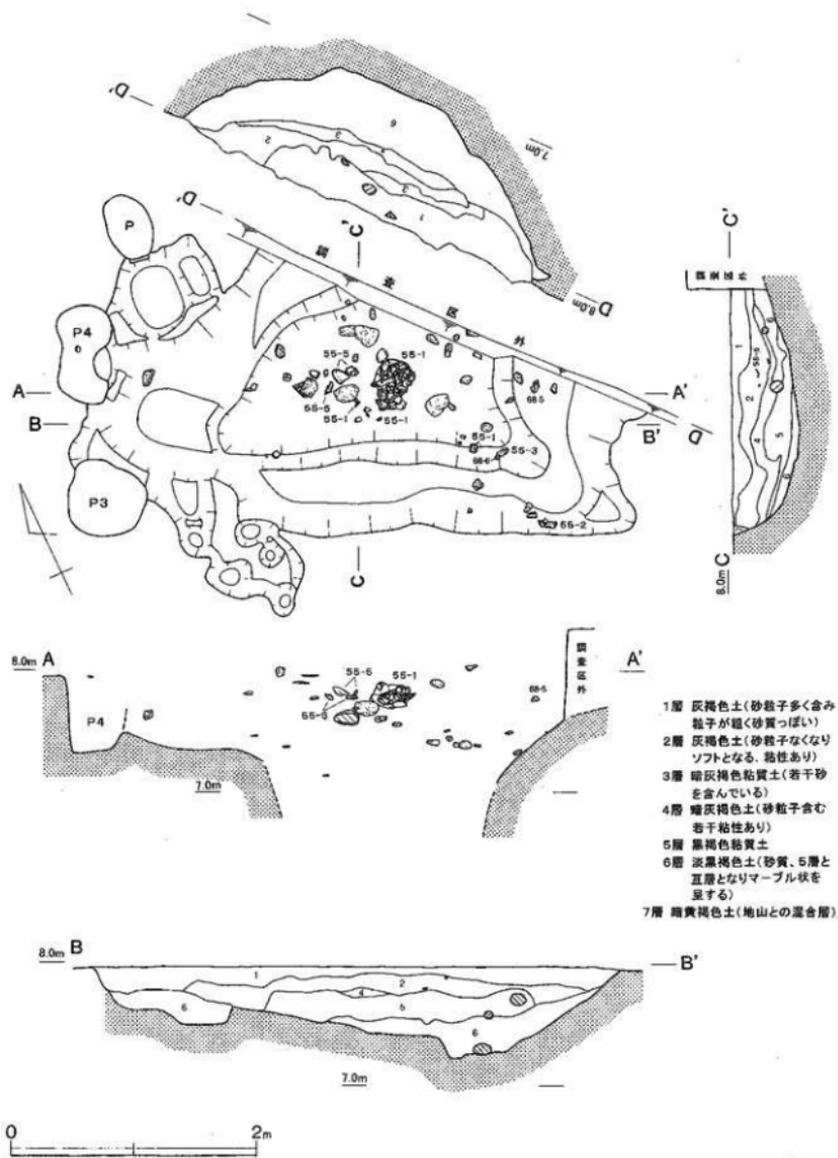
以上の出土遺物などより、当遺構は弥生中期末に該当すると考えられる。

SE01 (B53～B55・B68図)

C-21・22Gr内、標高8mで検出した。東側は調査区外へ延びるが、掘り方は検出長軸4.2m、検出短軸2.3m、深さ1.8mを測り、南辺を長軸方向と捉えるとW-24°-Nに位置する。井戸であると考えられ、ほぼ中央に70×35cmの楕円形水溜部に木枠施設が残存する。半円形の削り抜き材と板材が組み合った半円形を呈している。削り抜き材は長軸径50cm、短軸径32cm、残存高65cmで、板材は幅50cm、残存高40cmを測り、共にスギ材である。木枠外の水溜部壁際に腐植土を検出した。削り抜き材の残骸と考えられる。木枠内中央からは堅石が4点が出土しており、廃棄時に投げ入れられたものと考えられる。

水溜部の周りにある9層は、木枠を構築する際に埋め突き固めているため、木枠を取り上げるまで地山であると確信していたほど安定した層である。6層は井戸廃棄後に人工的に埋めており、砂質土と粘質土が互層状に堆積している。6層上面を中心に6層中からは少量の炭化物を確認した。その上に3・5層などの粘質土が堆積し、その上面及び2層から、ほぼ完形の須恵器高台付き壺（B55-5）、土師器甕（B55-1）を中心として遺物が集中的に出した。

出土遺物は、土師器・須恵器・土製支脚破片・砥石が1コンテナ分である。B55-1～3は土師器で、1・2は甕である。1はほぼ完形品で、口径の割に器高が低く丸みを帯びた体部で底部は丸底である。底部を除く胴部下半にはスガが付着する。2は短めの口縁部が「く」の字に屈曲し、若下開いて胴部へと至る。3は坏で、口縁内面に1条の浅い沈線が施され、体部から底部へは丸みを帯びて移行する。内外面とも朱塗りされ、内面器壁部に放射状暗文、底部にらせん状暗文を施す。B55-4～6は須恵器の蓋坏である。4はかえりの付く蓋で、天井部が低く体部との境に突帯が1条巡る。5・6は高台の付く坏で、



B53図 SE01実測図1 (S=1/40)

